

仙台市文化財調査報告書第128集

富沢・泉崎浦・山口遺跡

——富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第4次・
山口遺跡第5～8次発掘調査報告書——

1989年3月

仙台市教育委員会

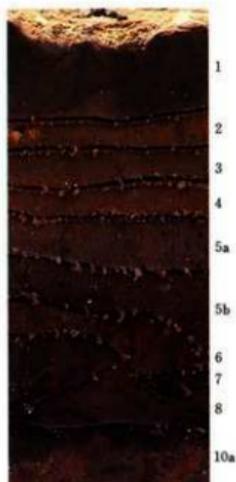
仙台市文化財調査報告書第128集

富沢・泉崎浦・山口遺跡

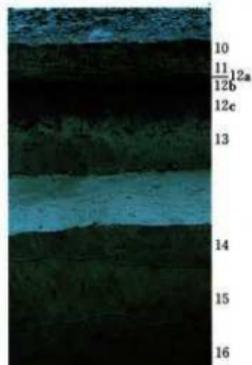
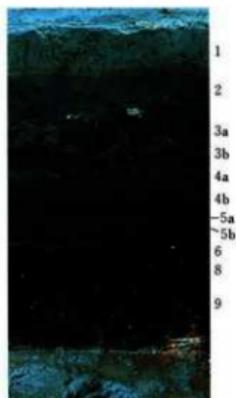
——富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第4次・
山口遺跡第5～8次発掘調査報告書——

1989年3月

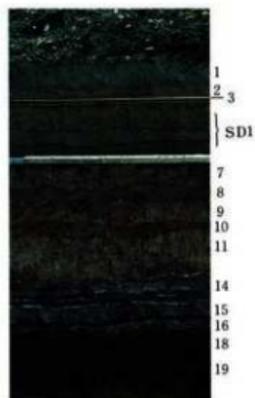
仙台市教育委員会



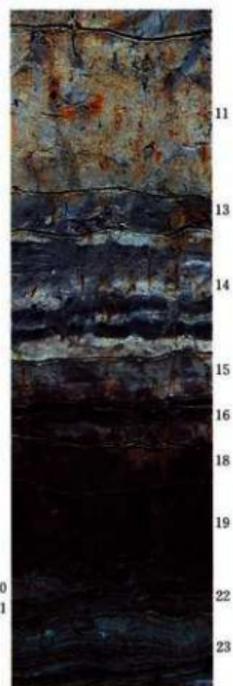
富沢遺跡第36次調査



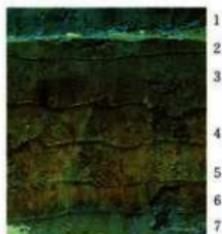
富沢遺跡第39次調査



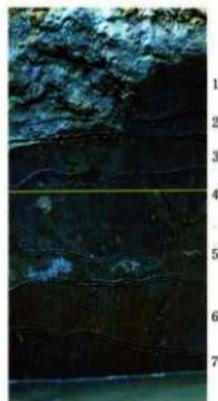
富沢遺跡第37次調査



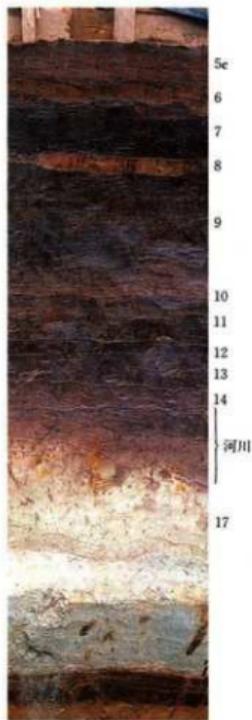
富沢遺跡第40次調査



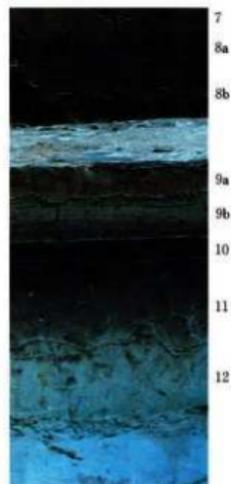
富沢遺跡第41次調査



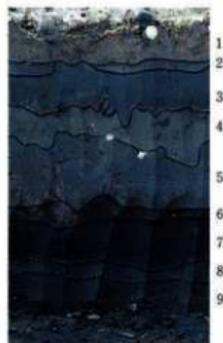
富沢遺跡第44次調査



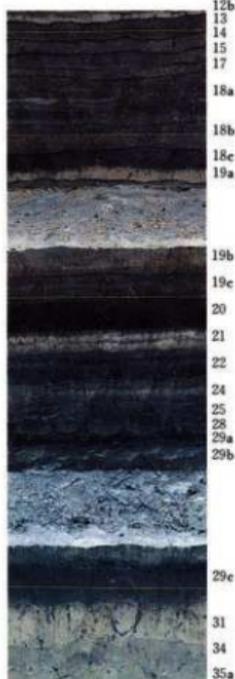
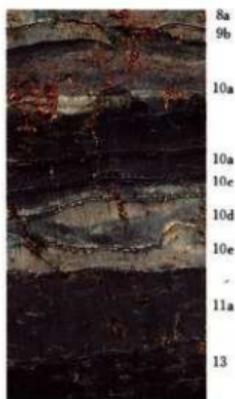
富沢遺跡第43次調査



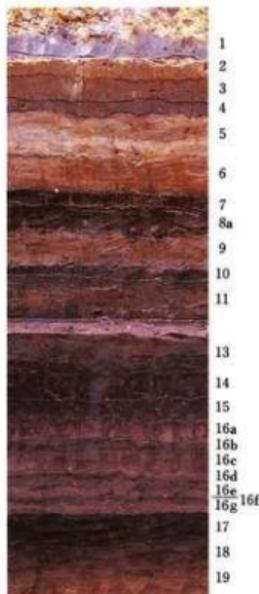
富沢遺跡第42次調査



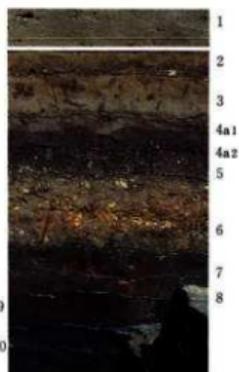
富沢遺跡第47次調査



富沢遺跡第46次調査



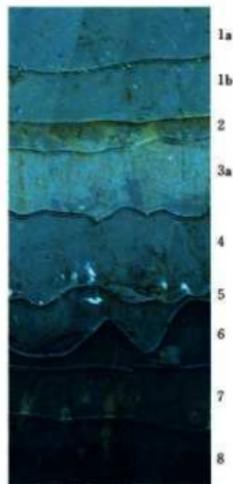
富沢遺跡第48次調査



山口遺跡第5次調査



山口遺跡第6次調査



山口遺跡第8次調査

序 文

1989年度は、仙台市にとって新しい年となります。旧宮城町、旧泉市、旧秋保町と一体となり、政令指定都市としての歩みが始まります。

この仙台に人間が住みついて数万年を経過していることが、私共の埋蔵文化財の発掘で確認されています。その中でも、特に注目される富沢遺跡30次発掘調査では、23,000年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生々しい状態で発見されています。富沢地区は昭和50年代の区画整理事業を契機として年毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄の開業により、一層都市化が進展している所です。

このようなもとの、1988年度（昭和63年度）に、富沢地区に所在します富沢遺跡、泉崎浦遺跡、山口遺跡におきまして、21ヶ所で発掘調査を実施し、その中の18ヶ所について、今回まとめて発表します。この富沢遺跡は、後述のとおり、昭和57年の仙台市体育館および地下鉄南北線の発掘調査により、貴重な成果を得ております。弥生時代から近世までの水田跡が多数検出され、当時の人々の生活様式もしのべられます。

かような貴重な遺跡の保存、活用というのは、市民の皆様の大きな協力がなければ、とても成し得ません。教育委員会としても、文化財の保護につきましては、今後とも、市民の皆様と共に、手をたずさえ、先人の残してくれました遺産を守り育てていきたいと考えておりますので、ご協力の程、お願い申し上げます。

最後になりましたが、調査と整理に参加された皆様と、本書の作成にあたりご助言、ご協力くださいました皆様に心から感謝申し上げます。

平成元年3月

仙台市教育委員会 教育長 藤 井 黎

例 言

1. 本書は、富沢地区受託事業に係わる富沢遺跡・泉崎浦遺跡・山口遺跡発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2. 報告書刊行のための遺物整理は、文化財課調査係 平間亮輔・中富 洋・太田昭夫・佐藤甲二が担当し、陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。
3. 本書の編集は平間亮輔が行った。
4. 関連科学については、花粉分析を守田益宗氏（東北大学）、樹種の同定を鈴木三男氏（金沢大学）・能城修一氏（大阪市立大学）、プラント・オパール分析を杉山真二氏（古環境研究所）、放射性炭素年代測定を日本大学文理学部地理学教室・年代測定室に依頼した。
5. 本文の執筆分担は下記のとおりである。
平間亮輔：第2章第5・9・16節、第4章
中富 洋：第2章第2・4・7・10・12節
佐藤甲二：第1章、第2章第1・3・6・11・14・15・17・18節
太田昭夫：第2章第8節1～4・13節
守田益宗：第2章第8節5（1）
鈴木三男・能城修一：第2章第8節5（2）
杉山真二：第3章
6. 石器の材質の鑑定は、仙台市科学館 佐々木隆氏にお願いした。

凡 例

1. 本報告書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
2. 本書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
3. 本文中使用の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。
4. 図中、本文中使用の方位の北（N）は、全て真北である。
5. 遺構名の略語として、SD：溝跡 SK：土坑を使用した。
6. 土器で中心線が1点鎖線の場合は、図上復元実測図である。
7. 挿図中の基本層序は、調査区設定図中のA地点を基準として、合成したものである。

目 次

第1章 富沢・泉崎浦・山口遺跡のあらまし	1
第2章 調査結果	9
第1節 富沢遺跡第36次調査	9
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物	
4. 遺構の所属年代とまとめ	
第2節 富沢遺跡第37次調査	12
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物	
4. 遺構の所属年代とまとめ	
第3節 富沢遺跡第38次調査	20
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物	
4. 遺構の所属年代とまとめ	
第4節 富沢遺跡第39次調査	28
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物	
4. 遺構の所属年代とまとめ	
第5節 富沢遺跡第40次調査	38
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物	
4. 遺構の所属年代とまとめ	
第6節 富沢遺跡第41次調査	50
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	
第7節 富沢遺跡第42次調査	54
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物	
4. 遺構の所属年代とまとめ	
第8節 富沢遺跡第43次調査	60
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 出土遺物 4. まとめ 5. 分析・同定	
第9節 富沢遺跡第44次調査	66
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物	
4. 遺構の所属年代とまとめ	
第10節 富沢遺跡第45次調査	69
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	

第11節	富沢遺跡第46次調査	71
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第12節	富沢遺跡第47次調査	83
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第13節	富沢遺跡第48次調査	90
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第14節	泉崎浦遺跡第4次調査	97
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第15節	山口遺跡第5次調査	102
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	
第16節	山口遺跡第6次調査	106
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第17節	山口遺跡第7次調査	109
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	
第18節	山口遺跡第8次調査	112
	1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第3章	プラント・オパール分析	117
第4章	まとめ	123

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	3・4	第4図	基本層序	10
第2図	富沢遺跡全体図	5・6	第5図	7層水田跡平面図	11
			第6図	出土遺物	11
(富沢遺跡第36次調査)					
第3図	調査区位置図・設定図	9	(富沢遺跡第37次調査)		

第7回	調査区位置図・設定図	12
第8回	基本層序	13
第9回	4a層水田跡平面図	15
第10回	4a層畦畔断面図	16
第11回	畦畔3・SD1平面・断面図	16
第12回	出土遺物(1)	17
第13回	出土遺物(2)	18

(富沢遺跡第38次調査)

第14回	調査区位置図・設定図	20
第15回	基本層序	21
第16回	SD1・2平面・断面図	23
第17回	出土遺物(1)	23
第18回	10d層畦畔断面図	24
第19回	10d層水田跡平面図	25
第20回	出土遺物(2)	26

(富沢遺跡第39次調査)

第21回	調査区位置図・設定図	28
第22回	基本層序	29
第23回	3層水山跡平面図	30
第24回	3層畦畔・溝・枕断面図	31
第25回	出土遺物(1)	32
第26回	4a層水田跡平面・断面図	34
第27回	出土遺物(2)	35
第28回	出土遺物(3)	37

(富沢遺跡第40次調査)

第29回	調査区位置図・設定図	38
第30回	基本層序	39
第31回	SD1・2平面・断面図	40
第32回	SD3~5平面・断面図	41
第33回	SD6~9平面・断面図	42
第34回	21層水田跡平面・断面図	43
第35回	出土遺物(1)	44
第36回	出土遺物(2)	45
第37回	40次4層、15次3a層平面図	47

第38回	40次5層、15次3b層平面図	48
第39回	40次6層、15次3b層平面図	48
第40回	40次21層、15次13b層平面図	49

(富沢遺跡第41次調査)

第41回	調査区位置図・設定図	50
第42回	基本層序	50
第43回	出土遺物	52
第44回	杭(3層)平面・SD14層平面・断面図	53

(富沢遺跡第42次調査)

第45回	調査区位置図・設定図	54
第46回	基本層序	55
第47回	4層水田跡平面・断面図	56
第48回	SD1・SK1~7平面・断面図	57
第49回	SD2平面・断面図	58
第50回	出土遺物	59

(富沢遺跡第43次調査)

第51回	調査区位置図・設定図	60
第52回	基本層序	61
第53回	22層上両樹木出土状況	62

(富沢遺跡第44次調査)

第54回	調査区位置図・設定図	66
第55回	基本層序	67
第56回	SK1平面・断面図	68

(富沢遺跡第45次調査)

第57回	調査区位置図・設定図	69
第58回	基本層序	70

(富沢遺跡第46次調査)

第59回	調査区位置図・設定図	71
第60回	基本層序	72
第61回	9a層水田跡平面・断面図	74
第62回	出土遺物(1)	74

第63回	10d 層水田跡平面・断面図	75・76
------	----------------	-------

第64回	11a 層水田跡平面・断面図	79
------	----------------	----

第65回	出土遺物(2)	80
------	---------	----

第66回	出土遺物(3)	81
------	---------	----

(富沢遺跡第47次調査)

第67回	調査区位置図・設定図	83
------	------------	----

第68回	基本層序	84
------	------	----

第69回	4層水田跡平面・断面図	85
------	-------------	----

第70回	出土遺物(1)	86
------	---------	----

第71回	SD 1 平面・断面図	87
------	-------------	----

第72回	出土遺物(2)	88
------	---------	----

第73回	47次4層・34次4層平面図	89
------	----------------	----

(富沢遺跡第48次調査)

第74回	調査区位置図・設定図	90
------	------------	----

第75回	基本層序	91
------	------	----

第76回	8a層・11層水田跡平面図	92
------	---------------	----

第77回	出土遺物(1)	93
------	---------	----

第78回	出土遺物(2)	93
------	---------	----

第79回	出土遺物(3)	94
------	---------	----

第80回	出土遺物(4)	95
------	---------	----

(泉崎浦遺跡第4次調査)

第81回	調査区位置図・設定図	97
------	------------	----

第82回	基本層序	98
------	------	----

第83回	SD 2 平面図	99
------	----------	----

第84回	SD 1・2・断面図	100
------	------------	-----

第85回	SD 3 平面図	100
------	----------	-----

第86回	出土遺物	101
------	------	-----

(山口遺跡第5次調査)

第87回	調査区位置図・設定図	102
------	------------	-----

第88回	基本層序	103
------	------	-----

第89回	SD 1 平面図	104
------	----------	-----

第90回	4a層水田跡平面・断面図	104
------	--------------	-----

第91回	5層上山平面図	105
------	---------	-----

第92回	出土遺物	105
------	------	-----

(山口遺跡第6次調査)

第93回	調査区位置図・設定図	106
------	------------	-----

第94回	基本層序	107
------	------	-----

第95回	6層水田跡平面図	108
------	----------	-----

第96回	出土遺物	108
------	------	-----

(山口遺跡第7次調査)

第97回	調査区位置図・設定図	109
------	------------	-----

第98回	基本層序	109
------	------	-----

第99回	4a層水田跡平面・SD 1 断面図	110
------	-------------------	-----

第100回	出土遺物	111
-------	------	-----

第101回	山口遺跡5・7次4層水田跡平面図	111
-------	------------------	-----

(山口遺跡第8次調査)

第102回	調査区位置図・設定図	112
-------	------------	-----

第103回	基本層序	113
-------	------	-----

第104回	4層水田跡平面・断面図	114
-------	-------------	-----

第105回	出土遺物	115
-------	------	-----

第106回	5層水田跡平面・断面図	116
-------	-------------	-----

第107回	イネのプラント・オバールの 検出状況(1)	121
-------	--------------------------	-----

第108回	イネのプラント・オバールの 検出状況(2)	122
-------	--------------------------	-----

第109回	富沢遺跡第28・29・38・46次 調査区11a層水田跡	124
-------	---------------------------------	-----

第110回	富沢遺跡第28・29・38・46次 調査区10d層水田跡	125
-------	---------------------------------	-----

表 目 次

第1表	遺跡地名表	2
第2表	泉崎浦・山口遺跡調査次数表	7・8
第3表	昭和63年度富沢・泉崎浦・山口遺跡調査要項	7・8
第4表	富沢・山口・泉崎浦遺跡の各層位における稲作の可能性	119
第5表	稲作の可能性が認められた各層における稲稈生産総量および 稲作期間の推定値	120
第6表	富沢遺跡第36～38次調査出土遺物集計表	127
第7表	高沢遺跡第39～42次調査出土遺物集計表	128
第8表	富沢遺跡第43～47次調査出土遺物集計表	129
第9表	富沢遺跡第48次・泉崎浦遺跡第5次・山口遺跡第5～7次調査 出土遺物集計表	130
第10表	山口遺跡第8次調査出土遺物集計表	131

写真図版目次

遺 構	写真11	3a 層出土杭 (No. 20)	137	
(富沢遺跡第36次調査)	写真12	3a 層出土杭 (No. 13～15)	137	
写真1	7層水田跡	写真13	4a 層水田跡	138
写真2	7層水田跡畦畔断面 (東壁)	写真14	4a 層水田跡石堀出土状況	138
(富沢遺跡第37次調査)	(富沢遺跡第40次調査)			
写真3	4a 層水田跡 (畦畔1・2)	写真15	4層上面遺構 (SD1. 2)	138
写真4	4a 層水田跡 (畦畔3・SD1)	写真16	5層上面遺構 (SD3～5)	139
写真5	4a 層水田跡 (畦畔4)	写真17	6層上面遺構 (SD6～9)	139
(富沢遺跡第38次調査)	(富沢遺跡第41次調査)			
写真6	10d 層水田跡	写真18	4層上面遺構 (SD1)	139
写真7	大畦畔中の木片出土状況	(富沢遺跡第42次調査)		
写真8	10d 層水田跡人畦畔断面 (南壁)	写真19	4層水田跡	140
写真9	19c 層土器出土状況	写真20	6a 層上面遺構 (SD1. SK1～7)	140
(富沢遺跡第39次調査)	写真21	11層上面石製品出土状況	140	
写真10	3a 層水田跡	写真22	12層上面遺構 (SD3)	141

(高沢遺跡第43次調査)

写真23	19~22層断面	141
写真24	22層上面樹木出土状況(1)	141
写真25	22層上面樹木出土状況(2)	142

(富沢遺跡第44次調査)

写真26	6層上面遺構(SK1)	142
------	-------------	-----

(富沢遺跡第46次調査)

写真27	10d層水田跡(1)	142
写真28	10d層水田跡(2)	143
写真29	10d層水田跡(3)	143
写真30	10d層水田跡(4)	143
写真31	10d層水田跡大畦畔断面(北壁)	144
写真32	10d層水田跡大畦畔断面(西壁)	144
写真33	10d層水田跡畦畔断面(西壁)	144
写真34	11a層水田跡	145
写真35	11a層水田跡石器出土状況	145

(高沢遺跡第47次調査)

写真36	4層水田跡	145
写真37	4層水田跡大畦畔上の 灰白色火山灰検出状況	146
写真38	4層水田跡土器出土状況	146
写真39	8層上面遺構(SD1)	146
写真40	8層石器出土状況	147

(富沢遺跡第48次調査)

写真41	8a層水田跡疑似畦畔確認状況	147
写真42	11層石器出土状況	147
写真43	調査区全景	148

(泉崎浦遺跡第4次調査)

写真44	10層上面遺構(SD3)	148
写真45	SD1・2断面(東壁)	148

(山口遺跡第5次調査)

写真46	4a層水田跡・畦畔・SD2確認状況	149
写真47	4a層水田跡・畦畔・SD2検出状況	149

(山口遺跡第6次調査)

写真48	6層水田跡	149
------	-------	-----

(山口遺跡第7次調査)

写真49	SD2断面(東壁)	150
------	-----------	-----

(山口遺跡第8次調査)

写真50	4層水田跡	150
写真51	5層水田跡疑似畦畔確認状況	150

遺物

写真52	富沢遺跡第36次調査出土遺物	151
写真53	富沢遺跡第37次調査出土遺物	151
写真54	富沢遺跡第38次調査出土遺物	152
写真55	富沢遺跡第39次調査出土遺物(1)	152
写真56	富沢遺跡第39次調査出土遺物(2)	153
写真57	富沢遺跡第40次調査出土遺物	154
写真58	富沢遺跡第41次調査出土遺物	155
写真59	富沢遺跡第42次調査出土遺物	155
写真60	富沢遺跡第46次調査出土遺物	156
写真61	富沢遺跡第47次調査出土遺物	157
写真62	富沢遺跡第48次調査出土遺物(1)	158
写真63	富沢遺跡第48次調査出土遺物(2)	159
写真64	泉崎浦遺跡第4次調査出土遺物	160
写真65	山口遺跡第5次調査出土遺物	160
写真66	山口遺跡第5次調査出土遺物	160
写真67	山口遺跡第7次調査出土遺物	160
写真68	山口遺跡第8次調査出土遺物	160
写真69	富沢遺跡第43次調査出土樹木 顕微鏡写真	161

第1章 富沢・泉崎浦・山口遺跡のあらまし

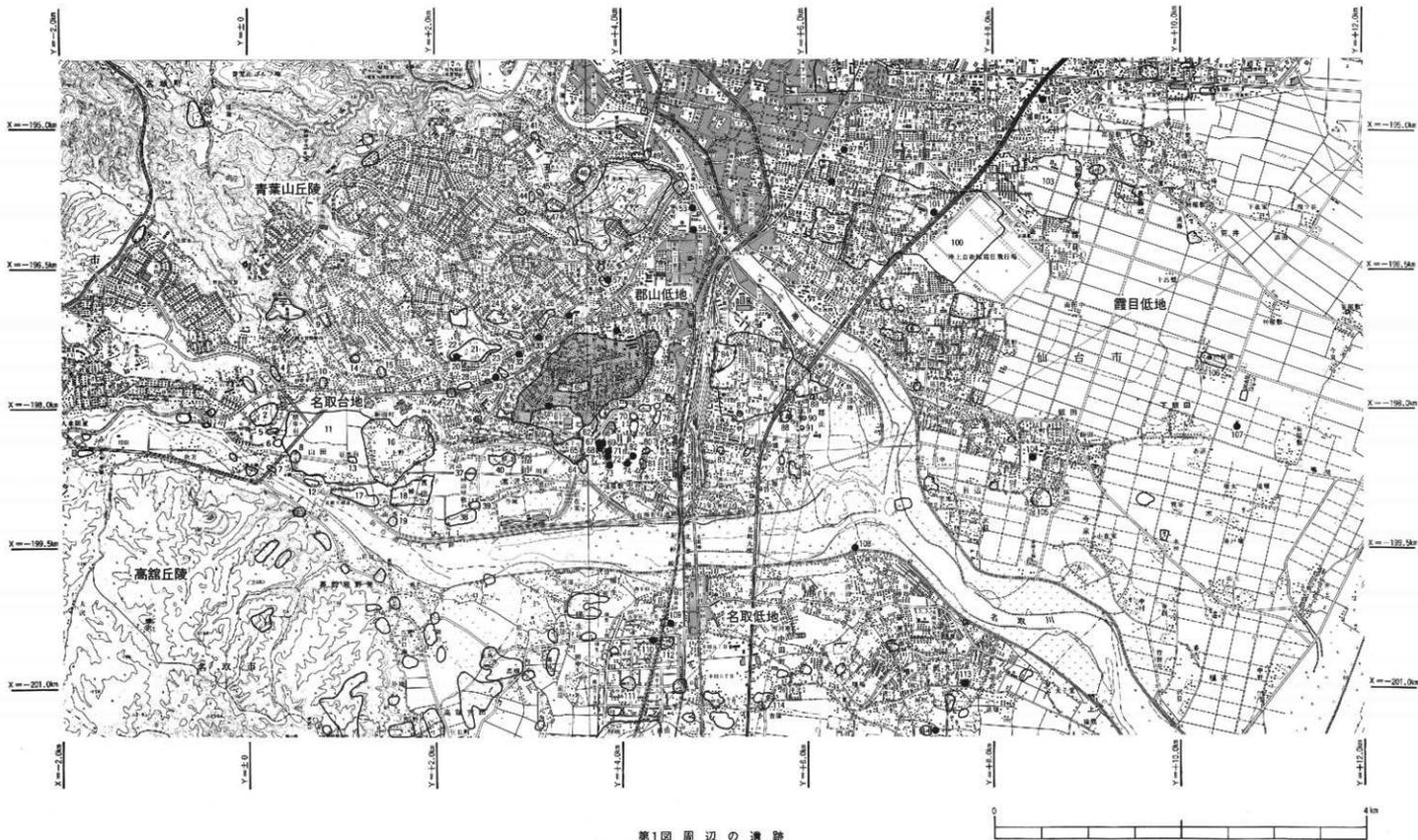
富沢遺跡は仙台市南西部の富沢・泉崎・袋東・長町南等に広がる、総面積約82haに及ぶ水田跡を中心とする遺跡である。この遺跡は、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野—郡山低地（経済企画庁：1967）—の後背湿地を中心としている。昭和57年、仙台市では富沢遺跡の南に隣接する山口遺跡で、初めて水田跡（平安時代）が検出された（田中：1984）。また、同年より開始された、富沢地区の高速鉄道の試掘調査結果においても当地域に広大な水田跡の存在が予割された。昭和58年、仙台市は、これら調査成果に地形的配慮を加え、新たに「富沢水田遺跡」を登録した（昭和62年「富沢遺跡」に改称）。富沢遺跡は昨年度まで、34次に渡る調査が実施されている。その結果、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されている。この内、弥生時代の水田跡の検出は、東北地方中部における稲作農耕の起源を解明する上での、貴重な資料となった。弥生時代の水田跡のさらに数2～3m下層では、後期旧石器時代（第30次）、縄文時代早・前期（第15・28・30次）の遺物も確認されている。

泉崎浦遺跡は、富沢遺跡内のほぼ中央部の微高地部分を中心とする遺跡である。東西に細長く、遺跡面積は約5ha程である。山口遺跡は、富沢遺跡の南に隣接し、名取川支流、旧笹川の北岸の自然堤防上に位置する。遺跡面積は約15haである。遺跡範囲の北側では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含む。両遺跡とも集落跡として登録されている遺跡であるが、水田跡も検出されている。ともに最近調査件数が多くなってきたため、今後の調査地点を明確にするために、富沢遺跡同様、調査地区ごとに次数を設けることとした。泉崎浦遺跡は昭和55年の調査区を第1次、山口遺跡は昭和53・54年の富沢土地区画整理に伴う調査区を第1次とした。従って、昨年度までに、泉崎浦遺跡は3次、山口遺跡は4次の調査次数を数える。これらの位置及び調査成果は第1図、第1表に掲載した。

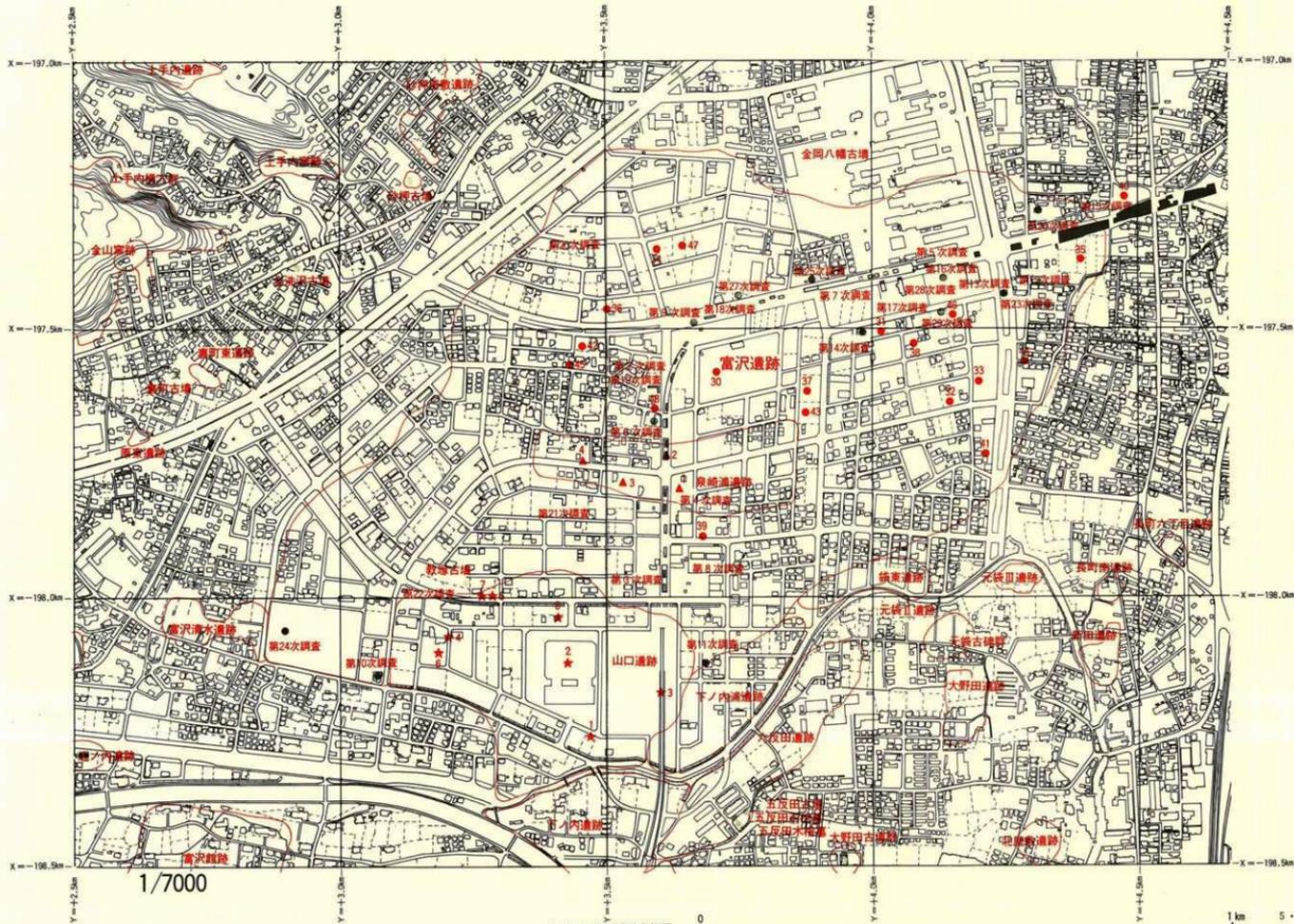
尚、富沢遺跡・泉崎浦遺跡・山口遺跡の歴史的環境及び地形と地質に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野：1987）・（豊島：1987）・山口遺跡第2次調査報告書（田中：1984）に詳しい記載があるので、これを参照されたい。

第1表 遺跡地名表

No	遺跡名	地域	年代	No	遺跡名	地域	年代
1	富沢西跡	後古墳地	縄文~近世	58	金沢八幡古蹟	後古墳地	古蹟
2	山田上ノ白道跡	段丘	石山寺跡(縄文)~中世後半~内洋	59	野津古蹟	後古墳地	古蹟
3	三郎西跡	段丘	江古田跡(縄文)~古来~今	60	野津西跡	自然遺跡、後古墳地	縄文・古蹟・平安~近世
4	上野山遺跡	段丘	縄文	61	山二遺跡	自然遺跡、後古墳地	縄文(中)・後古墳地・平安~中世
5	石山遺跡A区跡	段丘	縄文、平安	62	下ノ大塚遺跡	自然遺跡	奈良、平安
6	川川遺跡	段丘	平安	63	東塚遺跡	自然遺跡	奈良、平安
7	酒田西遺跡	段丘	縄文、平安	64	伊志山遺跡	自然遺跡	古蹟、奈良、平安
8	竹の内前遺跡	段丘	奈良、平安	65	下ノ内遺跡	自然遺跡	縄文(中)・後古墳地・平安
9	龍崎山遺跡	段丘	縄文	66	六反田遺跡	自然遺跡	縄文(中)・後古墳地・古蹟、奈良、平安
10	町山跡	段丘	縄文、古蹟、平安	67	五反田石川遺跡	自然遺跡	古蹟
11	山田及石山遺跡	段丘	奈良~平安	68	五反田本郷跡	自然遺跡	古蹟
12	酒田東塚遺跡	段丘	縄文、平安	69	五反田古蹟	自然遺跡	古蹟
13	石地前遺跡	段丘	平安	70	北塚石川遺跡	自然遺跡	奈良、平安
14	後庄遺跡	段丘	奈良、平安	71	大野田1号遺跡	自然遺跡	古蹟
15	八幡西遺跡	段丘	平安	72	大野田2号遺跡	自然遺跡	古蹟
16	上野遺跡	段丘	縄文(中)・奈良、平安	73	春日谷遺跡	自然遺跡	古蹟
17	野津西遺跡	段丘	縄文、奈良、奈良、平安	74	高塚古蹟	自然遺跡	古蹟
18	東ノ東遺跡	自然遺跡、後古墳地	奈良、奈良、平安(中世)	75	瓦葺西遺跡	自然遺跡	奈良、平安
19	酒田西遺跡跡	自然遺跡	奈良、平安	76	野津西遺跡	自然遺跡	奈良、平安
20	富沢東跡	古蹟跡	古蹟、奈良、平安	77	長町6丁目遺跡	自然遺跡	奈良、平安
21	三神東遺跡	段丘	古蹟(中、前)	78	新庄遺跡	自然遺跡	奈良、平安
22	三神東西遺跡	段丘	古蹟	79	大野田遺跡	自然遺跡、後古墳地	縄文(後期)・奈良
23	金山古蹟	丘陵跡	古蹟	80	北野西遺跡	自然遺跡、後古墳地	奈良、平安
24	土下内遺跡	丘陵	縄文、奈良、平安	81	長町西遺跡	自然遺跡	古蹟?
25	土下内跡	丘陵跡	古蹟~奈良	82	石ノ塚古蹟	自然遺跡	古蹟
26	砂野西遺跡	段丘	奈良、平安	83	石ノ塚古蹟	自然遺跡	奈良、平安
27	西内古蹟	段丘	奈良、平安?	84	西ノ塚遺跡	自然遺跡	奈良、古蹟
28	新庄跡	段丘	奈良、古蹟、平安	85	葛山遺跡	自然遺跡、後古墳地	古蹟、奈良
29	東塚遺跡	段丘	古蹟、奈良、平安	86	北塚古蹟	自然遺跡	古蹟、江戸
30	野津古蹟	段丘	古蹟	87	新庄跡(古蹟群)		鎌倉(後期)
31	野津東遺跡	段丘	平安	88	北塚遺跡	自然遺跡、後古墳地	古蹟、奈良、平安
32	金沢川古蹟	段丘	古蹟	89	七地古蹟群		鎌倉(後期)
33	砂野古蹟	段丘	古蹟	90	北内古蹟群		鎌倉(後期)
34	上塚古蹟	後古墳地	古蹟	91	北内古蹟群		鎌倉(後期)
35	富沢上ノ白道跡	段丘	縄文、平安	92	野津西遺跡	自然遺跡	古蹟、奈良、平安
36	富沢西水遺跡	自然遺跡	奈良、平安	93	久ノ下1号遺跡	自然遺跡、後古墳地	古蹟、奈良、平安
37	野津西水遺跡	後古墳地	縄文、奈良、平安	94	久ノ下2号遺跡	自然遺跡	古蹟、奈良、平安
38	六本松遺跡	自然遺跡、後古墳地	奈良、平安	95	藤田跡(古蹟)	自然遺跡	奈良
39	野津山崎西遺跡	自然遺跡、後古墳地	縄文、奈良、平安	96	藤田跡(古蹟)	自然遺跡	奈良
40	野津西跡	自然遺跡、後古墳地	古蹟	97	法華堂古蹟	自然遺跡	古蹟(後期)
41	山崎東遺跡	丘陵	縄文(中後)	98	藤田古蹟	自然遺跡	古蹟
42	愛宕山崎西跡	丘陵跡	奈良~奈良	99	野津西跡	自然遺跡	中世、江戸
43	山崎二丁ノ白道跡	丘陵	奈良~平安	100	野津東遺跡	自然遺跡、後古墳地	奈良、古蹟、奈良、平安、中世
44	ノノ沢遺跡	丘陵	縄文	101	遠見塚古蹟	自然遺跡	古蹟(中世)
45	八木ノ崎西遺跡	丘陵	縄文、奈良、平安	102	神川町跡(古蹟)	沖積平野	古蹟
46	野ノ丘遺跡	丘陵	縄文、奈良、平安	103	仙石家跡(古蹟群)	後古墳地	奈良
47	野ノ丘遺跡	丘陵	縄文	104	藤田古蹟	沖積平野	古蹟
48	野ノ丘遺跡	丘陵跡及び段丘	縄文(中)~奈良	105	仙石家跡	自然遺跡	奈良、古蹟、平安~近世
49	大塚中塚西跡	丘陵跡	古蹟~奈良	106	藤田古蹟	沖積	奈良
50	野津山崎西跡	丘陵跡	古蹟、奈良	107	藤田跡(古蹟群)	自然遺跡	古蹟(後期)
51	野津西跡	丘陵跡	縄文	108	山崎大塚山古蹟	自然遺跡	古蹟
52	ノノ沢西跡	丘陵	古蹟	109	伊豆野崎西古蹟	自然遺跡	古蹟
53	野津古蹟	自然遺跡	古蹟	110	安久野崎古蹟	自然遺跡	古蹟
54	小塚西遺跡	自然遺跡	古蹟	111	野津西跡	自然遺跡	古蹟
55	野津山崎西跡	丘陵	古蹟? 奈良、平安	112	安久野崎跡	自然遺跡	奈良、古蹟
56	野津一丁目遺跡	段丘	縄文、奈良? 奈良、平安	113	仙石家跡	自然遺跡	古蹟
57	野津古蹟	後古墳地	古蹟	114	野津西遺跡	自然遺跡、後古墳地	奈良、平安、中世



第1回周辺の遺跡



第2図 富沢遺跡全体図

第2表 泉崎浦・山口遺跡調査表

調査回数	所在地	調査期間	調査面積	立地	担当職員	調査内容	文献
泉崎浦第1次	富沢字泉崎浦	昭和55年3月1日～3月5日	61㎡	微高地縁辺	渋谷孝雄、田中則和、高橋彦之	縄文時代後期初頭の土坑・一括遺物	渋谷：1980
泉崎浦第2次	泉崎1丁目	昭和57年9月13日～12月25日	1200㎡	微高地上・後背湿地	吉岡恭平、田中則和	平安時代以前・平安時代の水田跡、古墳時代の住居跡・ピット・溝、近世の墓坑群	吉岡：1983
泉崎浦第3次	泉崎1丁目19-8-10	昭和62年10月26日～11月30日	564㎡	微高地上・後背湿地	主浜光朗	弥生時代の水田跡、古墳時代の遺物包含層・ピット群、平安時代以降の竪穴状遺構・井戸	主浜：1988
山口 第1次	富沢字山口・字下ノ内浦地	昭和53年3月1日～3月31日 昭和54年6月4日～12月10日 昭和54年10月15日～11月30日	180㎡ 800㎡ 444㎡	自然堤防上	結城慎一、工藤晋司、渋谷孝雄、佐藤 洋	縄文時代中期末の埋燼・後期の土坑	佐藤：1981
山口 第2次	富沢1丁目4番	昭和56年4月13日～12月24日 昭和57年3月1日～9月4日	9700㎡	自然堤防上・後背湿地	田中則和、主浜光朗、結城慎一、福井まどろ、倉倉孝幸、佐藤洋、佐藤甲二、渡部弘美、工藤晋司、成瀬 茂	縄文時代早期末・前期・後期前葉の遺物、晩期の河川跡、弥生時代の遺物包含層・埴輪残片、古墳時代の溝跡、平安時代前期の墓塔跡、平安時代の墓塔跡・水田跡、中世の水田跡、近世の河川跡・遺物包含層	田中他：1984
山口 第3次	富沢字中谷地	昭和56年8月25日～12月28日	780㎡	自然堤防上	吉岡恭平、高橋謙也	縄文時代後期の遺物包含層・弥生時代後期の遺物包含層	吉岡：1982
山口 第4次	富沢1丁目10-8	昭和59年6月26日～7月24日	33㎡	後背湿地	田中則和	平安時代・中世の水田跡	田中：1985

第3表 昭和63年度富沢・泉崎浦・山口遺跡調査要項

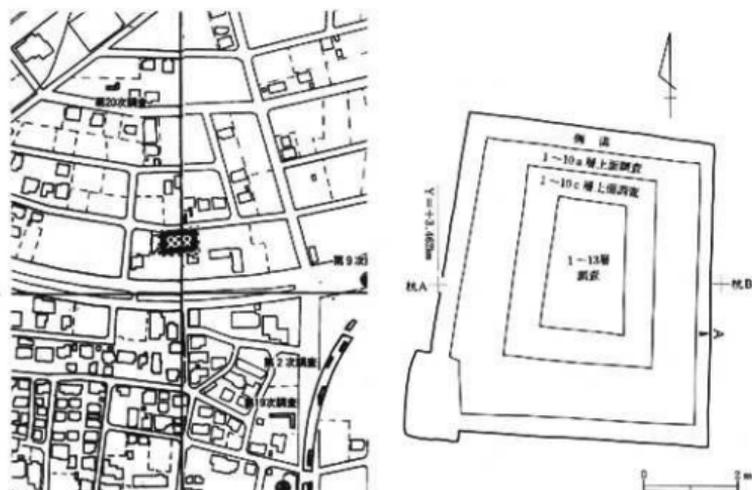
調査回数	所在地	調査期間	調査面積	立地	方位	座標	現況	現標高	旧標高	協力者	担当職員
富沢 第36次	富沢1丁目5-1	昭和63年4月11日～4月20日	約36㎡	後背湿地	北西部	X = -197.49700km Y = + 3.46200 km	宅地	14.5m	13.4m	韓国本緑地	主浜 光朗
富沢 第37次	長町南3丁目5	昭和63年4月11日～6月15日	約200㎡	後背湿地	中央部	X = -197.631827km Y = + 3.868995km	宅地	9.8m	8.6m	嶋田 文松	中富 洋
富沢 第38次	長町南3丁目4	昭和63年5月23日～7月14日	約153㎡	後背湿地	東部	X = -197.52418 km Y = + 4.07889 km	宅地	10.45m	8.5m	佐竹 栄吉	渡部 弘美
富沢 第39次	長町南4丁目19	昭和63年6月16日～7月30日	約160㎡	後背湿地	南部	X = -197.86909 km Y = + 3.67922 km	宅地	11.0m	9.55m	志賀 信夫	中富 洋
富沢 第40次	長町7丁目	昭和63年7月18日～9月30日	約360㎡	後背湿地	東端隣接地	X = -197.28584 km Y = + 4.48371 km	宅地	11.0m	10.35m	佐藤 輝郎	渡部 弘美
富沢 第41次	長町南3丁目15-17	昭和63年7月18日～7月30日	約26㎡	後背湿地	東部	測量実施せず	宅地	11.15m	8.65m	鈴木はま子	佐藤 甲二
富沢 第42次	泉崎1丁目7	昭和63年8月1日～9月14日	約98㎡	微高地縁辺	北西部	X = -197.52475 km Y = + 3.43865 km	宅地	14.5m	13.1m	韓大 京	中富 洋
富沢 第43次	長町南4丁目5-10	昭和63年8月22日～9月27日	約80㎡	後背湿地	中央部	X = -197.647209km Y = + 3.865533km	宅地	不明	8.65m	阿部 文生	太田 昭夫
富沢 第44次	長町南1丁目8-17	昭和63年8月24日～9月2日	約40㎡	後背湿地	東部	X = -197.55204 km Y = + 4.29971 km	宅地	10.5m	9.2m	高橋 孝雄	平岡 亮輔
富沢 第45次	泉崎1丁目7	昭和63年9月5日～9月14日	約23㎡	微高地上	北西部	X = -197.55696 km Y = + 3.43648 km	宅地	14.0m	13.3m	階本智世・深町寿昭	中富 洋
富沢 第46次	長町南3丁目3-1	昭和63年10月3日～11月30日	約222㎡	後背湿地	東部	X = -197.48210 km Y = + 4.12881 km	宅地	10.35m	9.0m	丹野七五郎	佐藤甲二・佐藤 洋 渡部弘美
富沢 第47次	廣野3丁目13	昭和63年9月26日～10月24日	約95㎡	後背湿地	北部	X = -197.33883 km Y = + 3.64944 km	水田	11.2m	—	朝倉台土地開発	中富 洋
富沢 第48次	泉崎1丁目2	昭和63年10月3日～10月14日	約80㎡	微高地縁辺	中央部	X = -197.64340 km Y = + 3.59720 km	宅地	11.7m	10.85m	草刈 孝	太田 昭夫
泉崎浦第4次	泉崎1丁目16-3	昭和63年11月1日～11月17日	約21㎡	微高地上	西部	X = -197.72579 km Y = + 3.46402 km	宅地	13.6m	12.8m	瀬戸 照	佐藤 洋
山口 第5次	泉崎1丁目32-22	昭和63年4月18日～5月14日	約48㎡	後背湿地	北西部	X = -197.98450 km Y = + 3.29478 km	畑地	13.2m	12.15m	朝倉台土地開発	平岡 亮輔
山口 第6次	富沢1丁目11	昭和63年4月18日～5月27日	約42㎡	後背湿地	西部	X = -198.09771 km Y = + 3.17905 km	宅地	13.9m	12.85m	朝倉台土地開発	平岡 亮輔
山口 第7次	泉崎1丁目32	昭和63年8月1日～8月5日	約33㎡	後背湿地	北西部	X = -197.98361 km Y = + 3.26817 km	畑地	13.2m	12.2m	小池 善二	佐藤 甲二
山口 第8次	富沢1丁目5-1	昭和63年8月1日～8月5日	約35㎡	後背湿地	北部	X = -198.02952 km Y = + 3.41842 km	宅地	12.5m	11.45m	山本 定実	佐藤 甲二

第2章 調査結果

第1節 富沢遺跡第36次調査

1. 調査方法

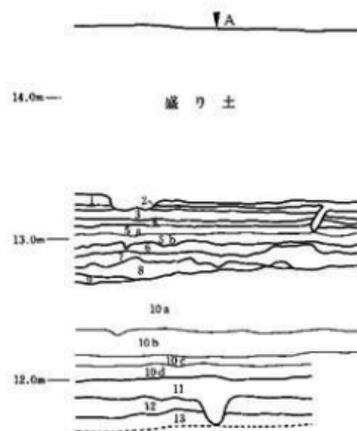
調査区の設定面積は約 $6.5 \times 5.5\text{m}$ (36m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査区は10層上面までは、調査区全面の精査を実施し、10層以下は、約 $4 \times 3\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた(10c層以下は約 $3 \times 1.5\text{m}$)。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: X=-197.45700km Y=+3.46200km 杭B: X=-197.45700km Y=+3.46800km)。



第3図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別13層、細別では18層が確認された。各層の土質は7層まではシルト、8層以下が粘土を主とする。この内、4層は砂層で、10層は砂層を中心とする河川堆積土と考えられる。グライ化は、10層以下から漸次進み、13層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は7層である。また、2・3・5a・5b・5c・6・8・9・11層も水田土壌の可能性がある。10a層上面からは灰白色火山灰が検出されている。遺物出土層は2・3・9層である。各層は、ほぼ水平な堆積状況を示している。



第4図 基本層序

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 7層上面

7層水田跡 (第5図)

<遺構状況>畦畔が1条検出されたのみである。畦畔は調査区の南側に位置し、N-76°-W方向をとる。畦畔は耕作土と同一土壌を盛り上げ作られている。下幅幅は約40~70cmで、耕作土上面からの高さは約7cmである。水口は認められなかった。耕作土は、粘土層で、厚さは5~10cm前後であるが、畦畔を境とした北側の方が、耕作深度が深い。下面は凹凸が顕著で、耕作土下部に下層(8層)ブロックを巻き上げている箇所も認められる。下面には鉄分の集積

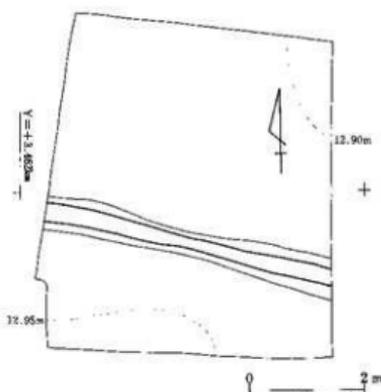
層号	土色	土質	層厚	混入物	備考
1	暗オリーブ灰色 2.5G Y 灰	シルト質砂	2cm-10cm	炭化物粒・細砂	水田耕作土(現代)
2	黄褐色 10Y R 灰	シルト質砂	3cm-6cm	鉄分多量・紙砂・小礫	水田耕作土?
3	暗灰黄色 2.5Y 灰	砂質シルト	3cm-8cm	鉄分・細砂	水田耕作土?
4	黄灰色 2.5Y 灰	砂	3cm-6cm	マンガン粒多量・鉄分多量	自然堆積層
5 a	灰色 5 Y 灰	シルト質砂	4cm-8cm	マンガン粒少量・炭化物・小礫	水田耕作土?
5 b	黒褐色 10Y R 灰	砂質シルト	5cm-10cm	マンガン粒・炭化物粒・小礫多量	水田耕作土?・下部肥後
5 c	暗灰色 7.5Y R 灰	シルト質粘土	2cm-6cm	マンガン粒少量・鉄分	水田耕作土?・部分的分層
6	暗褐色 2.5Y 灰	シルト	2cm-10cm	マンガン粒・鉄分・炭化物粒・細砂	水田耕作土?・下面若干肥後
7	暗灰色 10Y R 灰	粘土質シルト	3cm-18cm	鉄分・炭化物粒・8層ブロック	水田耕作土・下部肥後
8	暗灰色 10Y R 灰	粘土	3cm-12cm	鉄分	水田耕作土?
9	オリーブ灰色 5 Y 灰	粘土	3cm-8cm	細砂・小礫	水田耕作土?
10 a	灰色 10Y 灰	砂	25cm-45cm	鉄分・小礫・植物遺体・上面に灰白色火山灰(小ブロック)	自然堆積層・下部に同色シルトを挟む
10 b	灰褐色 10Y R 灰	シルト	15cm-25cm	植物遺体多量・グライ粘土	自然堆積層
10 c	灰色 10Y 灰	砂	5cm-12cm	植物遺体少量	自然堆積層
10 d	黒褐色 10Y R 灰	粘土質シルト	10cm前後	植物遺体・下部に細砂	自然堆積層
11	灰色 10Y R 灰	粘土	12cm前後	植物遺体	水田耕作土?
12	灰オリーブ色 10 Y 灰	粘土	7cm-14cm	植物遺体少量	自然堆積層
13	オリーブ灰色 2.5G Y 灰	粘土	15cm以上	植物遺体少量	自然堆積層

層は認められない。尚、畦畔部分の直下層上面には、擬似畦畔（斎野：1987）は形成されていない。水田面の標高は12.85～12.95mの間で、北東方向へのわずかな下り傾斜を示す。

〈出土遺物〉耕作土内より赤焼土器片・中世陶器片が各1点出土した。中世陶器片（写真52-2）は壺の体部資料で、色調は内外面が黒褐色（10YR 3/1）、胎土がにょい褐色（7.5YR 4/4）である。胎土中には細かい砂粒を含む。産地は不明である。

(2) その他の出土遺物

2層より陶器片が1点、3層より時期不明の土器片が2点、9層より土師器片が1点出土したのみである。陶器片（第6図1）は志野産の皿で、製作年代は江戸時代初頭頃である。土師器片はクロク使用の高台付杯の底部資料で、内面は黒色処理されている。陶器片を除き他は、細片のため図化し得なかった。

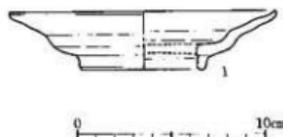


第5図 7層水田跡平面図

4. 遺構の所属年代とまとめ

検出遺構としては、7層水田跡がある。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の2・3・5a・5b・5c・6・8・9・11層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料に乏しく、隣接調査区との層位の対応も不可能で、明確な年代は不明である。ただし、7層水田跡から中世陶器等を出土したこと、10a層上面で灰白色火山灰が検出されたことにより、以下のような大づかみな推定年代が与えられる。

11層—平安時代以前 10層～8層—平安時代以降・中世？以前 7層水田跡—中世？（6層より上位の各層はこれ以降近代までの間）



No.	図表番号	遺構・層位	種別	器種	遺存地	L1径	底径	器高	特	説
1	写真52-1	2層	陶器	皿	野 尻	114.2cm	5.6cm	3.1cm	志野, 17世紀前半, 付高台	

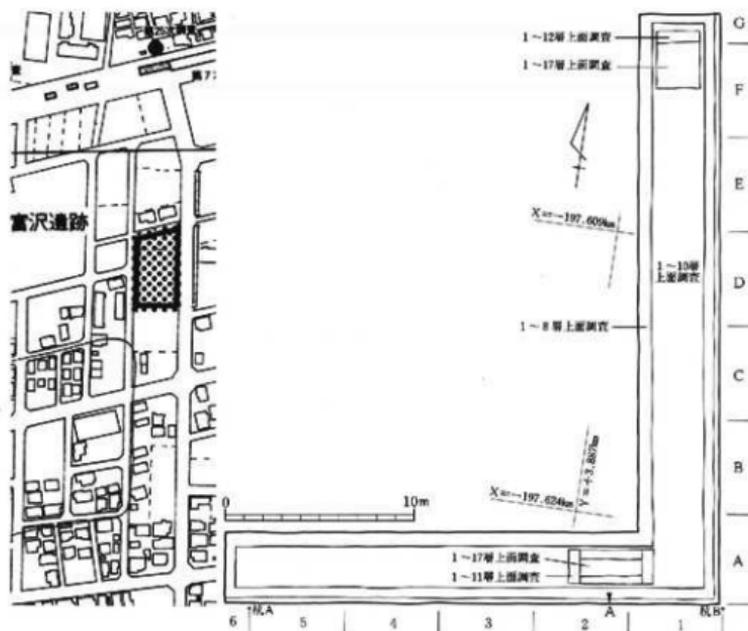
()内は復元値

第6図 出土遺物

第2節 富沢遺跡第37次調査

1. 調査方法

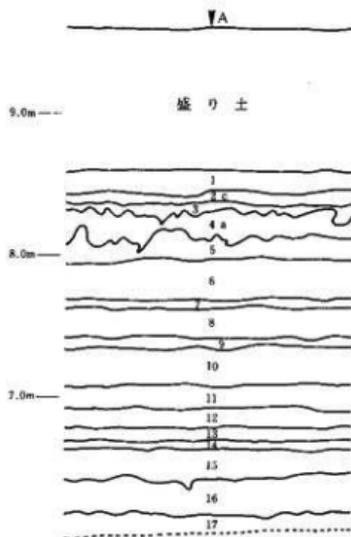
調査区の設定面積は約200m²である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。8層上面までは、調査区全面の精査を実施した。8層上面から10層上面までは安全確保のために調査区を内側に縮小して、約130m²で調査を行った。10層以下は調査区南北にそれぞれ一箇所ずつの試掘区を設けて掘り下げた。（北側試掘区では12層上面までは2.5×3m、12層以下は2.5×2.5m。南側試掘区では11層上面までは2×4.5m、11層以下は1×3m。）遺構の測量は、任意に設定した5×5mのグリッド（南北軸A～G、東西軸1～6）を基準として実施した。尚、グリッド基準杭（杭A、B）の平面座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X=-197.631827km、Y=+3.868989km 杭B：X=-197.628111km、Y=+3.895422km）。



第7図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別17層、細別では20層が確認された。各層の土質は1層がシルト質で、2a層は砂である。2b層は粘土、2c層はシルト質である。3・4層は粘土質である。5～15層の間は泥炭質粘土であるが、間に7・9層の粘土層をはさむ。16・17層は粘土である。グライ化は16層以下から漸次進む。現代のものを除く水田土壌は4a層であるが、この耕作土に利用された基本層は4b層である。また2b・2c・3層も水田土壌の可能性があり、4a層からは灰白色火山灰が検出されているが下層からの巻き上げである。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は、2a・2b・2c・4a・4b・5層である。



第8図 基本層序

層序	土色	土質	厚層	遺人物	備考	
1	灰色	10Y R 5/1	シルト質粘土	5.0m~25.0m	水田耕作土(現代)	
2a	黄褐色	2.5Y 5/1	砂	5.0m~18.0m	小礫多量	自然堆積層、部分的分布
2b	黒色	10Y R 3/1	粘土	5.0m~20.0m	細砂・細礫・小礫多量	水田耕作土?、下面起伏・部分的分布
2c	灰色	5Y 5/1	砂質シルト	2.0m~16.0m	炭化物・炭灰・炭粉少量	水田耕作土?、下面起伏・部分的分布
3	黄褐色	2.5Y 5/1	粘土	2.0m~14.0m	鉄分多量・凝灰質粒	水田耕作土?、下面起伏・部分的分布
4a	黒色	10Y R 3/1	粘土	10.0m~20.0m	灰白色火山灰粒	水田耕作土、下面起伏
4b	黒色	5Y 5/1	粘土	4.0m~16.0m	鉄分	自然堆積層、不連続で部分的な分布
	灰色	5Y 5/1	粘土			
	にじみ黄褐色	10Y R 5/1	シルト質粘土			
5	赤褐色	10Y R 5/1	泥炭質粘土	8.0m~20.0m	植物遺体多量	自然堆積層
6	褐色	10Y R 5/1	泥炭質粘土	22.0m~30.0m	植物遺体多量	自然堆積層
7	粘土黄褐色	2.5Y 5/1	粘土	4.0m~10.0m	植物遺体多量	自然堆積層
8	褐色	10Y R 5/1	泥炭質粘土	15.0m~22.0m	植物遺体多量	自然堆積層
9	灰オリーブ色	3Y 5/1	粘土	5.0m~10.0m	植物遺体多量	自然堆積層
10	黒色	10Y R 3/1	泥炭質粘土	23.0m~33.0m	植物遺体多量	自然堆積層
11	黄褐色	10Y R 5/1	泥炭質粘土	13.0m~20.0m	植物遺体多量	自然堆積層
12	黒色	10Y R 3/1	泥炭質粘土	10.0m~15.0m	植物遺体多量	自然堆積層
13	褐色	2.5Y 5/1	泥炭質粘土	3.0m~10.0m	植物遺体多量	自然堆積層
14	黒色	10Y R 3/1	泥炭質粘土	3.0m前後	植物遺体多量	自然堆積層
15	黄褐色	10Y R 5/1	泥炭質粘土	13.0m~23.0m	植物遺体多量	自然堆積層
16	粘土色	10Y R 5/1	粘土	20.0m~27.0m	細砂少量・植物遺体	自然堆積層
17	オリーブ褐色	7.5Y 5/1	砂質粘土	30.0m以上	炭化物	自然堆積層

3. 検出遺構と出土遺物

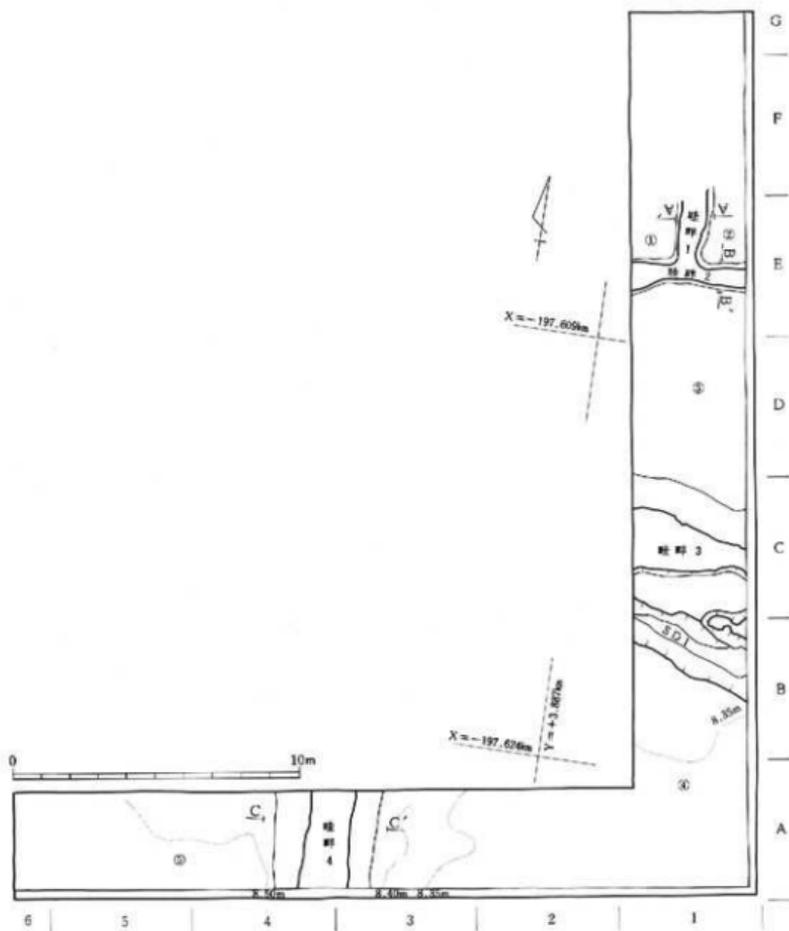
(1) 4層上面

4a層水田跡・1号溝跡—SD1—(第9図)

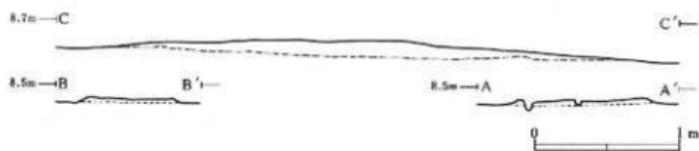
大畦畔(畦畔3、4)、小畦畔(畦畔1、2)が検出され、これに溝跡(SD1)1条を伴っている。これらによって区画される水田区画は5区画(①～⑤)である。

畦畔1、2はほぼ直交し、方向はそれぞれN-4°-W、N-88°-Eである。下端幅は畦畔1が0.5～0.7m、畦畔2は0.9～1.2mで、耕作土上面からの高さはともに2～5cmである。畦畔3はSD1北岸に沿って検出された大畦畔であるが、これに取りつく小畦畔はみられなかった。方向はN-78°-Wで、畦幅は2.5～3.5mを計る。耕作土上面からの高さは4～9cmである。尚、畦畔1、2と畦畔3は水田区画③を区画するが、この南北幅は6.5～7.5mである。ここは今回検出した水田区画のうち規模を知り得る唯一の箇所である。畦畔4も大畦畔であるが、これに取りつく小畦畔は検出されなかった。方向はN-4°+Eで、同じく南北に向く畦畔1とほぼ同じ方向を示す。下端幅は3.5m前後で、耕作土上面からの高さは6～10cmである。この畦畔は調査区外を北に延びて、SD1と接するものと考えられる。畦畔はいずれも耕作土と同じ4a層を盛り上げて作られている。耕作土4a層は粘土互層の4b層を攪拌することによって形成されており、分解が進んでいる。層厚は3～20cmである。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は8.35～8.50mの間で、全体的には北東方向に下っているが、水田の区画ごとにみると水田面⑤が最も高く、次に④が低くなり、①・②・③が最も低い。また耕作土4a層中の一部で灰白色火山灰のブロックが検出されたが、これは下層のものが巻き上げられて混入したものとみられる。SD1は畦畔3に伴って検出され、上端幅は2.～4.5m、深さは約0.4mである。北岸では壁に段を有し、中段幅は1.5～2mである。断面形は概ね船底形を呈するが、壁面、底面ともに凹凸が著しい。堆積土は礫を含む砂の単層で、遺物の出土はない。

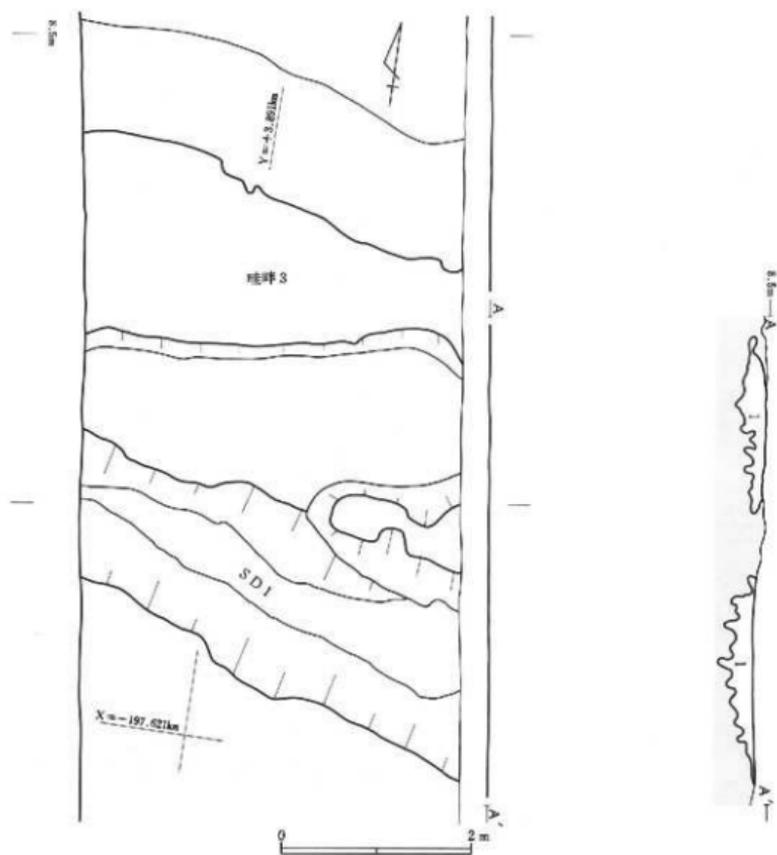
なお、耕作土中より土師器片(1点)、須恵器片(2点)、赤焼土器片(2点)、陶器片(1点)、瓦片(1点)、羽口片(1点)、古銭(1点)が出土した。土器、瓦片はいずれも小破片で、復元及び図化できるものではなかった。土師器はロクロが使用され、内面はヘラミガキの後黒色処理を施されている。切り離し技法は磨滅のため不明である。須恵器は2点出土した。1点は口縁部破片で、外面はロクロ調整後、波状沈線文が施されている。もう一方は器種不明である。赤焼土器は坯の底部から体部下端部分の破片が2点出土したが、これらは同一個体とみられる。陶器片は甕の体部破片で、常滑産の中世陶器と考えられる。瓦片は平瓦、丸瓦の区別はつけ難い。胎土には砂粒を多く含み、また焼成の特徴から中世末頃に属するものと考えられる。羽口片はフイゴの羽口破片である。古銭は皇宋通宝(北宋銭、初鑄年—1039年)である(第12図3)。



第9図 4 a層水田跡平面図



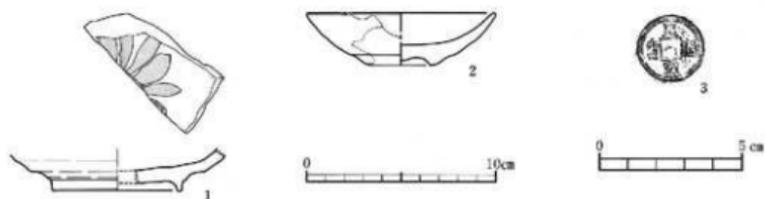
第10図 4 a層畦畔断面図



第11図 畦畔3・SD1平面・断面図

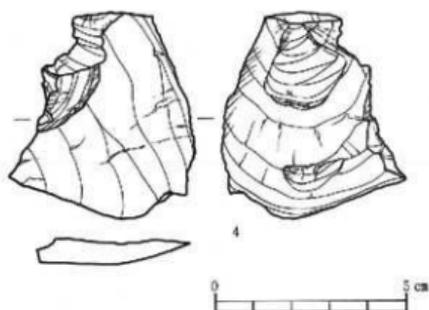
(2) その他の出土遺物

基本層2a・2b・2c・5層から土師器片・須恵器片・赤焼土器片・陶器片(第12図1・2)・石器などが10点出土した。土器片は全て2a・2b・2c層からの出土で、いずれも細片である。このうち陶器片は2a層から2点出土した。皿、鉢の破片で産地はそれぞれ美濃、唐津であるが、中世末～近世初頭に属するものと思われる。石器は5層より剥片が1点出土した(第12図4)。



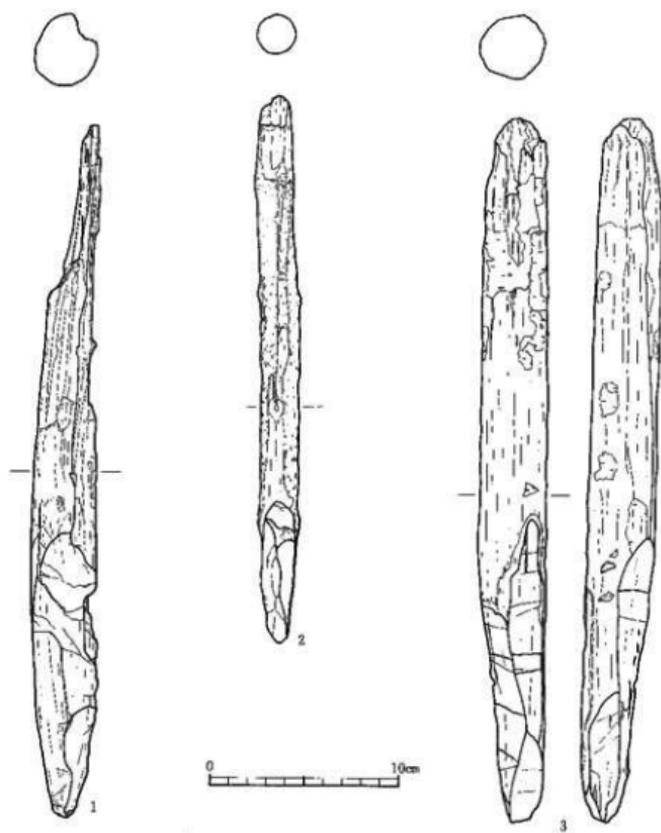
No.	図録番号	産地・層位	種類	器種	遺存状況	口径	底径	器高	特徴
1	写真53-2	2 a層	陶器	皿	約反	—	(6.8cm)	—	美濃、17世紀前半、鉄絵
2	写真53-1	2 a層	陶器	鉢	約反	(10.0cm)	(4.0cm)	2.8cm	唐津、16世紀末、長石釉薬、地割削り出し
3	—	4 a層水田跡	—	古銭	—	—	—	—	北方、「皇安通宝」

()内は復元図



No.	図録番号	名	種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石	質	相	字
4	写真53-3	剥片	石	54.5	46.0	7.0	17.4	燧石(約)	黄シルト的	—	—

第12図 出土遺物(1)



No	種別番号	図数番号	出土遺蹟・層位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	先端加工	表面加工	備考
1	—	—	4 a 層水田跡	杖	生	丸木	9.6cm	3.0cm	1方向	なし	一部炭化遺存
2	—	—	4 a 層水田跡	杖	生	丸木	27.8cm	3.8cm	複数方向	なし	一部炭化遺存
3	第12回1	写真53-4	4 a 層水田跡	杖	生?	丸木	36.5cm	3.5cm	2方向	なし	炭化遺存
4	—	—	4 a 層水田跡	杖	生	丸木	15.5cm	2.3cm	1方向	なし	なし
5	第13回2	写真53-5	4 a 層水田跡	杖	?	丸木	29.0cm	2.0cm	1方向	なし	炭化遺存
6	第13回3	写真53-6	4 a 層水田跡	杖	生?	丸木	22.2cm	3.3cm	複数方向	なし	炭化遺存
7	—	—	4 a 層水田跡	杖	生	丸木	22.2cm	1.8cm	1方向以上	なし	一部炭化遺存
8	—	—	4 a 層水田跡	杖	針?	丸木	25.3cm	2.7cm	複数方向	なし	なし

第13回 出土遺物 (2)

4. 遺構の所属年代とまとめ

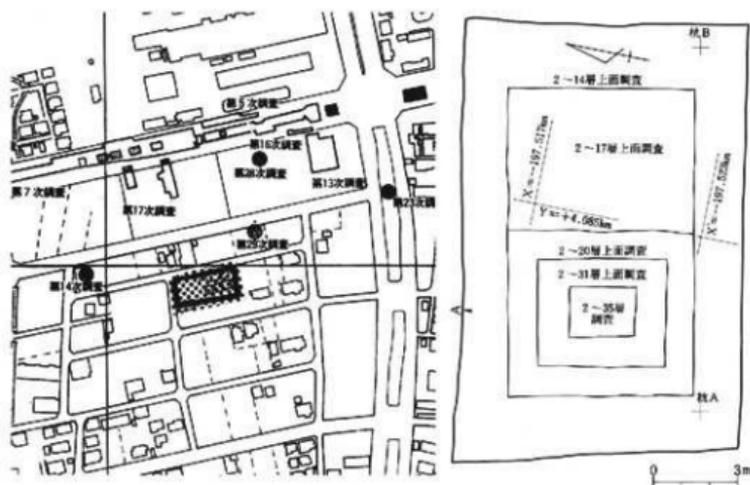
検出遺構は4a層水田跡のみで、その他水田跡の可能性のある層としては2b・2c・3層があげられる。4a層水田跡は大畦畔、小畦畔、及び水路によって区画された水田区画が5区画発見された。区画の形状、規模を明確にすることはできなかったが、畦畔、溝跡の方向のあり方から、ほぼ方形を呈するものと考えられる。時期は出土遺物から中世に所属するものと推定される。同時期の水田跡は西方約200m離れた第30次調査（報告書未刊）でも発見されているが、これらの関係及び水田域の範囲を明らかにすることが今後の課題となろう。なお、水田の存在が予想されるその他の層の時期は、出土遺物から以下のように推定される。

- 3 層 中世以降～近世
- 2 b層 近世
- 2 c層 近世

第3節 富沢遺跡第38次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $15 \times 10\text{m}$ (153m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。14層上面までは、調査区全面の精査を実施し、14層以下は、約 $11 \times 6.5\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた(17層以下は約 $6 \times 6.5\text{m}$ 、20層以下は約 $4 \times 4.5\text{m}$ 、31層以下は約 $2 \times 2.5\text{m}$)。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197.52418\text{km}$ $Y = +4.07889\text{km}$ 杭B: $X = -197.52163\text{km}$ $Y = +4.09164\text{km}$)。



第14図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

当調査に際しては第28次調査区（佐藤：1988）の隣接地であり、層序の対応が可能であったことにより、第28次調査時における基本層序と同一層序を使用した。従って、欠落した層もあり、連続した層位番号となっていない。また、新たに認められた層の関係で、6・18・19・35層の各層は分層し、アルファベット名を付した新層位名となっている（ex. 6層→6a層・6b層）。今回の調査では、盛土下に1～35層までの40層が確認された。これら各層は、1～3層までが粘土層、6～29層までが粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土層、31～35層が粘土層あるいは砂質シルト層に分類される。グライ化は、24層以下から漸次進み、31層以下では、顕著である。現代のものを除く水田土壌は10d層のみである。また、2・3・6b層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は2・3・19c層である。3層からは灰白色火山灰が検出されているが、下層からの巻き上げの可能性もある。全体的な層の傾きは、南東側へ緩やかに下る。

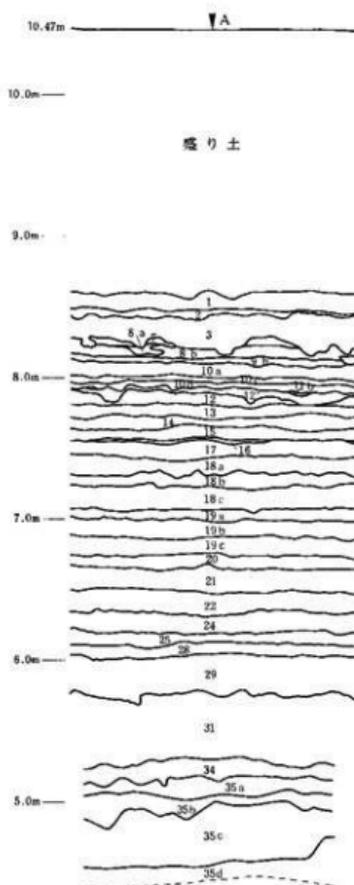
3. 検出遺構と出土遺物

(1) 2・3層上面

1・2号溝跡—SD1・2—（第16図・17図）

調査区西端際で南北方向をとる重複した溝跡（SD1・2）の一部が検出された。検出面は

SD2が3層上面、SD1が2層上面である。方向性はSD2が調査区西壁方向よりやや東に振れる。両溝跡とも幅は不明であるが、深さは80cm前後で底面レベルは、ほぼ同一である。尚、SD1のさらに上に1層段階の溝跡があったことが確認されている。溝跡内、その周辺より杭が16本

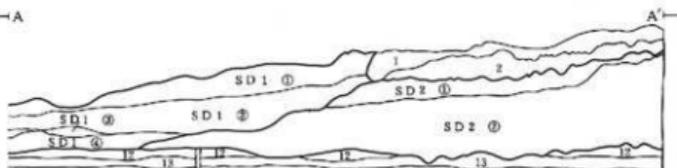


第15図 基本層序

第3期 高河堤跡第30次調査

層序	土質	厚	層厚	遺 入 物	備 考
1	オリーブ褐色 5Y 7	シルト質粘土	7cm~24cm	鉄分多量	赤褐色土(現代)、下面に鉄分多量層
2	灰色 5Y 7	シルト質粘土	1cm~21cm	鉄分	赤褐色土?、下面起伏
3	黒色 10Y R 7	シルト質粘土	2cm~30cm	灰白色土山区小ブロック	水田耕作上?、下面起伏
4	オリーブ褐色 5Y 7	泥炭質粘土	2cm~24cm		互層、自然堆積層、部分的な分布
5	灰色 5Y 7				
6	黒褐色 10Y R 7	泥炭質粘土	1cm~5cm		赤褐色土?、不連続で部分的な分布、下面谷下起伏
7	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	1cm~12cm		互層、自然堆積層、不連続で部分的な分布
8	黒褐色 10Y R 7	泥炭質粘土			
8 a	黄褐色 2.5Y 7	泥炭質粘土	2cm~14cm		8b層の自然分離層?、不連続で部分的な分布
8 b	黄褐色 2.5Y 7	泥炭質粘土	1cm~11cm		自然堆積層、不連続で部分的な分布
9	黄褐色 2.5Y 7	泥炭質粘土	2cm~9cm		互層、自然堆積層、不連続な分布
10	黒色 7.5Y R 7	泥炭質粘土	3cm~16cm		互層、自然堆積層
10 a	黄褐色 2.5Y 7	泥炭質粘土			
10 b	黒色 2.5Y 7	泥炭質粘土			
10 c	黒色 2.5Y 7	泥炭質粘土	1cm~9cm		互層、自然堆積層
10 d	黄褐色 2.5Y 7	泥炭質粘土	1cm~14cm	下に10c層小ブロック	水田耕作上、下面起伏
10 e	黄褐色 2.5Y 7	泥炭質粘土	1cm~9cm		互層、自然堆積層、不連続で部分的な分布
11	黒色 2.5Y 7	泥炭質粘土	1cm~6cm		不連続で部分的な分布
11 b	黒色 2.5Y 7	泥炭質粘土	1cm~15cm		不連続で部分的な分布
12	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	1cm~15cm		不連続で部分的な分布、12層の自然分離層?
12 a	黄褐色 2.5Y 7	泥炭質粘土			互層、自然堆積層
13	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	3cm~13cm		自然堆積層
14	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	2cm~14cm		自然堆積層
15	黒褐色 10Y R 7	泥炭質粘土	6cm~11cm		自然堆積層
16	黄褐色 10Y R 7	泥炭質粘土	1cm~2cm		自然堆積層、不連続で部分的な分布
17	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	8cm~17cm		自然堆積層
18	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	8cm~17cm		互層、自然堆積層
18 a	黄褐色 10Y R 7	泥炭質粘土			
18 b	黒褐色 10Y R 7	泥炭質粘土	4cm~13cm		互層、自然堆積層
18 c	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土			
18 d	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土			
18 e	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	14cm~19cm		自然堆積層
19	オリーブ褐色 5Y 7	泥炭質粘土	4cm~11cm		自然堆積層
19 a	黄褐色 10Y R 7	泥炭質粘土	9cm~16cm		互層、自然堆積層
19 b	黒褐色 10Y R 7	泥炭質粘土			
19 c	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	9cm~16cm		互層、自然堆積層
19 d	黄褐色 2.5Y 7	粘土			
20	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	5cm~12cm		自然堆積層
21	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	14cm~21cm		互層、自然堆積層
22	黄褐色 10Y R 7	粘土	11cm~18cm		自然堆積層
23	黄褐色 10Y R 7	粘土	11cm~20cm		互層、自然堆積層
24	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土			
25	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	5cm~13cm		自然堆積層
26	黒褐色 10Y R 7	泥炭質粘土	5cm~11cm		自然堆積層
27	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土	24cm~33cm		下面起伏、自然堆積層
28	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土			
29	黒色 10Y R 7	泥炭質粘土			
30	オリーブ褐色 5Y 7	粘土	44cm~53cm	植物遺体	互層、自然堆積層
31	黄褐色 10Y R 7	砂質シルト			
32	黄褐色 10Y R 7	粘土	4cm~18cm	植物遺体	下面起伏、自然堆積層
32 a	オリーブ褐色 2.5Y 7	砂質シルト	4cm~17cm	植物遺体	自然堆積層
32 b	オリーブ褐色 5Y 7	砂質シルト	4cm~26cm	植物遺体	自然堆積層
33	緑褐色 10G Y 7	砂質シルト	18cm~44cm	植物遺体	自然堆積層
34	緑褐色 10G Y 7	砂	34cm以上	植物遺体、下部粘土	自然堆積層

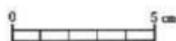
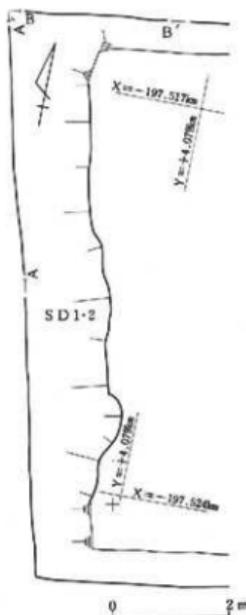
8.7m—A



8.7m—B



SD1 ①	10YR 2/1	黒色	シルト質粘土	下部に10Y R1.7/1 黒色粘土の層がうすく広がる。
②	2.5Y 2/1	黒色	シルト質粘土	2.5Y 4/1 黄灰色砂2.5Y 2/1 が主体。
③	5Y 2/1	黒色	シルト質粘土	グライ土。
④	2.5Y 2/1	黒色	砂	
SD2 ①	5Y 3/1	オリーブ黒色	粘土	②層が主体。2C層下部に2.5Y
	5Y 5/2	灰オリーブ色	粘土	4/1の粘土層が底面に広がる。
②	2.5Y 4/1	黄灰色	砂	
	2.5Y 5/1	黄灰色	砂	



第17図 出土遺物(1)

第16図 SD1・2平面・断面図

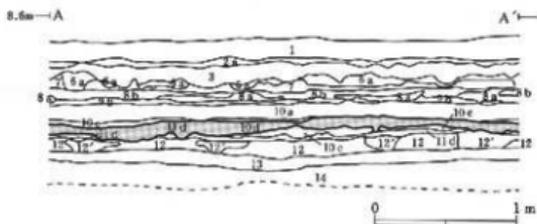
No.	出土遺構・層位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	先端加工	表面加工	備考
1	SD1	杭	針	丸木	55.3cm	3.4cm	不明	なし	
2	SD1	杭	針	丸木	65.1cm	3.2cm	複数方向	なし	一部樹皮残る
3	SD1	杭	針	丸木	83.1cm	4.8cm	複数方向	枝払い	
4	SD1	杭	広?	丸木	21.3cm	2.5cm	一方向以上	なし	
5	SD1	杭	竹	丸木	74.2cm	2.1cm	不明	なし	
6	SD1	杭	針	丸木	14.0cm	5.2cm	不明	不明	
7	SD1	杭	針	丸木	13.8cm	3.5cm	不明	不明	
8	SD1	杭	針(杉)	丸木	117.9cm	3.6cm	ノコギリ(直)	枝払い	一部樹皮残る
9	SD1	杭	針	丸木	18.1cm	4.6cm	不明	枝払い	
10	SD1	杭	針(杉)	丸木	113.8cm	5.0cm	複数方向	枝払い	
11	SD1(2層上面)	杭	針	丸木	37.8cm	3.6cm	2方向	なし	
12	SD1(2層上面)	杭	針(杉)?	丸木	28.4cm	4.6cm	複数方向	枝払い	一部樹皮残る
13	SD1	杭	広	4分圓材	17.8cm	3.1cm	複数方向	なし	
14	SD1	杭	広	丸木	57.1cm	2.6cm	複数方向	枝払い	
15	SD1	杭	広	丸木	21.2cm	4.0cm	複数方向	なし	
16	SD1	杭	針(杉)	丸木	88.6cm	4.6cm	2方向	縫合枝払い	一部小枝が付く

検出された。なかには列をなすものもある。これらは1層の溝跡を含め、いずれの時期に属するか不明である。出土遺物はSD1堆積土中より、土師器片と寛永通宝が各1点出土したのみである。

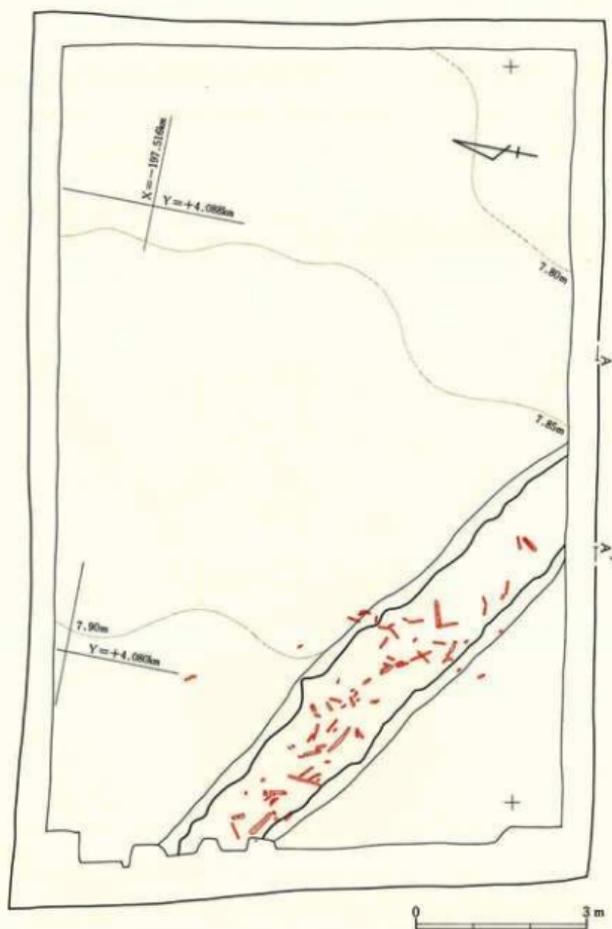
(2) 10層上面

10d層水田跡(第19図)

大畦畔が1条検出されたのみで、小畦畔は検出されなかった。畦畔の検出面は10a層下面である。畦畔方向はN-56°-Wで、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壌—10d層—を盛り上げ作られている。下端幅は1.8m前後で、耕作土上面からの高さは6cm前後である。上面及びその中より、小枝を主とする多量の樹木片が出土した。尚、畦畔上には水口は検出されなかった。耕作土は泥炭質粘土層の10e層から12層上面を攪拌し、耕作土—10d層—としている。畦畔部分では耕作が及ばなかったためか、直下の10e層が擬似畦畔となって残っている。耕作土の厚さは7cm前後で、余り分解が進んでおらず、下部では下層ブロックを多量に含む。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。水田面(耕作域)の標高は7.75~7.95mの間で、南東方向の緩やかな下り傾斜を示す。傾斜の度合いは約1.0cm/mである。畦畔出土の樹木片を除けば、出土遺物はない。



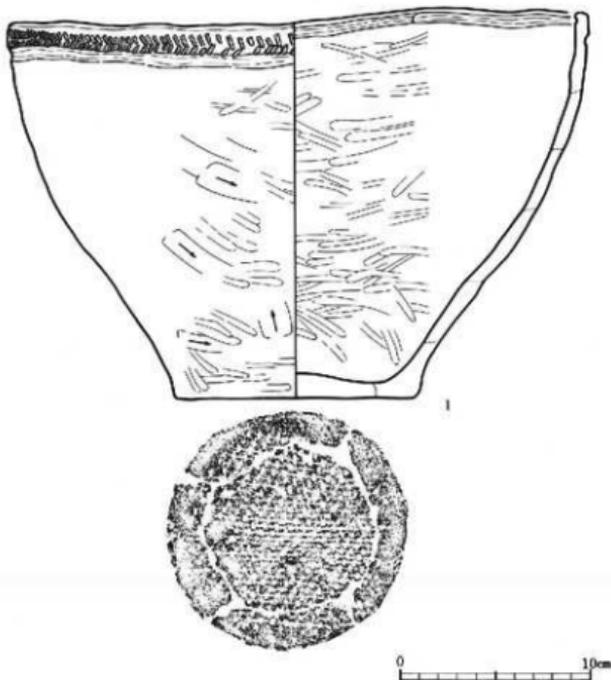
第18図 10d層畦畔断面図



第19図 10d層水田跡平面図

(3) その他の出土遺物

基本層1・2・3・19c層から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器等が出土した。19c層出土の縄文土器を除けば、全て細片で、3層以上の出土である。2層出土のものには近代以降の陶器片・磁器片が含まれる。19c層出土の縄文土器(第20図1)はほぼ完形で、土圧で潰れたような状況で出土した。これに伴う落ち込みや他の遺物は認められなかった。最大径を口縁部にもち、体部下半のしぼむ椀状を呈する鉢形土器である。口縁部は直立し、やや肥厚する。口唇部は、一部丸味を帯びる部分も認められるが、基本的には平坦で、やや外面側



No.	図版番号	層位	種別	形種	遺存度	口径	底径	器高	特	図
1	写真54	19c層	縄文土器	鉢	ほぼ完形	30.5cm	13.0cm	20.7cm	口縁部一丸縁・胴突文、体部一撫文、底部一網代文	

第20図 出土遺物(2)

に傾いている。文様の施文部位は、内外面とも口縁部に限られ、他は無文である。外面は、下端に文様区画用の浅く幅広い不明瞭な横位沈線が1条引かれ、その上に矢羽根状文様が横位にめぐり、矢羽根状文様は、斜位の刺突によって表出されている。施文順序は上の刺突(下→上)が一巡した後、下の刺突(上→下)が加えられている。内面は、明確な太い横位沈線が1条めぐり、内外面の調整は、外面へう削り・ナデの後粗いミガキ、内面は丁寧なミガキである。胎土には多量の砂粒を含む。色調は、内外面とも灰黄褐～褐灰色で、外面体部下端及び内面口縁部付近・体部下半に黒色の付着物が認められる。内面口縁部付近には、火はね状の小さな剝離痕が多数みられる。尚、底部は網代底である。

4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構としては、10d層水田跡、SD1・2がある。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層とした6b・3・2層の各層が上げられ、SD2は3層段階の水路、SD1は2層段階の水路の可能性がある。これらの年代であるが、今回の調査では、時期決定資料に乏しいが、層位の対応が可能な隣接28次調査(佐藤：1988)の結果を踏まえれば、以下のような所属年代が与えられる。

- ・10d層水田跡—弥生時代(樹形甕式期以降 十三塚式期以前)
- ・6b層—弥生時代(十三塚式期)以降 平安時代以前
- ・SD2—近世以降 近代以前 ・SD1—近代以降 現代以前

2. 検出された弥生時代の水田跡は、10d層水田跡のみであった。隣接28次調査で検出された、11c・11a・10b・9a層の各水田跡の耕作域は当調査区には延びてきていない。

3. 当調査区では、3層下に4・5層が認められなかった。これは3層が水田耕作土で、下層の4・5層を耕作土として利用した結果とも考えられる。

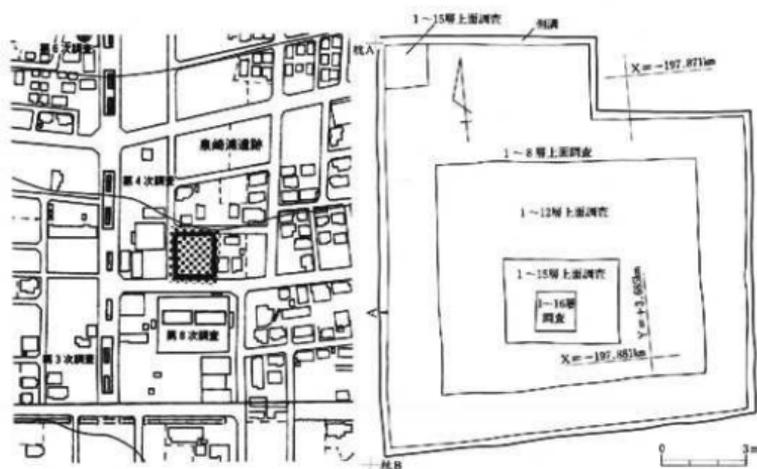
4. 今回の調査で、ほぼ完形の土器1点ではあるが、19c層より初めて遺物の出土をみた。当土器を一応、縄文土器としたが、当地域において現在のところ、類例が認められないことより、所属時期は不明としておきたい。ただし、第28次調査区で23層中より縄文中期末葉の遺物が出土し、24層の¹⁴C測定年代結果がB.C. 2290±120年であったことより、縄文後期以降、弥生時代樹形甕式期以前のいずれかの時期に所属する公算が強い。

5. 隣接28次調査区で、縄文時代早期後葉の遺物を出土した34層は当調査区でも認められた。しかし、層厚は薄く、不安定な層で、遺物も出土しなかった。

第4節 富沢遺跡第39次調査

1. 調査方法

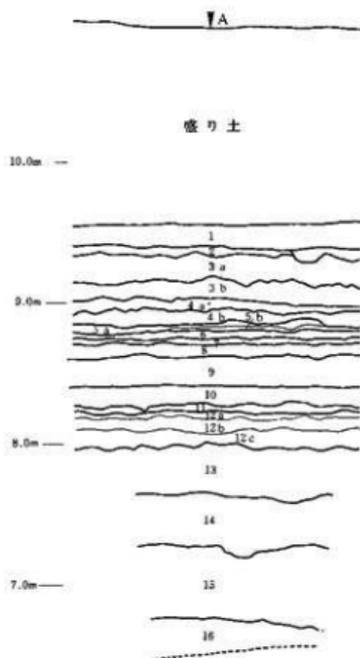
調査区の設定面積は160m²である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。8層上面までは調査区全面の精査を実施した。8層以下12層上面までは安全確保のため、調査区を8×9mに縮小した。12層以下は調査区中央部に試掘区を設けて掘り下げた（15層までは3×4m、15層以下は1.5×1.5m）。また8層上面から調査区北西コーナーに1.5×1.5mの土層観察用の試掘区を設け、15層までの掘り下げを行った。遺構の測量は杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X=-197.86909km、Y=+3.67622km 杭B：X=-197.88405km、Y=+3.67484km）。



第21図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別16層、細別では22層が確認された。各層の土質は1・2層がシルト質で、3a・3b・4a層は粘土層であるが、3b・4a層は泥炭を含んでいる。4a～8層は泥炭質粘土層である。9～12c層は泥炭を含む粘土層であるが、間に10層の砂層をはさむ。13～15層は粘土層である。16層は砂礫層である。グライ化は13層から漸次進み、15層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は3a・4a・4a'層であるが、これらの耕作土に利用された基本層は、それぞれ3b・4b層である。また2層も水田土壌の可能性もある。3a層からは灰白色火山灰が検出されているが、下層からの巻き上げと考えられる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は1・2・3a・4a・4b層である。



第22図 基本層序

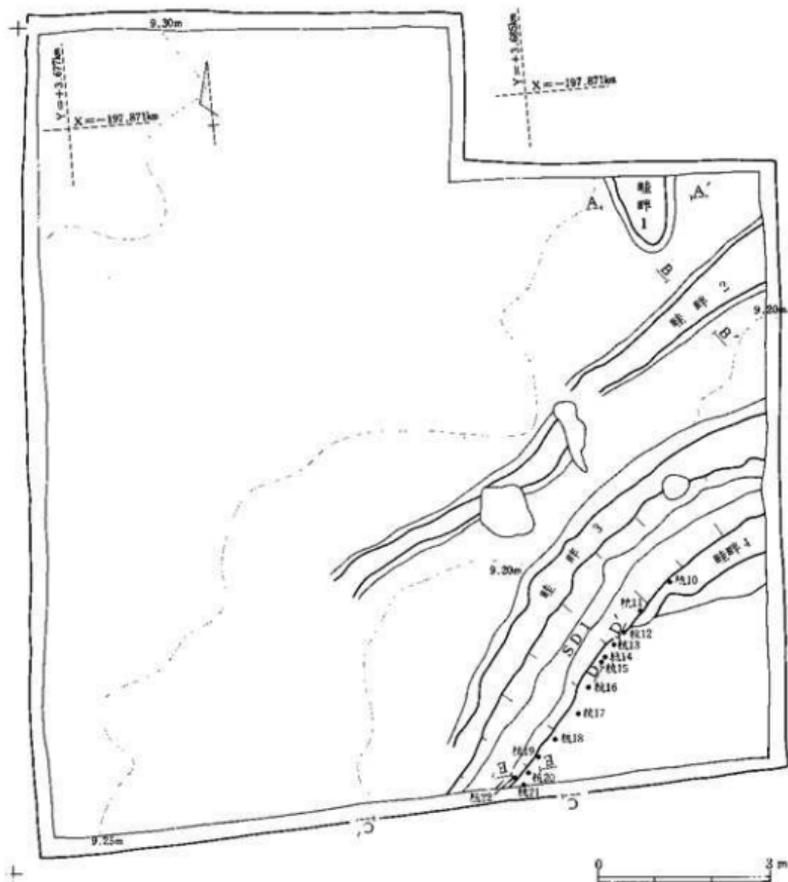
層序	土 色	土 質	層 厚	遺 入 物	備 考
1	暗灰黄色 2.5Y 劣	シルト	10cm～20cm		水田耕作土(現代)、下面に鉄分集積層
2	暗褐色 10Y R 劣	シルト質粘土	4cm～12cm	鉄分多量、炭屑粒	水田耕作土、F層面下肥供
3 a	黒 色 10Y R 劣	粘土	8cm～22cm	鉄分多量、灰白色火山灰ブロック	水田耕作土、下層肥供
3 b	暗褐色 2.5Y 劣	粘土	6cm～18cm		自然堆積層
	黒 色 7.5Y R 劣	泥炭質粘土		植物遺体多量	
	灰白色 2.5Y 劣	粘土		植物遺体	
4 a	暗褐色 10Y R 劣	粘土	10cm～20cm	植物遺体	水田耕作土、下層肥供
4 a'	暗褐色 10Y R 劣	泥炭質粘土	3cm～12cm	鉄分、植物遺体多量	水田耕作土、下層肥供、部分分布
4 b	黒 色 5Y R 劣	泥炭質粘土	3cm～12cm	植物遺体多量	自然堆積層
5 a	暗褐色 10Y R 劣	泥炭質粘土	2cm～5cm	植物遺体多量	自然堆積層
5 b	にじい黄褐色 10Y R 劣	泥炭質粘土	2cm～4cm	植物遺体多量	自然堆積層
6	暗褐色 10Y R 劣	泥炭質粘土	2cm～10cm	植物遺体多量	自然堆積層
7	暗灰黄色 2.5Y 劣	泥炭質粘土	2cm～6cm	植物遺体多量	自然堆積層
8	赤褐色 2.5Y R 劣	泥炭質粘土	5cm～10cm	植物遺体多量	自然堆積層
9	黒 色 7.5Y R 劣	粘土	20cm前後	新砂、植物遺体多量	自然堆積層
10	灰オリーブ色 5Y 劣	砂	10cm～15cm		自然堆積層
11	灰オリーブ色 7.5Y 劣	粘土	3cm～8cm	植物遺体	自然堆積層
12 a	オリーブ褐色 7.5Y 劣	粘土	3cm～6cm	植物遺体	自然堆積層
12 b	暗褐色 2.5Y 劣	粘土	5cm～10cm	植物遺体	自然堆積層
12 c	灰 色 5Y 劣	粘土	6cm～15cm	植物遺体	自然堆積層
13	オリーブ灰色 2.5Y 劣	シルト質粘土	35cm前後	植物遺体	自然堆積層
14	灰 色 10Y 劣	粘土	35cm～40cm	植物遺体	自然堆積層
15	緑灰色 10G Y 劣	シルト質粘土	45cm～55cm	植物遺体	自然堆積層
16	暗緑灰色 10G Y 劣	砂礫	25cm以上	植物遺体	自然堆積層

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 3層上面

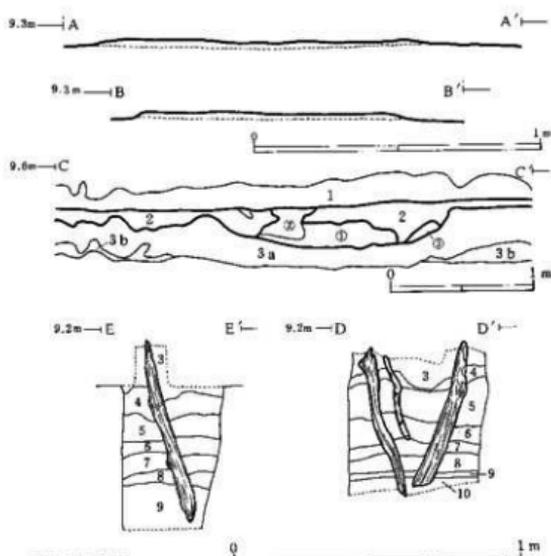
3a 層水田跡 (第23図)

<遺構状況> 4本の畦畔(畦畔1・2・3・4)と溝跡(SD1)1条を検出したが、畦畔3・4はSD1に伴うものである。また、SD1の南岸に沿って杭列が検出された。畦畔1は調査区北



第23図 3層水田跡平面図

東コーナー付近で検出され、方向はN-6°-Wである。下端幅は最大で1.1mで、耕作土上面からの高さは2cm前後である。畦畔2は方向がN-56°-Eで下端幅が0.7~1.1m、耕作土上面からの高さは1~2cmである。なお、畦畔1・2は接続せず、この間は水口であった可能性がある。畦畔3・4は、SD1の両岸に沿って検出された。下端幅はそれぞれ0.6~1m、1m前後で、耕作土上面からの高さは2~4cm、2~5cmである。これらの畦畔に接続する他の畦畔は

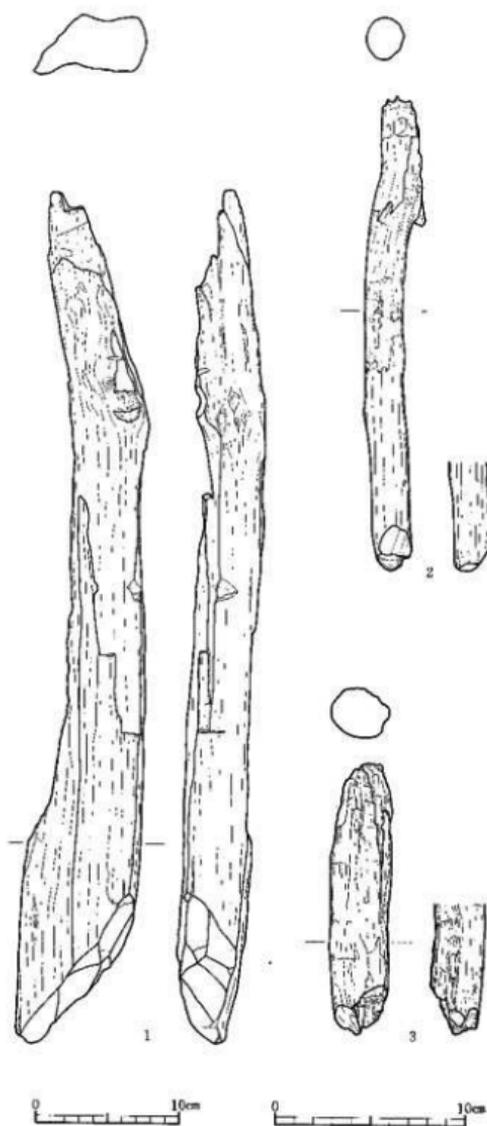


SD1土層記号

- ① 暗緑灰色 7.5GY 4/1 粗砂及び小礫 黒褐色2.5Y 3/1 粘土をブロック状に含む。
- ② 暗オリーブ灰色 5GY 4/1 砂質シルト。
- ③ 灰色 5Y 4/1 粘土 粗砂が混入。

第24図 3層畦畔・溝・杭断面図

検出されなかった。また畦畔2・3間の水田面の南北幅は0.7~2.4mである。畦畔はいずれも耕作土と同じ3a層を盛り上げて作られている。耕作土3a層は泥炭を含む粘土層の3b層を攪拌することによって形成されているが、耕作深度の深い箇所では一部4a層に達しているところもある。層厚は8~22cmである。下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は9.2~9.3mの間で、全体的に南東方向に下っている。また、耕作土3a層中の一部で灰白色火山灰が少量検出されたが、これは下層のものが巻き上げられて混入したと思われる。SD1は調査区南東部で検出されたが、北東から南西方向に緩やかに弯曲する。両岸には畦畔3・4を伴っている。上端幅は0.9~1.4m、深さは30~40cmである。断面形は船底形を呈し、底面には若干の凹凸がみられる。堆積土は砂礫、砂質シルト、粘土及び基本層2層で、遺物は出土しなかった。杭列はSD1の南岸上端に沿って検出され、杭13本からなる。これらの杭の間隔は20~70cmでほぼ直線的に並ぶ。杭材には丸木及び分削材が使用されている。



第25図 出土遺物(1)

<出土遺物> 3a層中からの出土遺物は次のとおりである。土師器片(1点)、須恵器片(9点・3個体)、赤焼土器片(3点)、弥生土器片(40点・1個体)、石器(1点)、種子(1点)。土器片はいずれも小破片で、復元することができたのは須恵器1点のみである。土師器片はロクロ使用の坏で、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。須恵器片はいずれも坏で、1点を除いて底部切り離し技法は回転糸切りである。復元、図化ができたものは(第27図3)であるが全体的な磨滅が著しく、切り離し技法も不明である。赤焼土器片は坏である。弥生土器片(第27図4～6)は合計40点出土したが、磨滅が著しい。いずれも地文に燃承文が施されており同一個体の可能性もある。胎土には砂粒を多く含んでいる。詳しい時期は不明である。

No.	検出番号	出上遺構層位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	厚さ	先端加工	表面加工	備考	
1	---	2層	杭	竹	丸木	11.4cm	2.6cm	---	不明	なし	炭灰	
2	---	2層	杭	竹	丸木	41.9cm	4.6cm	---	複数方向	枝払い	炭灰遺存	
3	---	2層	杭	竹	丸木	66.5cm	2.6cm	---	複数方向	枝払い	樹皮遺存	
4	---	2層	杭	竹	丸木	29.0cm	3.4cm	---	複数方向	なし	炭灰遺存	
5	---	2層	杭	竹	分割材	21.7cm	3.5cm	---	不明	なし	---	
6	---	2層	杭	竹	丸木	47.5cm	2.9cm	---	複数方向	なし	樹皮遺存	
7	---	2層	杭	針?	丸木	41.9cm	3.8cm	---	複数方向	なし	---	
8	---	2層	杭	針	板	13.0cm	7.5cm	1.4cm	不明	ノコギリ	---	
9	---	2層	杭	針	丸木	24.7cm	3.1cm	---	2方向	なし	---	
10	---	3a層水田跡	杭	竹	丸木	9.6cm	2.8cm	---	1方向	枝払い	炭灰遺存	
11	---	3a層水田跡	杭	竹	丸木	6.9cm	1.5cm	---	1方向	なし	炭灰遺存	
12	---	3a層水田跡	杭	竹	丸木	19.5cm	2.4cm	---	2方向	なし	---	
13	第25図1	写真56-3	3a層水田跡	杭	針? 分割材	59.5cm	7.8cm	---	1方向	なし	---	
14	第25図2	写真56-4	3a層水田跡	杭	針	丸木	25.1cm	1.9cm	---	1方向	なし	---
15	---	3a層水田跡	杭	針?	分割材	54.3cm	5.9cm	---	不明	枝払い	---	
16	---	3a層水田跡	杭	針	丸木	14.4cm	1.6cm	---	不明	なし	炭灰遺存	
17	---	3a層水田跡	杭	針	丸木	10.6cm	2.4cm	---	2方向	なし	一側炭灰遺存	
18	---	3a層水田跡	杭	針	丸木	14.0cm	2.2cm	---	1方向	枝払い	炭灰遺存	
19	第25図3	写真56-2	3a層水田跡	杭	針	丸木	14.0cm	3.4cm	---	複数方向	枝払い	---
20	---	3a層水田跡	杭	針	分割材	66.0cm	4.0cm	---	複数方向	枝払い	---	
21	---	3a層水田跡	杭	針	分割材	23.7cm	4.8cm	---	3方向	なし	---	
22	---	3a層水田跡	杭	針	2分割材	33.6cm	4.1cm	---	1方向以上	枝払い	---	

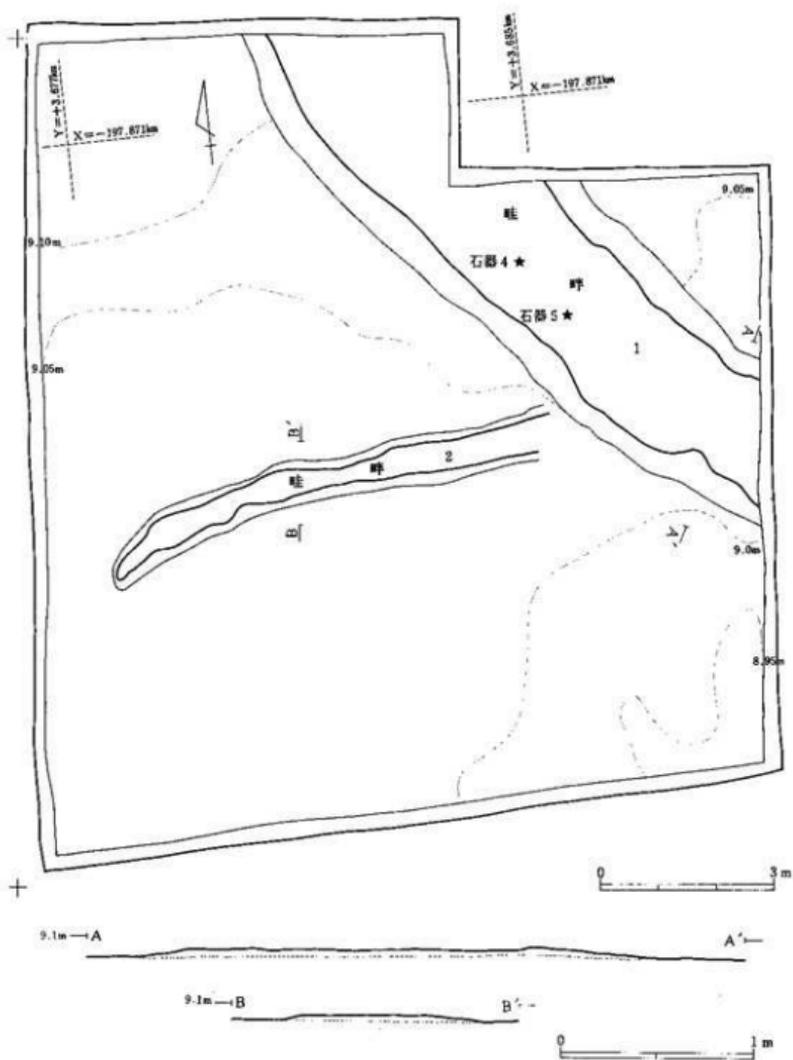
(2) 4層上面

4a層水田跡(第26図)

<遺構状況> 畦畔(畦畔1・2)2本を検出した。これによって区画される水田区画は3区画である。畦畔1は大畦畔で方向はN-40°-W、下端幅は2.8~3.1mで耕作土上面からの高さは1~5cmである。畦畔2は方向N-79°-Eで、畦畔1に取りつく小畦畔である。下端幅は0.7~0.8m、耕作土上面からの高さは1~2cmである。畦畔はいずれも耕作土と同じ4a・4a'層を盛り上げて作られている。耕作土は4a・4a'層である。両者は基本的には同じであるが、前者は泥炭分の含有が少なく粘性が強い。分布も調査区北西部分に限られる。耕作土の4a・4a'層は泥炭質粘土層の4b層を攪拌することによって形成されたもので、層厚は4a層が10~20cm、4a'層が3~15cmである。4a・4a'層とも分解が進んでいるが、前者の方がより顕著である。また両層ともに下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は9.0~9.1mの間で、全体的に南東に下っている。

<出土遺物> 出土遺物は次のとおりである。弥生土器片(28点・3個体)、石器(4点)、樹木片(1点)、種子(1点)。

弥生土器片は合計で28点出土したが、これらは3種類に分類される。(1)第27図8、(2)第27図10、(3)第27図9、(4)第27図7、11) ①は甕である。体部上端には列点刺突文が施され、これより下位の体部にはLR縄文が施されている。口縁部から列点刺突文の間の無文帯には明瞭なヨコナデが施されている。内面調整はミガキである。所属時期は樹形器式期前後と考えられる。②は体部資料であるが、器種は不明である。LR縄文が施されている。③は底部である。器厚が厚く、内外面とも磨減が著しく詳細は不明である。④は壺で外面にはLR縄文が施されている。



第26図 4 a層水田跡平面・断面図

が、小破片であるために詳細は不明である。石器は4点出土した。そのうち1点は大型板状安山岩製石器で(第28図5)、畦畔1上面からの出土である。他のものは剥片である(第28図2、3、4)。

(3) その他の出土遺物

基本層1・2層から土師器片、赤焼土器片、須恵器片、陶器片、瓦片、杭、種子が出土した。土師器片はロクロ使用の坏で、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。赤焼土器片は坏である。須恵器片は大甕と坏で、前者には波状沈線文が施されている。陶器、磁器のうち産地、年代などが確定できたものは4点であるが、1層からは志野・皿(16c末~17c前)、瀬戸・灰釉皿(室町)、灰釉皿(江戸)、2層からは土瓶あるいは壺(江戸)が出土した。瓦片は平瓦が1点1層より出土したが、焼成の特徴から近世のものと思われる。

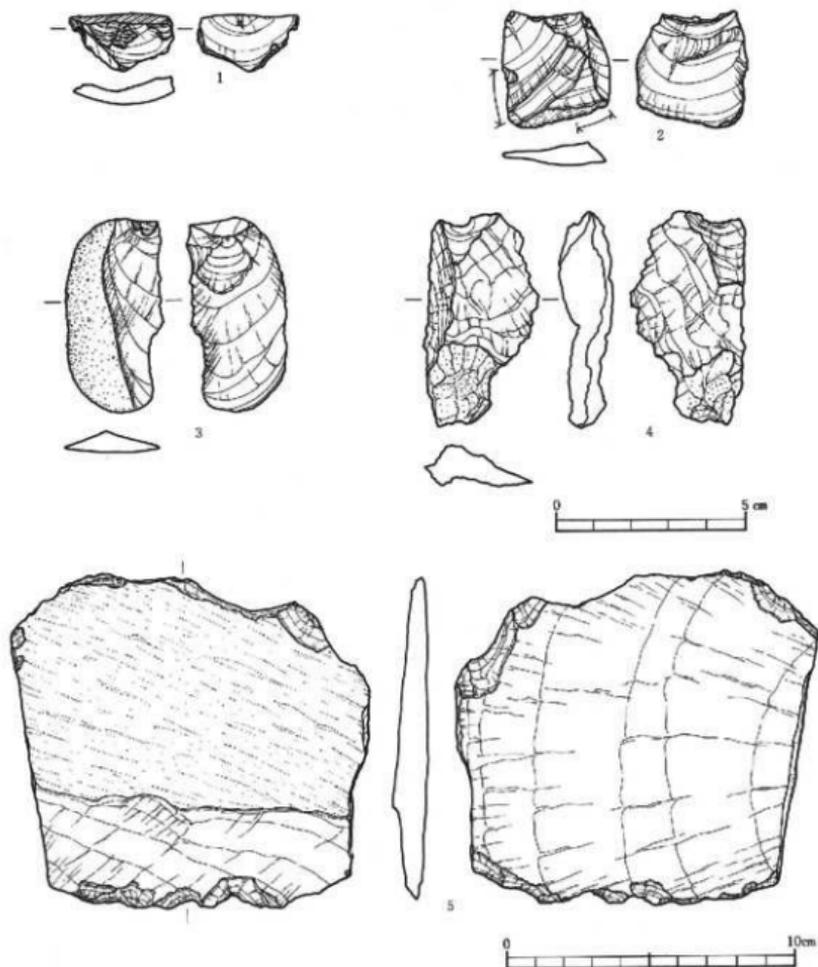
4. 遺構の所属年代とまとめ

検出遺構は3a層水田跡、4a層水田跡で、その他水田跡の可能性のある層は2層である。

1. 3a層水田跡は畦畔4本(畦畔1・2・3・4)と溝跡1条(SD1)が検出されたが、畦畔3・4はSD1の両岸に作られたものである。水田区画の規模、形状を明確にすることはできなかったが、水口を一箇所検出した。また、SD1の南岸に沿って杭列が検出されたが、これは土留めの性格が考えられる。3a層からの出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器などであるが、南方約30mの富沢遺跡第8次調査区(T.藤：1984)との層位対比や、灰白色火山灰のあり方から平安時代以降~中世に所属する水田跡と推定される。

2. 4a層水田跡は交差する2本の畦畔(畦畔1・2)を検出した。畦畔1は大畦畔、畦畔2は小畦畔である。これらの畦畔によって区画される水田区画の規模、形状は明確にすることができなかった。この水田跡の所属時期は出土遺物から、弥生時代中期頃(樹形罌式期)と推定される。

3. その他水田跡の可能性のある層は2層であるが、その時期は出土遺物から近世と考えられる。



No.	写真番号	出土遺構・層位	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
1	写真56-5	3 a 榑水田跡	鏡片石筭	15.3	28.5	5.5	2.4
2	写真56-6	4 a 榑水田跡	熱線網線画のある鏡片	31.0	29.0	6.0	6.4
3	写真56-7	4 a 榑水田跡	鏡片	52.0	25.5	5.7	8.9
4	写真56-8	4 a 榑水田跡	鏡片	57.0	30.5	14.0	13.2
5	写真56-9	4 a 榑水田跡	大形板状安山岩鏡片石筭	118.5	126.0	11.5	252.7

第28図 出土遺物(3)

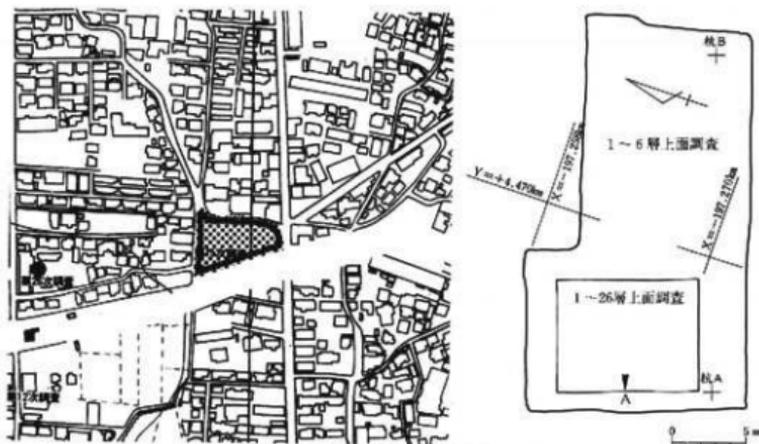
第5節 富沢遺跡第40次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は $28 \times 12 \sim 15\text{m}$ (約 360m^2)である。調査は、盛土および直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区には土層観察および排水用の側溝を設けた。6層上面までは調査区全面の調査を実施し、7層以下は $11 \times 8\text{m}$ (約 78m^2)に規模を縮小して掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197.26584\text{km}$ $Y = +4.48371\text{km}$ 杭B: $X = -197.2738\text{km}$ $Y = +4.46091\text{km}$)。

2. 基本層序

今回の調査では盛土下に26層が確認された。各層の土質は1～5層が砂質シルトまたはシルト、6～16層までが粘土質シルト、17～24層までが砂質シルト、25・26層が泥炭質粘土である。現代のものを除いて水田土壌の可能性があるのは、2・3・7～13・15・18・19・21層である。各層の傾きは、1～10層はほぼ水平で11層以下は南西側に緩やかに下っている。なお当調査区は第15次調査(斎野:1987)IV区に隣接しているが、各層の対応関係については遺構の対応関係と共に後述する。



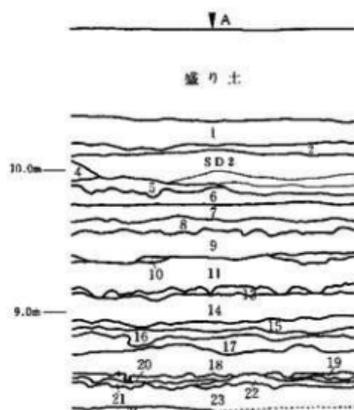
第29図 調査区位置図・設定図

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 4層上面

1号溝跡—SD1—(第31図)

調査区の北端に位置し、東西方向に走る。北側上端は調査区外のため検出できなかった。幅7m以上、深さ約55cmで、断面形は有段の緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は5層に分層されるが、全て基本層4層に類似した自然堆積層である。また、溝の南側に沿って長さ約11.5m、下端幅約60~120cm、高さ約2cmの土手状の高まりが



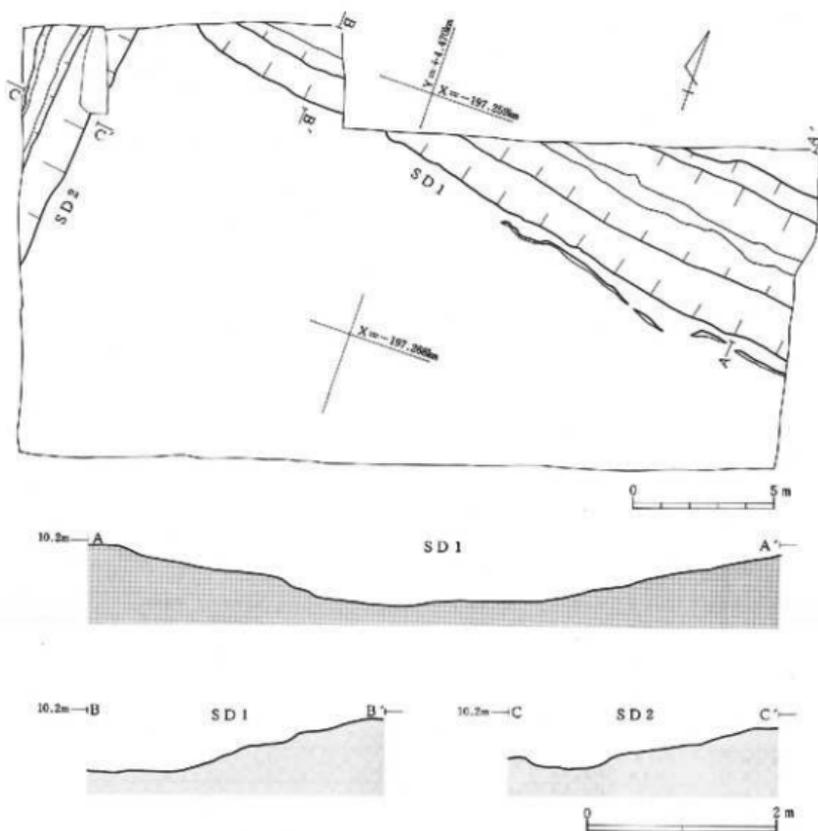
第30図 基本層序

層序	土色	土質	層厚	遺入物	備考
1	灰色 5Y 7		6cm~24cm	小 礫	水田耕作土(現代)
2	灰色 5Y 7	砂質シルト	2cm~24cm	小 礫	水田耕作土?、下部若干粒状、下部に鉄分集積層
3	灰色 5Y 7	砂質シルト	3cm~8cm	小 礫	水田耕作土?、不連続な分布、下部若干粒状、下部に鉄分集積層
4	灰黄褐色 10Y R 7	シルト	2cm~20cm	マンガン粒、鉄分	
5	にぶい黄褐色 10Y R 7	シルト	4cm~25cm	マンガン粒、鉄分	
6	黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	5cm~20cm	マンガン粒	
7	にぶい黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	5cm~12cm	マンガン粒、鉄分、灰白色火山灰小ブロック	水田耕作土?、下面起伏
8	灰黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	4cm~18cm	マンガン粒、鉄分、灰白色火山灰ブロック	水田耕作土?、下面起伏
9	褐色 10Y R 7	粘土質シルト	8cm~26cm	マンガン粒、鉄分、灰白色火山灰ブロック	水田耕作土?、下面起伏
10	灰黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	1cm~10cm	マンガン粒、鉄分	水田耕作土?、部分的に不連続な分布、下面起伏
11	にぶい黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	10cm~30cm	マンガン粒、鉄分少量	水田耕作土?、下面起伏
12	黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	2cm~8cm	マンガン粒、鉄分	水田耕作土?、部分的に不連続な分布、下面起伏
13	灰黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	2cm~10cm		水田耕作土?、不連続な分布、下面起伏
14	灰白色 10Y R 7	粘土質シルト	12cm~22cm		自然堆積層、富沢遺跡第15次調査における基本層序10層に対応の可能性
15	灰黄褐色 10Y R 7	粘土質シルト	2cm~20cm		水田耕作土?、下面起伏
16	黒色 10Y R 7	粘土質シルト	2cm~14cm		自然堆積層、部分的な分布
17	灰白色 10Y R 7	砂質シルト	4cm~12cm	炭化物粒、植物遺体	部分的な分布
18	褐色 10Y R 7	砂質シルト	2cm~24cm	植物遺体少量	水田耕作土?
19	にぶい黄褐色 10Y R 7	砂質シルト	5cm~22cm	炭灰粒多量	水田耕作土?
20	灰白色 2.5Y 7	砂質シルト	1cm~8cm	腐炭粒、植物遺体	不連続で部分的な分布
21	黄褐色 2.5Y 7	砂質シルト	2cm~8cm		水田耕作土?、不連続で部分的な分布、下面起伏
22	灰白色 2.5Y 7	砂質シルト	2cm~8cm		
23	褐色 2.5Y 7	砂質シルト	8cm~18cm		
24	灰色 5Y 7	砂質シルト	18cm~26cm		
25	褐色 10Y R 7	泥炭質粘土	6cm~11cm		
26	灰白色 10Y R 7	泥炭質粘土	13cm以上		

認められた。遺物は土師器片、赤焼土器片、中世陶器片、磁器片、種子等が出土している。これらのうち底面から出土したのは中世陶器と種類判別が不可能な素焼きの土器片で、中世陶器は常滑産の甕の体部破片である。

2号溝跡—SD2—(第31図)

調査区の西端に位置し、南北方向に走る。西側上端は調査区外のため検出できなかった。幅3.6m以上、深さ約25cmで、断面形は有段の緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は3層に分層されるが全て基本層4層に類似した自然堆積層である。遺物は出土しなかった。



第31図 SD1・2平面図・断面図

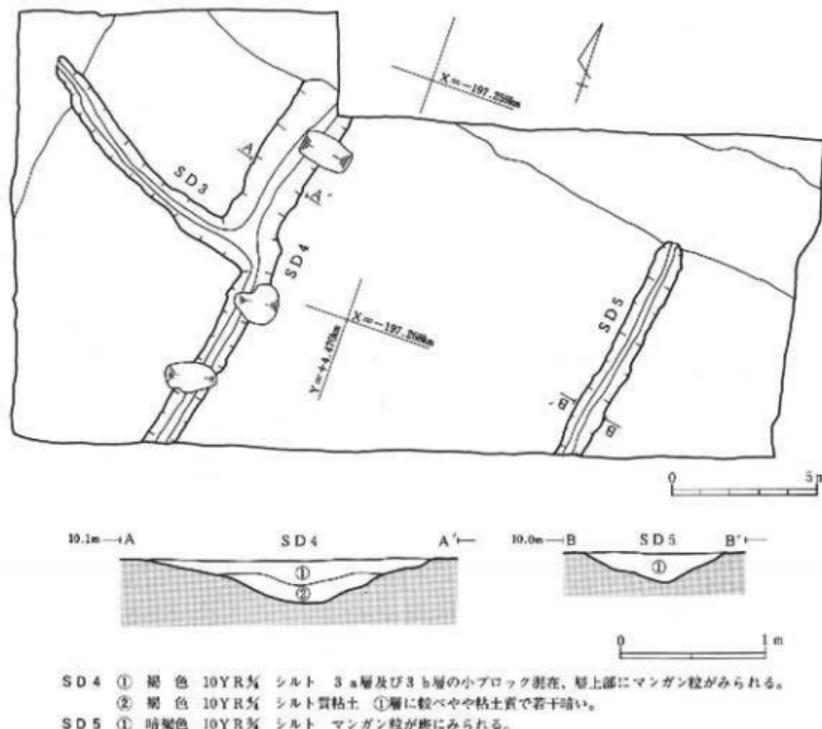
(2) 5層上面

3・4号溝跡—SD3・4—(第32図)

調査区の西部に位置し、「T」字形に接する。幅約2m、深さ約35cm、断面形は緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は2層に分層され、基本層4層に類似した自然堆積層である。遺物は堆積土中から土師器片、須恵器片等が出土した。

5号溝跡—SD5—(第32図)

調査区の東部に位置し、南北方向に走る。幅約1.2m、深さ約35cm、断面形は緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は基本層4層に類似した単層である。遺物は堆積土中から土師器片が出土した。



第32図 SD3～5平面・断面図

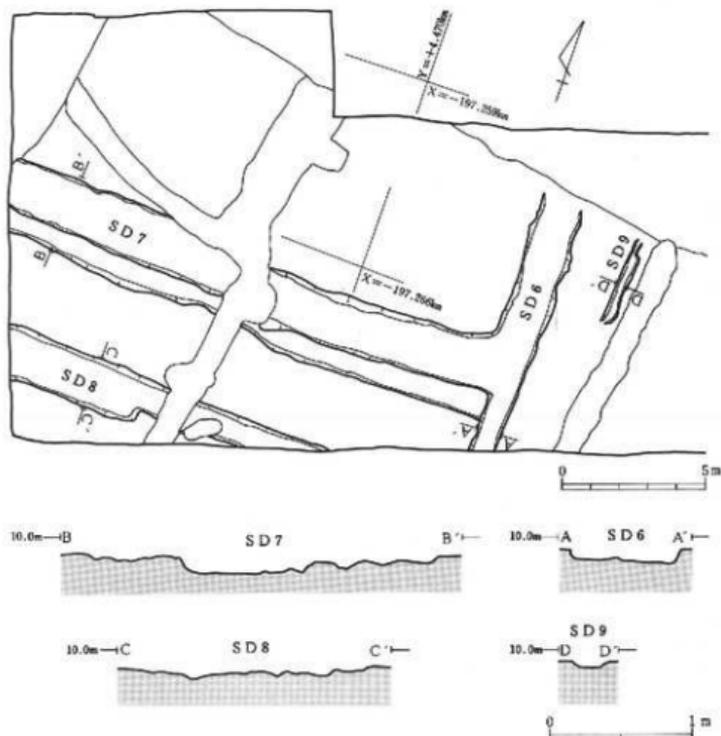
(3) 6層上面

6号溝跡—SD6—(第33図)

調査区の東部を南北方向に走り、東西方向に走るSD7と「T」字状に接する。切り合い関係は認められなかった。幅約0.7～1.5m、深さ約10cmで、壁及び底面は凹凸が著しい。底面のレベルは南側に向かって緩やかに下っている。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

7号溝跡—SD7—(第33図)

調査区の中央部を東西方向に走り、SD6と「T」字状に接する。幅約2.8m、深さ約10cmで、南壁側が2段に掘りこまれている。壁及び底面は凹凸が著しい。底面のレベルは西側に向かって緩やかに下っている。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。



第33図 SD6～9平面・断面図

8号溝跡—SD8—(第33図)

調査区の南部に位置し、SD7と並行している。幅約1~1.8m、深さ約10cmで、壁及び底面は凹凸が著しい。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

9号溝跡—SD9—(第33図)

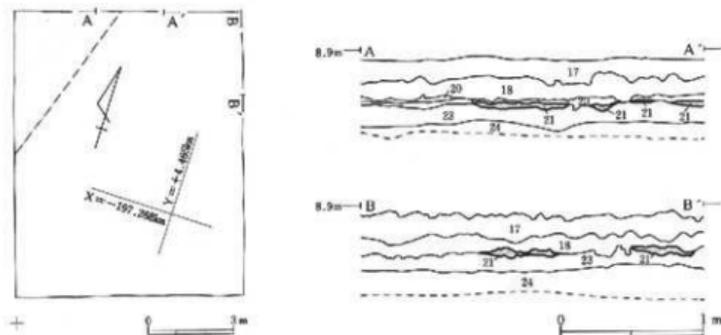
調査区の東部に位置し、SD6と並行している。検出した長さは約3.4mで、幅約30cm、深さ約5cmで、底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

(4) 21層上面

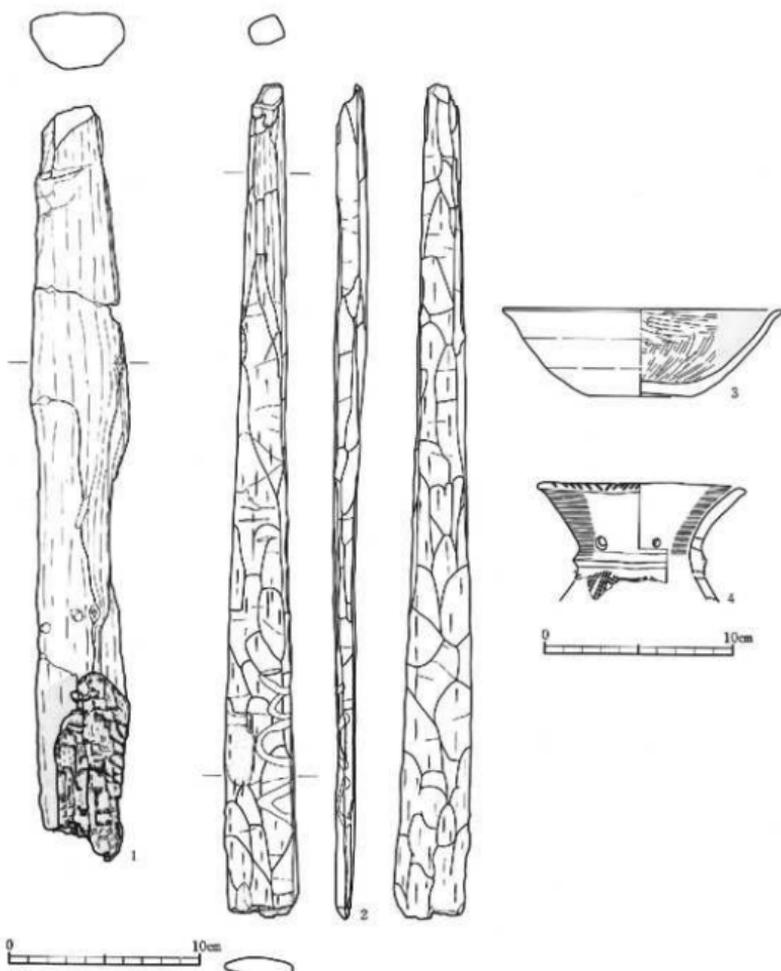
21層水田跡(第34図)

耕作土のみで畦畔などは検出できなかったが、耕作域(21層)と非耕作域(22層)との境界が認められ、また第15次調査区の水田跡と同一の層であることが確認されたため水田跡と確定した。ただ、耕作域と非耕作域との境界は平面で確認したのではなく、調査区外壁セクションでの確認である(第30図)。境界ラインは調査区の北西部に想定され、N-18°-Eの方向をとる。耕作域はこのラインの南東側である。耕作土(21層)は直下にある砂質シルトの互層(22層)を攪拌したもので、厚さは2~8cmである。下面は凹凸が著しく、鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は約8.525~8.575mで西側へ緩やかな下り傾斜を示す。

なお、遺物は出土しなかった。



第34図 21層水田跡平面・断面図

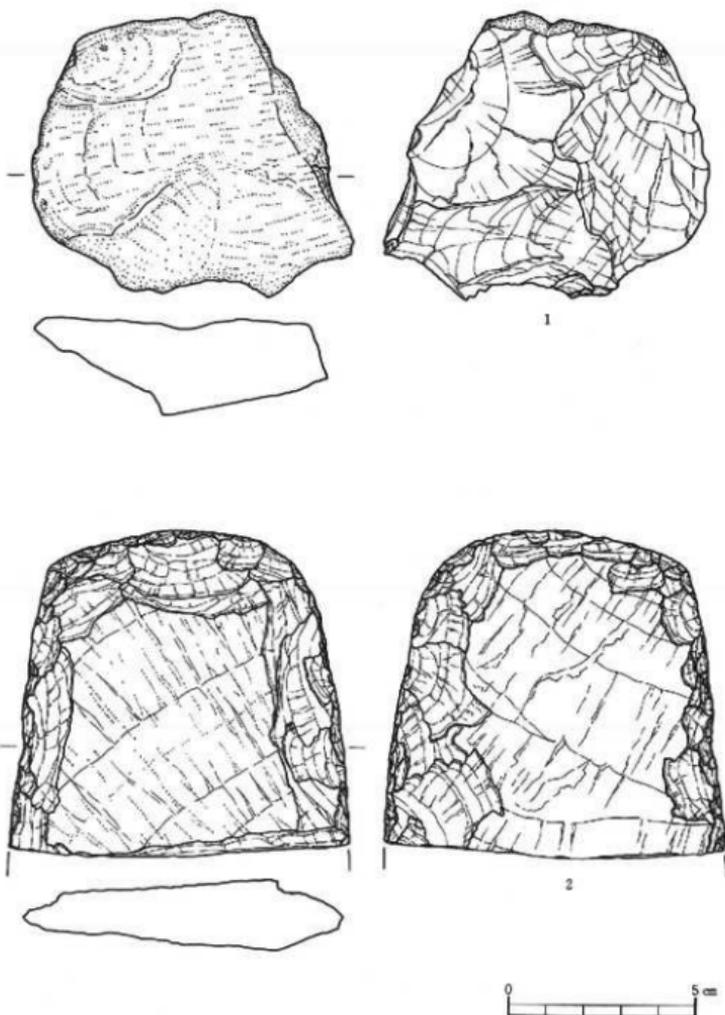


No.	図録番号	出土状況・部位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	厚さ	先端加工	基部加工	備考
1	写真57-3	18層	細工材	漆	4分割材	40.1cm	4.4cm	—	縦状方向	なし	基部に先取
2	写真57-4	18層	木製品	板目~一部板目	板・一部棒状	44.3cm	3.8cm	0.8cm	不明	全面に面取り	一部先取

No.	図録番号	遺構・層位	種別	器種	遺存状態	口径	底径	器高	取耳	特徴
3	写真57-1	6層	土師器	杯	約与	(14.8cm)	5.4cm	(4.7cm)	0.36	口内は黄褐色、外側は赤褐色、ヘラミガキ・褐色処理
4	写真57-2	18層	弥生土器	碗	口縁~基部	11.3cm			—	横穴縁部1角、穿孔2(外向~内面)→横ナゲ →口縁部、斜孔浅部多角(穿孔部分を壁として 縦方向、外向~内面)部形、3本1連洗線 (部位2条4単位→巻文多角)ナゲ(口縁 部横ナゲ)→口縁部下平、縦穴の粗いミガキ

第35図 出土遺物(1)

()内は復元値



No.	図面番号	層位	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
1	写真57-5	18層	石 椀	77.0	86.0	24.0	170.1	不明	変成岩か珪藻岩が結化したもの
2	写真57-6	18層	石 椀	87.5	91.0	19.0	218.6	細粒砂岩?	輸入品の可能性

第36図 出土遺物(2)

(5) その他の出土遺物

基本層4～7・9層からは、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、種類判別不能な素焼きの土器片、陶器片、磁器片、瓦片、土製品が出土している。このうち土師器はすべてロクロ使用・内面ヘラミガキ後黒色処理されたもので、4～7層から出土している。図示できたのは6層出土の1点のみである(第35図3)。また、陶器、磁器で産地・年代などが確定できたものは9点あるが、そのうち4層中からは在地の中世陶器2点及び瀬戸・美濃の灰釉皿1点(16世紀末～17世紀初頭)が出土し、5・6層から常滑産の甕3点(中世)、瀬戸産の碗2点(15世紀)、灰釉の碗1点(15世紀)が出土している。基本層18層からは弥生土器1点(第35図4)、石器2点(第36図)、加工材2点(第35図1・2)のほか樹木片、種子が出土した。弥生土器は十三塚式に比定できるものである。石器のうち1点は石核である。他の1点は打製の石鏃と思われる、破損している。加工材のうち1点は棒状を呈し、全面が面取りされている。用途は不明である。

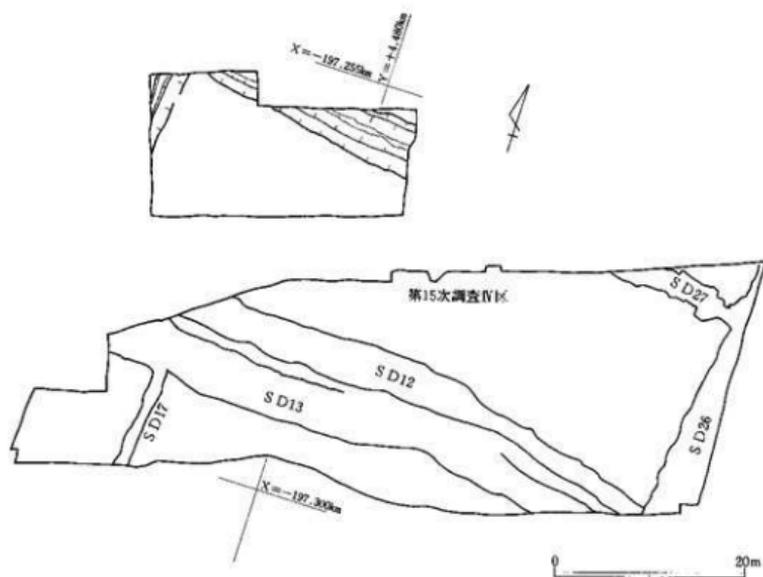
4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出した遺構は4～6層上面の溝群(SD1～9)と21層水田跡である。また、水田跡の可能性のある層としては基本層とした2・3・7～13・15・18・19層の各層が上げられる。これらの年代については隣接する第15次調査の結果も考慮に入れると、以下のように推定される。なお、第15次調査の基本層序と確実に対比できたのは1～13層と20～26層で、その間の14～19層の対応関係を明らかにすることは出来なかった。

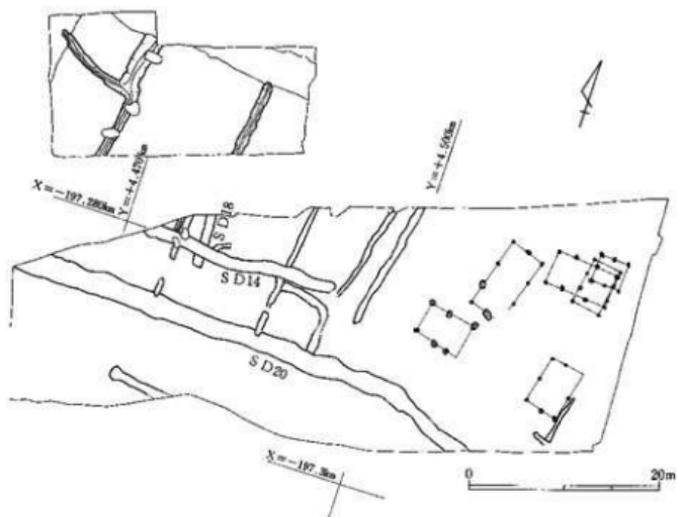
2・3層	近世以降	第15次調査1・2層
4層	中世	3a層
5層	中世	3a～3b層
6層	中世	3b層
7層	平安時代(灰白色火山灰降下以降)	4b層
8層	平安時代(灰白色火山灰降下前後)	5a層
9層	平安時代(灰白色火山灰降下以前)	6層
10・11層		7b層
12・13層		7c層
14～19層		8～12層
20層		13a層
21層	弥生時代・樹形開式期以前	13b層
22層		13c層
23層		14a層

24 層	14b 層
25 層	15 層
26 層	16 層

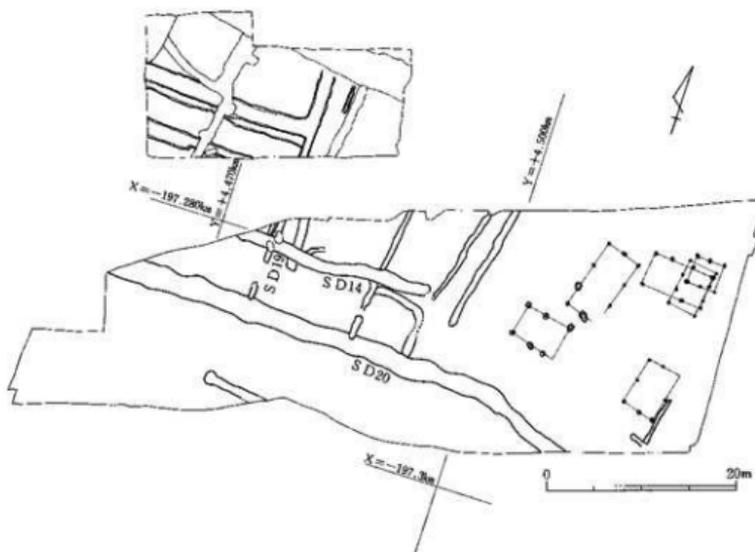
2. 中世の遺構は4層上面～6層上面まで3時期にわたって検出された。第15次調査では3a・3b層の2時期のみの確認に留まっているが、3b層の遺構に切り合い関係が認められるので、本来は当調査区のように3時期程度の変遷があったものと考えられる。両調査区で検出された遺構の対応関係は第37～39図に示すとおりである。なお第15次調査ではこれらを13～14世紀に位置づけているが、今回の調査では明確な時期を示す遺物としては15～17世紀初頭のものが出土したのみであった。今後の検討課題としたい。



第37図 40次4層・15次3a層平面図



第38図 40次5層・15次3b層平面図

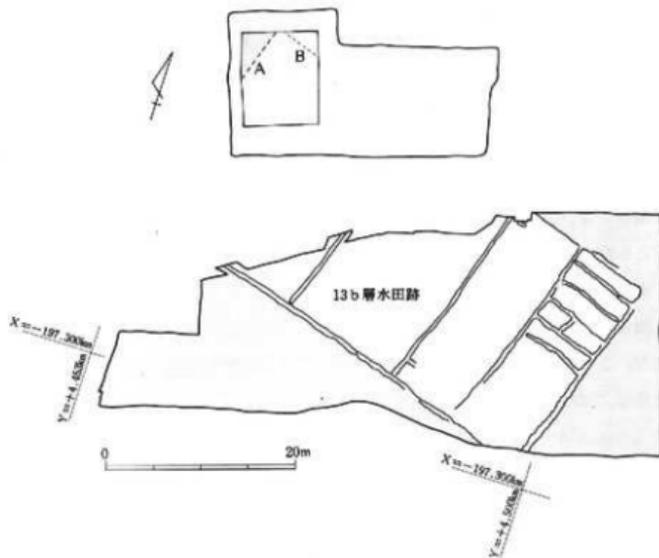


第39図 40次6層・15次3b層平面図

3. 21層水田跡は樹形囲式期以前に位置づけられている第15次調査13b層水田跡に対応する。第15次調査では水田域の北・東・南側に非耕作域を検出しており、水田域の西側への広がり不明であった。今回の調査では断面観察ではあるが、耕作域と非耕作域との境界ラインを想定することができ、これによって水田域の西端を確認することができた（第40図A）。

なお調査区の北部にも水田域北側の境界ラインの存在が予想されたが（第40図B）、この付近は上層の19層による擾乱が著しく、21層は部分的に認められただけであった。したがって、この部分については耕作域と非耕作域の区別をすることは困難であり、確実な境界ラインを想定することは出来なかった。ただ調査区の南半部では耕作土が連続的に認められることから以下のような可能性は考えられる。

- ①境界ラインは第15次調査区から直線的に延び、推定ラインBに接続する。この場合の耕作域は南北約23.5m、東西約47mの長方形で面積は約1105m²である。
- ②境界ラインは第15次調査区から北側に振れて延び、推定ラインBよりも北側を通る。この場合の耕作域は西辺がやや長い不正な長方形となる。
- ③境界ラインは第15次調査区から直線的に延びるのではなく、途中で北側に屈曲する。この場合の耕作域は①、②よりもさらに北側に拡大された形となる。

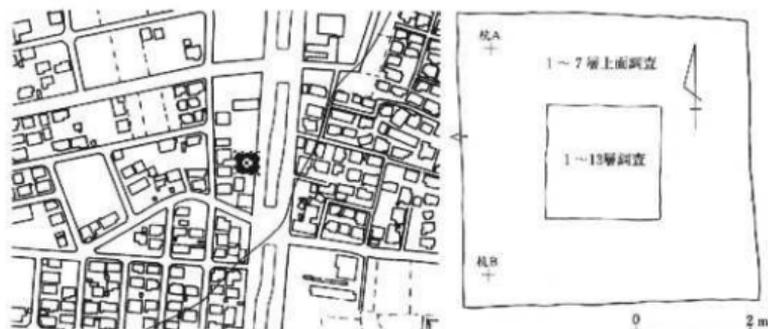


第40図 40次21層・15次13b層平面図

第6節 富沢遺跡第41次調査

1. 調査方法

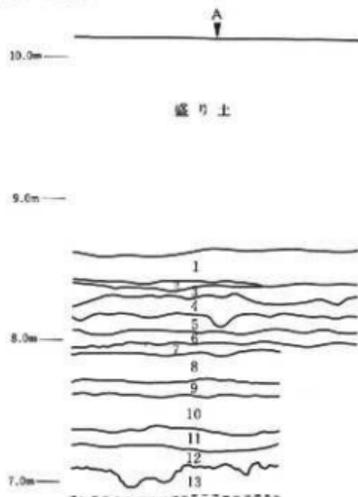
調査区の設定面積は約5×5m (26m²)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。7層上面までは、調査区全面の精査を実施し、7層以下は、約2×2mの試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。



第41図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に13層が確認された。各層とも粘土層で、特に6・7層は粘性が強い。また、10層以下では泥炭分を含む泥炭質粘土層となる。グライ化は、7層以下から漸次進む。2～5層は水田土壌の可能性がある。各層は、ほぼ水平な堆積状況を示している。



第42図 基本層序

層序	土 色	土 質	層 厚	含 入 物	備 考
1	暗緑灰色 10G Y 灰	粘土	15cm~25cm		水田耕作土(現代)
2	暗オリーブ灰色 5G Y 灰	粘土	2cm~8cm	マンガン粒	水田耕作土?、部分的分布
3	灰黄褐色 10Y R 灰	粘土	10cm~18cm	マンガン粒多量	水田耕作土?、下層粘土起状
4	赤褐色 5 Y R 灰	粘土	8cm~16cm	マンガン粒多量	水田耕作土?、下層粘土起状・強分集層
5	11.5R1黄褐色 10Y R 灰	粘土	6cm~15cm	マンガン粒多量・鉄分	水田耕作土?、下層粘土起状・上面に鉄分集層
6	暗褐色 10Y R 灰 11.5R1黄褐色 10Y R 灰	粘土	5cm~10cm	マンガン粒多量	瓦礫・自然堆積層
7	灰 色 5 Y 灰	粘土	8cm~18cm		瓦礫・自然堆積層
8	明緑灰色 5 G 灰 オリーブ灰色 5 Y 灰	粘土	70cm前後		瓦礫・自然堆積層
9	黒 色 5 Y R 灰	粘土	10cm前後	泥炭多量	自然堆積層
10	海浜黄色 2.5Y 灰 黒 色 5 Y R 灰	灰黄質粘土	18cm~28cm	泥炭	瓦礫・自然堆積層
11	黒 色 5 Y 灰	泥炭質粘土	6cm~14cm	泥炭多量	
12	オリーブ灰色 10Y 灰	泥炭質粘土	10cm~25cm	炭化物粒・炭灰	
13	暗オリーブ灰色 5 G Y 灰	泥炭質粘土	20cm以上	泥炭	

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 3層上面

杭列

調査区北東側で、南北方向に4本出土した。この内3本は集中している。この3本は矢板で、他の1本は分割材である。杭列検出付近は2層が存在せず、1層下が直接3層となっており、当層から打ち込まれたかどうかは不明である。

(2) 4層上面

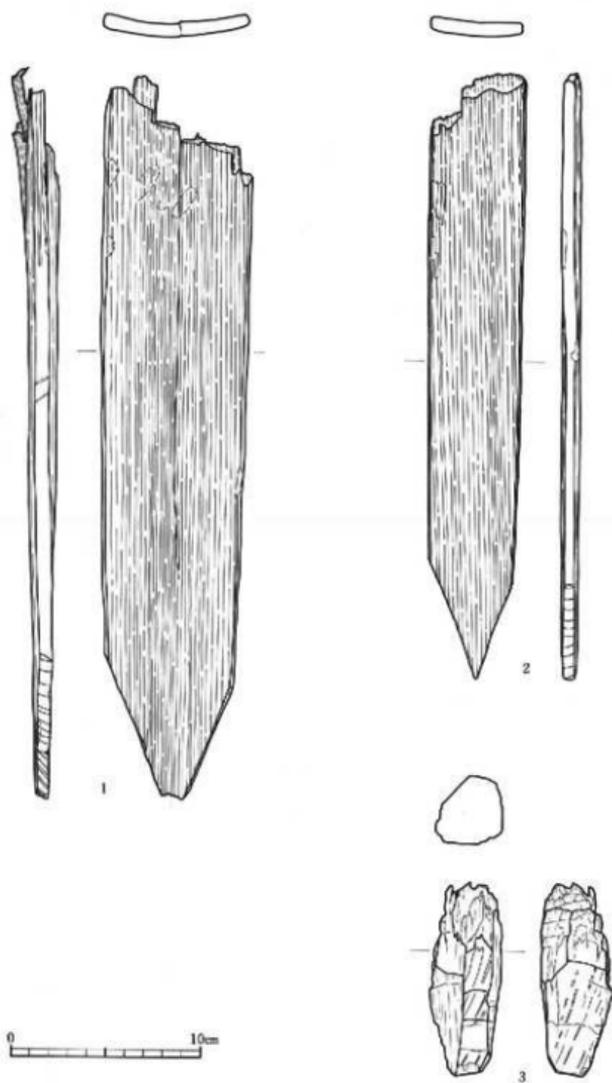
1号溝跡—SD1—(第44図)

調査区の東隅に位置し、南北方向に直線的に走行する。上端幅約130cm、深さ約15~25cmで、断面形は「U」字状を呈する。底面・壁面は凹凸が著しい。堆積土は粘土の単層。出土遺物は、底面より摩滅した土器片が1点出土したのみである。

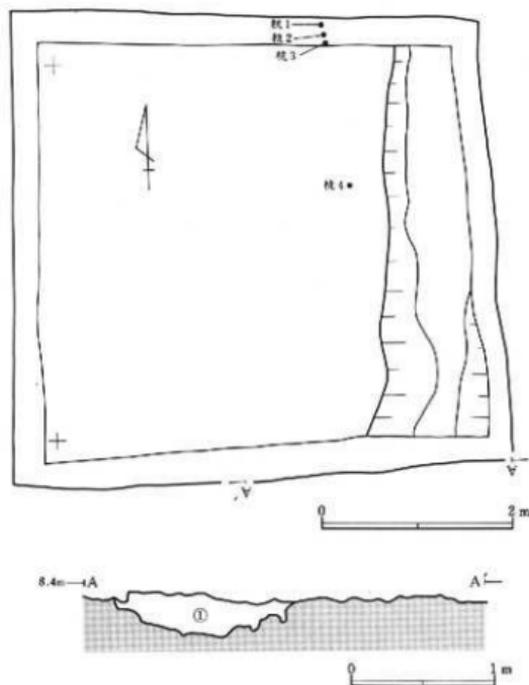
(3) その他の出土遺物

2層中よりロクロ使用の土師器片が1点出土したのみである。

No	検出層序	検出番号	出土遺構・層位	種別	材質	形状	長さ	幅・直径	厚さ	使用状況	表面加工	備考	
1	第43回	1	写真58-1	3層?	土	針、板目	38.7cm	7.8cm	0.5cm	2方向	平滑	ノコギリ使用	
2	第43回	2	写真58-2	3層?	土	針、板目	32.1cm	5.0cm	0.8cm	2方向	平滑	ノコギリ使用	
3	—	—	—	3層?	土	針、板目	15.0cm	3.5cm	0.5cm	2方向	平滑	ノコギリ使用	
4	第43回	3	写真58-3	3層?	土	針	分割材	10.2cm	3.5cm	—	溝底方向	不明	光澤のみ使用



第43圖 出土遺物



SD1 土層註記

① 黒褐色 5YR 粘土 下層の上をブロックで少量含む。

第44図 杭(3層)平面・SD1(4層)平面・断面図

4. ま と め

1. 検出遺構としては、杭列、SD1がある。これらは水田跡に伴う施設、水路の可能性もある。これら遺構及び各層の所属年代であるが、時期決定資料がなく、周辺調査区との層位の対応も不可能で、年代は不明である。
2. 土層の断面観察より、2・4・5層は水田耕作土の可能性のある層としたが、これら各層からは、イネのプラント・オパールは検出されなかった。今後の検討課題としたい。

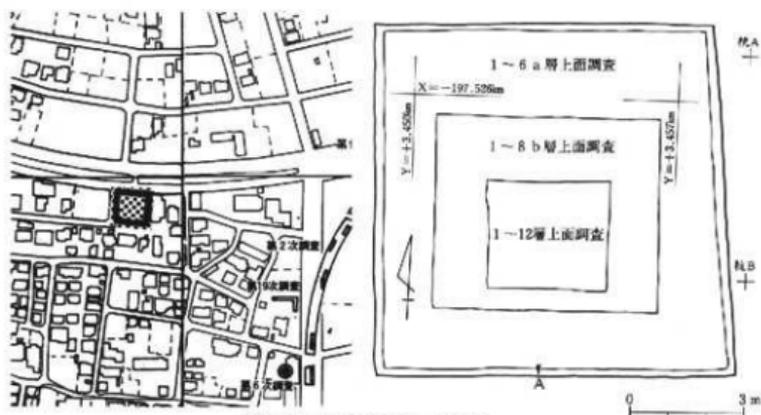
第7節 富沢遺跡第42次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約80m²である。調査は盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力によって行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。6a層までは調査区全面の精査を実施した。6a層より8b層上面までは安全確保のために調査区を内側に縮小して、約30m²で調査を行った。8b層以下は3×3mの試掘区を設定し、12層までの掘り下げを行った。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X=-197.52475km、Y=+3.45888km 杭B：X=-197.53077km、Y=+3.45892km）。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別12層、細別では19層が確認された。各層の土質は1～5層がシルト質、6a～6c層は砂礫及び砂質シルトで河川などの氾濫によって堆積したものと思われる。7層以下は粘土質となるが8a・8b層は泥炭を含み、8a層は泥炭質粘土である。また、9a・9c層は砂である。グライ化は11層から漸次進み、12層では顕著になる。現代のものを除く水田土壌は4層であるが、この他に2・3・7層も水田土壌の可能性がある。また3層からは灰白色火山灰が少量検出されているが、これは下層のものが巻き上げられて混入したものと考えられる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は1・3・4・8b層である。



第45図 調査区位置図・設定図

順序	土色	土質	層厚	採人物	備考
1	黒褐色 10Y R 7/5	砂質シルト	4cm-15cm	鉄分	水田耕作土(現代)、下面に鉄分集積層
2	黒褐色 2.5Y R	砂質シルト	4cm-10cm	鉄分	水田耕作土?、下面起伏
3	暗褐色 10Y R 7/5	粘土質シルト	6cm-13cm	灰白色火山灰粒	水田耕作土?、下面起伏
4	黒褐色 10Y R 7/5	粘土質シルト	7cm-12cm	鉄分、粗砂多量	水田耕作土、下面起伏
5	黒褐色 10Y R 7/5	粘土質シルト	2cm-8cm	鉄分、粗砂少量	不連続で部分的な分布
6 a	黒褐色 10Y R 7/5	砂	20cm-25cm	鉄分、小礫多量	自然堆積層
6 b	灰白色 10Y 8/5	砂礫	35cm程度	鉄分	自然堆積層
6 c	黒褐色 10Y R 7/5	砂質シルト	3cm-8cm		自然堆積層
6 d	灰白色 10Y 8/5	砂	6cm-20cm		自然堆積層
6 e	黒褐色 10Y R 7/5	砂質シルト	16cm-30cm		自然堆積層
7	黒色 5Y 3/5	粘土	3cm-14cm	植物遺体	水田耕作土?、下面起伏
8 a	オリーブ黒色 7.5Y 3/5	泥炭質粘土	4cm-10cm	植物遺体	自然堆積層
8 b	灰白色 10Y 8/5	泥炭質粘土	10cm前後	植物遺体	自然堆積層
	灰色 2.5Y 3/5	粘土		植物遺体	自然堆積層
9 a	にじみ黄褐色 10Y R 7/5	砂	8cm程度		自然堆積層
9 b	灰色 7.5Y 3/5	シルト質粘土	10cm-18cm	植物遺体	自然堆積層
	黒色 7.5Y 3/5	シルト質粘土		植物遺体	
9 c	にじみ黄褐色 10Y R 7/5	砂	10cm程度		自然堆積層
10	黒色 10Y 8/5	泥炭質粘土	4cm前後	植物遺体	自然堆積層
11	黄褐色 2.5Y 3/5	粘土	6cm-20cm	植物遺体	自然堆積層
12	灰色 10Y 8/5	シルト質粘土	50cm以上	植物遺体少量	自然堆積層

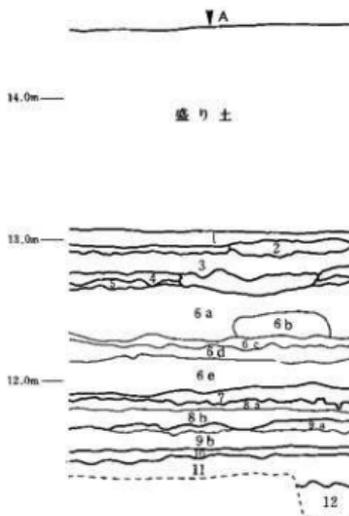
3. 検出遺構と出土遺物

(1) 4層上面

4層水田跡 (第47図)

<遺構状況> 調査区西半部で水田跡を検出したが、部分的な検出で形状、規模は明らかでない。方向はN-39°-Eで、検出部分での最大幅は4.5m、耕作土上面からの高さは2~5cmである。これに取りつく小畦畔は検出されなかった。畦畔は、耕作土と同じ4層を盛り上げて作られている。耕作土4層は層厚7~12cmで、分解が進んでいる。下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は12.75~12.8mの間で、全体的に南東方向に下っている。

<出土遺物> 作土中より須恵器片が1点出土した(第50図2)。底部を欠いており、切り離し技法は不明である。胎土は緻密であるが、若干の細砂粒及び白色針状物質を含んでいる。



第46図 基本層序

(2) 6層上面

1号溝跡—SD1—・I~7号土坑—SK1~7—(第48図)

SD1は調査区を北東から南西方向に横切る溝跡で、方向はN-64°-Eである。上端幅は

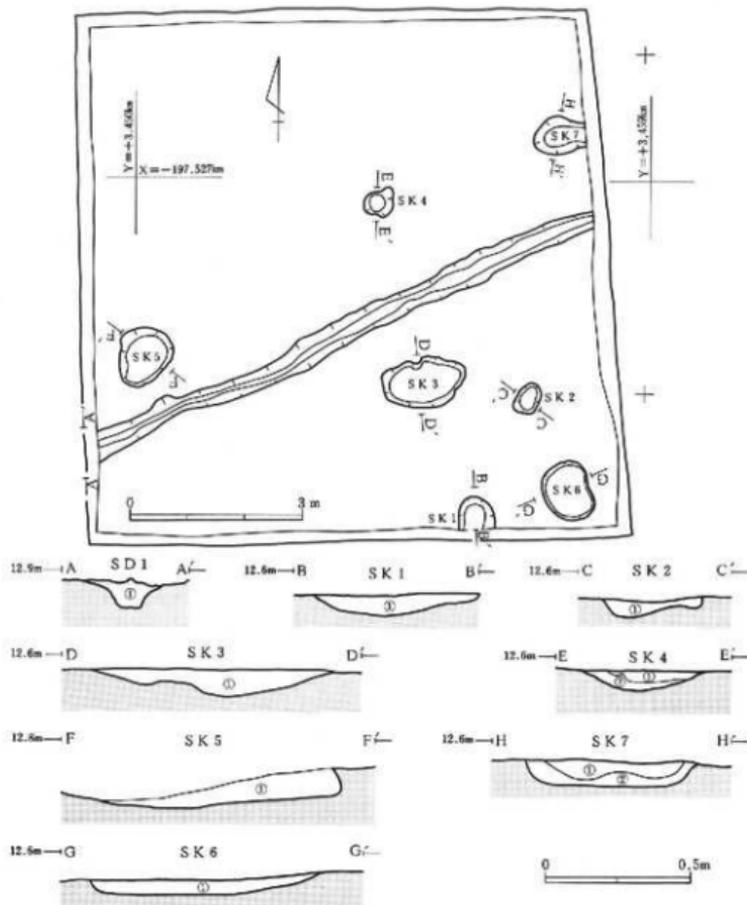


第47図 4層水田跡平面・断面図

40～60cm、下端幅は10～25cmである。深さは約20cm程度で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は砂質シルトの単層である。土坑は平面形がいずれも楕円形を呈し、掘りかたも浅い。遺構の検出面である6a層は河川などの氾濫によって堆積したと思われる砂層で生活面とは考えにくく、掘りこみ面は上層であった可能性が高い。溝跡、土坑ともに性格は不明である。溝跡、土坑とも遺物の出土は無かった。

土坑計測表

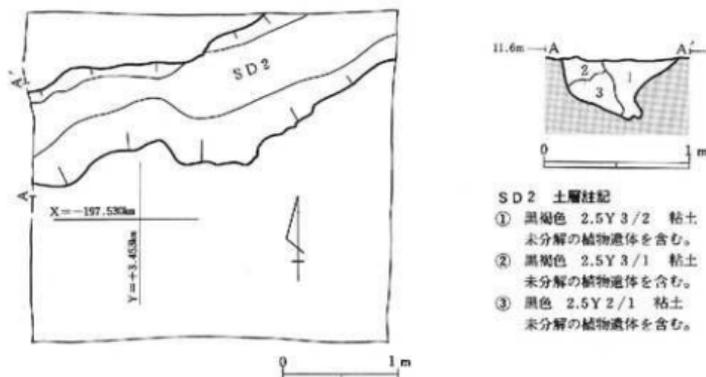
No	SK1	SK2	SK3	SK4	SK5	SK6	SK7
大きさ (cm)	55×62J上	37×57	83×143	50×57	87×108	75×100	60×92J上
深さ (cm)	7	6	10	7	14	5	9



第48図 SD1・SK1～7平面・断面図

土層註記

- SD1 ① 黒褐色 10Y R 2/2 砂質シルト 層下部には6a層黒灰色10Y R 6/1より若干暗い砂層がみられる。層上部にはIV層黒褐色と考えられるブロックがまじる。
- SK1 ① 黒褐色 10Y R 3/1 砂質シルト 酸化鉄、軽石粒を含む。
- SK2 ① 黒褐色 10Y R 3/1 砂質シルト 酸化鉄、軽石粒を含む。黒褐色10Y R 3/2粘土をブロック状に含む。
- SK3 ① 黒褐色 10Y R 3/1 砂質シルト 酸化鉄、軽石粒を含む。
- SK4 ① 黒褐色 10Y R 3/1 砂質シルト 酸化鉄、軽石粒を含む。
② 黒色 10Y R 2/1 粘土 炭化物を少量含む。
- SK5 ① 黒褐色 10Y R 3/1 砂質シルト 酸化鉄、軽石粒を含む。灰オリブ色5Y 5/2砂をブロック状に含む。
- SK6 ① 黒褐色 10Y R 3/1 砂質シルト 酸化鉄、軽石粒を含む。
- SK7 ① 黒褐色 10Y R 3/1 砂質シルト 酸化鉄、軽石粒を含む。
② 灰オリブ色 5Y 5/2 砂 砂に①の土を多くブロック状に含む。



第49図 SD 2 平面・断面図

(3) 11層上面

2号溝跡—SD2—(第49図)

調査区(試掘区)内を北東から南西方向に横切る溝跡で、方向はN-73°-Eである。平面形は直線的ではなく、凹凸がみられる。上端幅は0.7~1.2m、下端幅は0.3~0.6mで、断面形は概ね逆台形を呈するが、不整形である。堆積土は粘土3層からなる。性格は不明であるが、自然流路の可能性もある。遺物の出土はなかった。

(4) その他の出土遺物

基本層の1・3・8b層から陶器片、土師器片、木製品、石製品などが出土した。陶器片は2点で、ともに1層からの出土である。土師器片は3層から坏の小破片が1点出土した。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。石製品は11層から磨石が1点出土した。

4. 遺構の所属年代とまとめ

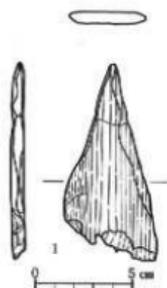
1. 4層水田跡では大畦畔を検出したのみで、水田区面の形状、規模を明らかにすることはできなかった。時期はこれを知る資料に乏しく明確ではないが、出土遺物や灰白色火山灰のあり方から、一応平安時代としておきたい。

2. 6a層では溝跡1条と土坑7基を検出したが、出土遺物もなく性格は不明である。これらの遺構は、上層からの掘りこみである可能性が強い。時期は平安時代以前である。

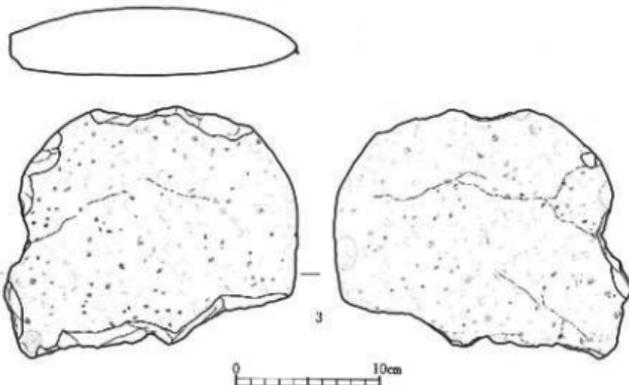
3. 11層上面で溝跡1条を検出した。出土遺物もなく性格は不明であるが、平面、断面形が不整形で、自然流路の可能性も強い。

4. 4層以外で水田跡の可能性のある層は2・3・7層であるが、各々の推定時期は次のとおりである。2層—中世以降、3層—平安時代以降～中世、7層—平安時代以前

なお、当調査区周辺は調査例が少なく、各水田跡の様相には不明な点が多い。今後調査例の増加を待って、水田の規模、形状、所属時期及び水田域の広がりなどを明らかにしていかなければならない。



採取番号	出土遺跡・層位	種類	材質	形状	長さ	幅・底径	厚さ	表面加工	裏面加工	備考
写真59-3	3層	加工材	針、板目	板	10.5cm	3.5cm	7mm	2方向	平滑	ノコギリ使用



No.	写真番号	遺跡・層位	種類	砂種	埋存度	口径	底径	器高	特	取
2	写真59-1	4層水田跡	埋存器	砂	口縁～底部	14.0cm				ワラコ
3	写真59-2	11層	磨石	—	—	—	—	—	—	安山岩

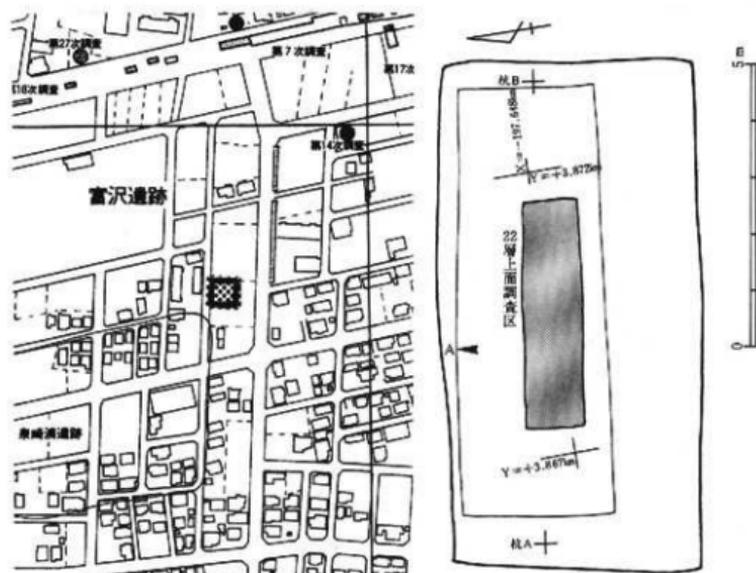
第50図 出土遺物

第8節 富沢遺跡第43次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は $9 \times 4.5\text{m}$ (約 40m^2)である。調査は、現地表下 2.5m にも及ぶ最近の擾乱層を重機で除去し、以下は人力で行った。調査区は第37次調査区の南側隣接地であるが、前述した擾乱により37次調査で確認された水田土壌のほとんどは失われていた。したがって、今回の調査では主に5層以下の、弥生時代以前の土層が調査の対象となった。特に、旧石器時代の層が確認された30次調査地点(太田他:1988)から東に 100m 程の近い地点であることから、同様の層の存在の確認と広がり把握をねらいとした。なお、安全確保のため下層になるにしがたい調査面積を縮小し、また、そのつど、周囲に土層観察と排水を兼ねた側溝を設けた。実測では杭A・Bを基準として行った。その杭の座標値は、A: $X = -197.647206\text{km}$, $Y = +3.865533$, B: $X = -197.648336\text{km}$, $Y = +3.873603\text{km}$ である。

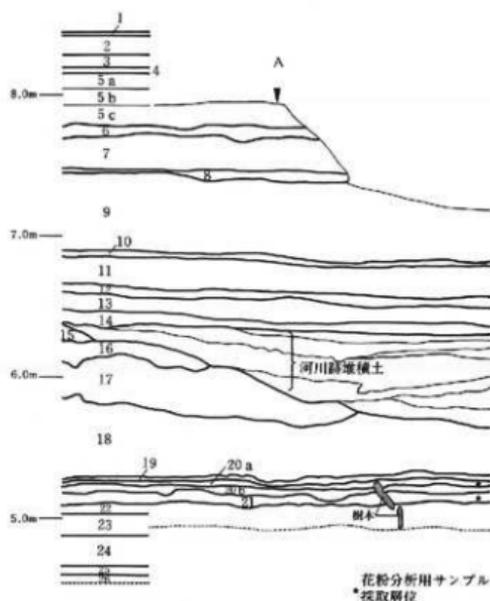
2. 基本層序



第51図 調査区位置図・設定図

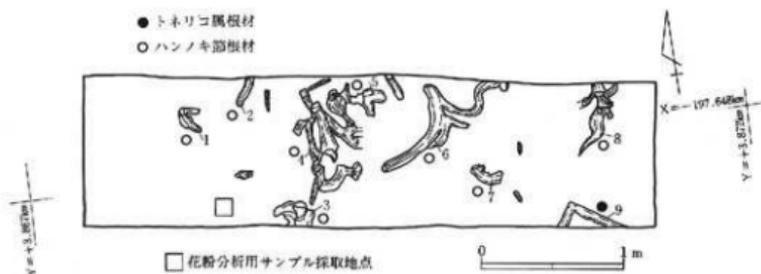
今回の調査では、26層の層序が確認された。これらは基本的には、5～11までの泥炭層か泥炭質粘土、12～14層の粘土、15層以下のシルト・砂・粘土の互層から成っており、グライ化は15層以下から漸次進んでいる。

各層からは遺構は検出されなかったが、15層上面で河川跡とみられる落ち込みが2条重なって発見された。また、20・21層は植物遺体を多く含む泥炭質粘土層であることが判明し、22層上面からは主に根の部分を中心とする樹木が10本前後検出された。この大半は樹木の状況から、その場に生育していたものと考えられる。さらに、



第52図 基本層序

層序	土色	土質	層厚	混入物	備考	
1	黒褐色	10Y R 号	シルト	3cm	細砂	水田耕作上?
2	黒色	10Y R 号	シルト質粘土	13cm		水田耕作上? 下層起伏
3	黒色	10Y R 号	泥炭質粘土	9cm		粘土と礫状をなす
4	暗灰黄色	2.5Y 号	粘土	4cm		
5 a	黒色	10Y R 号	泥炭	10cm	植物遺体多量	
5 b	黒色	10Y R 号	泥炭質粘土	13cm	植物遺体	
5 c	黒褐色	10Y R 号	泥炭	20cm	植物遺体多量	
6	灰黄褐色	10Y R 号	粘土	7cm		
7	黒色	10Y R 号	泥炭質粘土	24cm	植物遺体	
8	灰褐色	10Y R 号	粘土	2cm-9cm		
9	黒色	10Y R 号	泥炭質粘土	50cm	植物遺体	層中に粘土・泥炭を挟む
10	黒褐色	10Y R 号	泥炭質粘土	4cm	植物遺体	
11	黒色	10Y R 号	泥炭質粘土	22cm	植物遺体	層中に粘土を挟む
12	黒色	10Y R 号	粘土	6cm	植物遺体少量	
13	黒色	10Y R 号	粘土	8cm-18cm	植物遺体少量	
14	黒色	7.5Y R 号	シルト質粘土	5cm-28cm	砂粒	
15	灰色	5Y 号	砂質シルト	14cm	砂粒	
16	緑灰色	7.5G Y 号	砂(細砂)	14cm		
17	暗緑灰色	7.5G Y 号	粘土質シルト	15cm-43cm		細砂が不連続に存在
18	緑灰色	5G 号	シルト質砂	50cm		砂と根状をなす
19	暗緑灰色	7.5G Y 号	粘土	4cm		
20 a	灰黄褐色	10Y R 号	泥炭質粘土	4cm	植物遺体	
20 b	暗灰黄色	2.5Y 号	泥炭質粘土	6cm	植物遺体	植物遺体を含む薄い層が何枚も挟まれている
21	黒褐色	10Y R 号	泥炭質粘土	8cm	植物遺体(樹木など)	
22	にじみ黄色	2.5Y 号	粘土	7cm		21層の層厚か、おぼろかに黒粒がある。
23	灰黄色	2.5Y 号	粘土	15cm		
24	暗緑灰色	7.5G Y 号	シルト質粘土	22cm		
25	にじみ黄褐色	10Y R 号	粘土	8cm	植物の腐植層、植物遺体多量	
26			細砂			



第53図 22層上面樹木出土状況

一部の試掘ではあるが、25層にも樹木が含まれていることも確認された。

3. 出土遺物

遺物には、河川跡の壁際から出土した細片の縄文土器9点があるが、いずれも磨減が著しく図示できなかった。土器の胎土中に植物繊維を含むことから、縄文時代の早期末から前期前葉頃のものと考えられる。

また、20・21層中、22層上面からは樹木や、種子（水洗選別により採取）などの植物遺体が検出された。樹木は後記の分析結果によるとその大半がハンノキの根であることが判明した。種子では、福島大学の鈴木敬治氏によると、大半がミツガシワ (*Menyanthes trifoliata* Linn.) とスゲ属 (*Carex*) であるとのことである。

4. ま と め

今回の調査では攪乱が大きく及んでいたこともあり、遺構は発見されなかった。しかし、下層から樹木や植物遺体を含む泥炭質粘土層の存在が確認されたことは30次調査の旧石器時代の層との関連で大きな成果であった。これらの層のうち、20a・21層については花粉分析を行い、後記の結果を得た。それによると両層とも周辺には針葉樹林が発達し、現在よりも寒冷な気候であったことを示しているとのことである。また、特に20a層では挺水植物のミツガシワが多いのが特徴で、21層に比べ、より沼地的であつたらしい。このミツガシワの花粉の層位的なあり方は種子でも同様の傾向を示しているようである。22層上面については樹種同定によるとその大半がハンノキであり、付近は湿地林の様相を呈していたとのことである。尚、これらの樹木の一部について C_{14} 年代測定を行ったところ、後述の結果を得た。上下を含めた層の特徴や樹木の年代などからみると、30次調査の旧石器時代の層と同じ層である可能性が高いが、今後、周辺の調査を進めることにより、さらに検討していく必要がある。

5. 分析・同定

(1) 花粉分析

守田 益宗 (東北大学理学部生物学教室)

富沢遺跡の第43次調査に関連して、花粉分析を行ったので報告する。

花粉分析の試料は、植物遺体を多く含む21層とその上位の20a層から、それぞれ1試料を採取した。第52・53図にその位置と層位を示す。試料は、KOH-ZnCl₂-Acetolysis法で処理を行い、花粉・胞子の同定は、顕微鏡の倍率を250～1250倍にして行った。各試料について、花粉・胞子の総計が500粒以上で、そのうち高木花粉 (Tree Pollen: TP) が200粒以上になるまで同定し、その間に出現するすべての花粉・胞子を記録した。花粉分析結果を下表に示す。

21層・20a層ともに、高木花粉のうち針葉樹が約70%を占めるが、21層では *Pinus* が20a層では *Picea* が最優勢を示すという違いが認められる。広葉樹の花粉は、*Betula* を除き、あまり出現しない。両層の堆積当時、本遺跡の周辺には針葉樹林が発達しており、古気候は現在に比べかなり寒冷であったと言える。しかし、両層の針葉樹花粉の出現の違いが、遺跡周辺の広域的な植生の変化を示しているのか、この付近の局地的な植生の違いによるものかは分析点数が少なく明らかにしえない。

草本花粉では、両地点とも Cyperaceae が優占するが、20a層では挺水植物の *Menyanthes* の多産が特徴的である。*Menyanthes* (ミツガシワ) は、沼地などの岸に近い所などに生育するので、20a層の時代にはそのような場所が付近にあったことを物語っている。

		20a層	21層			20a層	21層
<i>Pinus</i>	マツ属	84	141	Gramineae	イネ科	14	5
<i>Abies</i>	モミ属	9	10	Cyperaceae	カヤツリグサ科	207	370
<i>Larix</i>	カラマツ属	2	4	Liliaceae	ユリ科	2	
<i>Picea</i>	トウヒ属	119	109	<i>Historia</i>	イブキトラノオ属		1
<i>Tsuga</i>	ツガ属	33	26	<i>Aconitum</i>	トリカブト属	2	
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	1	1	<i>Clematis</i>	センニンソウ属	3	
<i>Juglans</i>	クルミ属	1		<i>Ranunculus</i>	キンボウグ属	1	
<i>Betula</i>	シラカンバ属	69	69	<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	13	9
<i>Carpinus</i>	クマシタ属	8	4	<i>Sanguisorba</i>	フレモコウ属	2	
<i>Quercus</i>	コナリ属	9	4	Other Rosaceae	バラ科	5	4
<i>Ulmus</i>	ニレ属	7	9	Umbelliferae	セリ科	4	26
				<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属	61	2
<i>Salix</i>	ヤナギ属		2	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	8	8
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	15	12	Other Compositae	キク科	4	1
<i>Ainus</i>	ハンシキ属	18	11				
<i>Ainaster</i>	ヤシヤブ属	2	2	1-late type FS	草葉痕型シダ胞子	5	2
Araliaceae	ウコギ科	1		<i>Equisetum</i>	トクサ属		1
Ericaceae	ツツジ科	1	2	<i>Lycopodium</i>	ヒカゲノカズラ属	1	
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1					
<i>Lonicera</i>	スイカヅラ属	1		<i>Sphagnum</i>	ミスゴケ属	2	3
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	1					
				TP	高木花粉	342	377
				NTP	非高木花粉	366	455
				FS	シダ胞子	6	3
				Unknown	不明	29	37

(2) 木材の樹種

鈴木三男（金沢大学教養部生物学教室）

能城修一（大阪市立大学理学部生物学教室）

仙台市の高沢遺跡の第43次発掘で更新統の泥炭質の21層及び25層から出土した木材化石10点の樹種を調査した。その結果、カラマツ属、ハンノキ属ハンノキ節、トネリコ属の3樹種が同定されたので、その同定の根拠となった材形質を以下に記載し、その顕微鏡写真を写真69に示した。また、仙台市教育委員会が作成した22層上面におけるこれらの木材化石の分布図に同定結果を書き入れたものが第53図である。これら同定に用いた木材組織プレパラートはMYG-85～MYG-94の標本番号で仙台市教育委員会と金沢大学教養部生物学教室にそれぞれ1セットづつ保存されている。

材形質の記載

1. カラマツ属 枝・幹材 *Larix* マツ科 写真1a-c (MYG-94)

早材部と晩材部では仮道管の大きさが極端に違い、年輪のはっきりした針葉樹材で、垂直及び水平の樹脂道を持つ。早材の仮道管は直径が大きく薄壁で、有縁壁孔はしばしば2列に対列状に並ぶ。放射組織は単列と紡錘形のものがあり、後者ではその中央に水平樹脂道を持つ。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、放射仮道管の内壁は平滑で薄く、有縁壁孔も大きめである。以上の形質からマツ科のカラマツ属の枝あるいは幹の材と同定した。カラマツ属には本州中部の亜高山帯にあるカラマツと千島・樺太にあるグイマツが考えられるが、これらを材構造で区別することはできていない。

2. ハンノキ属ハンノキ節 根材 *Alnus* sect. *Gymnothyrus* カバノキ科 写真2a-c (MYG-85)

薄壁で角張った小道管が放射方向に数個複合して散在する散孔材で、年輪界は不明瞭、道管の穿孔は横棒が20本くらいの階段状、繊維細胞は直径が大きく薄壁で短い、放射組織は同性で単列のものと同定したものがある。さらに、繊維細胞が道管と極端には違わないほど太く、放射組織の細胞も大きめであるなどからハンノキ属ハンノキ節の根あるいは根株の材であると同定した。この節には冷温帯から暖温帯にかけて広く全開の低湿地に普通なハンノキ（ヤチハンノキ）、山地斜面におおいヤマハンノキなどがあるが材構造での区別はできない。

3. トネリコ属 根材 *Fraxinus* モクセイ科 写真3a-c (MYG-93)

薄壁で角張った小型の道管が単独あるいは2個放射方向に複合して、少数が散在している散孔材で、年輪界は不明瞭、道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔はきわめて小さく交互状に密に分

布する。繊維細胞は薄壁で太く、極端に短い、放射組織はやや異性的な同性で、幅は1ないし2列で背は低い。以上のことからこの材化石はモクセイ科のトネリコ属の樹木の根あるいは根株の材であると同定した。トネリコ属には冷温帯の低湿地や扇状地などに多いヤチダモをはじめ多数の種があるが材構造での区別はできていない。ただ、関東平野の縄文時代の低湿地遺跡で多量のトネリコ属の材が出土し、それがヤチダモの大型植物化石をとまなっていることから、これらの材化石がこの種のものであるとみなされている。当遺跡からの出土材も関東平野のものによく一致することからヤチダモの材である可能性が考えられる。

以上見てきたように、同定を行った10点のうち9点が21層から出土している。これらの22層上面における分布を示したのが第53図である。この図を見て分かるようにいずれもが根株状でその同定結果も9点中8点がハンノキ節の根材で、残り1点がトネリコ属の根材である。このことからこれらの樹木は泥炭質の21層に生育し、下位の22層中に根株材をはっていた埋没林の一部であると考えることができる。そして根材の2樹種が現在でも亜寒帯下部から暖温帯にかけての低湿地に普遍的な樹種であり、この埋没林は亜寒帯ないしは温帯の低湿地性のものであるということが出来る。一般に氷期の寒冷な時期の泥炭層に含まれる木材化石はトウヒ属、カラマツ属、モミ属、マツ属の単維管束亜属などの亜寒帯あるいは冷温帯性の針葉樹が圧倒的であり、このように落葉広葉樹が優占するのはあまり知られていない。これらの木材の放射性炭素年代は、後述のように最終氷期のうち、もっとも寒冷とみなされている時期を示しており、花粉分析の結果もそれを支持している。従って、この埋没林が寒冷の時期の河川敷などに成立した落葉広葉樹林を示していると思なされるが、その一方で、寒冷な時期からはずれた、多少とも冷涼といえる時期のものである可能性もある。また残りの1点はこれらより下位の植物遺体を含む黄褐色の粘土層(25層)から出土しており、これは落葉針葉樹のカラマツ属であることから、これは寒冷な時期の堆積物と考えられる。

(3) 放射性炭素年代測定結果報告

測定機関 日本大学文理学部地理学教室
年代測定室

Code No.	試料名	依頼者のコード	測定年代	付加誤差	計測者名
NU-127	木材	富沢遺跡第43次	22,880	$\pm \frac{670}{620}$	小元久仁夫

注(1) 年代計算の際、放射性炭素の半減期として5,570年を使用

(2) 付加誤差は β 線計測時の標準偏差(1 σ)に相当する年代

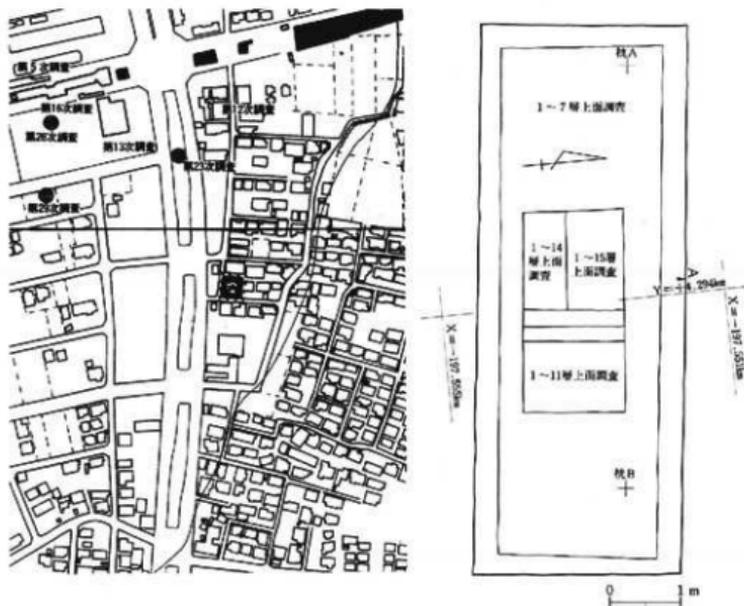
第9節 富沢遺跡第44次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $8 \times 3\text{m}$ (22.6m^2)である。調査は、盛土および直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察および排水用の側溝を設けた。7層上面までは調査区全面の調査を実施し、8層以下は $2.9 \times 1.4\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。(11層以下は $1.9 \times 1.4\text{m}$ 、14層以下は $1.4 \times 0.8\text{m}$)遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197.55204\text{km}$ $Y = +4.29071\text{km}$ 杭B: $X = -197.55267\text{km}$ $Y = +4.29668\text{km}$)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別15層、組別では16層が確認された。各層の土質は1層が粘土、



第54図 調査区位置図・設定図

2層がシルトを主とし、3～7層のあいだは粘土、8・9層がシルト質粘土を主とし、10層以下は泥炭質粘土である。グライ化は5・8b・9層で若干認められる程度である。現代のものを除いて2～8a層が水田土壌の可能性はある。なお、

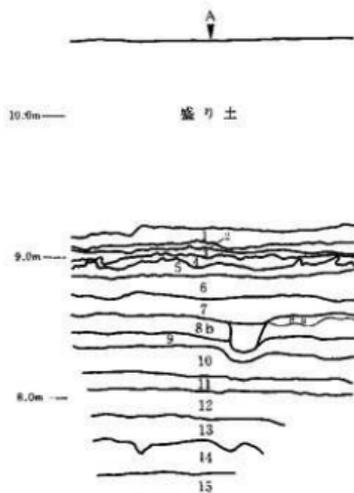
5・6層からは灰白色火山灰が検出されている。
5層中のものは、本来6層上面に乗っていたものが後の5層の攪乱により層中に巻き上げられたものと思われる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 6層上面

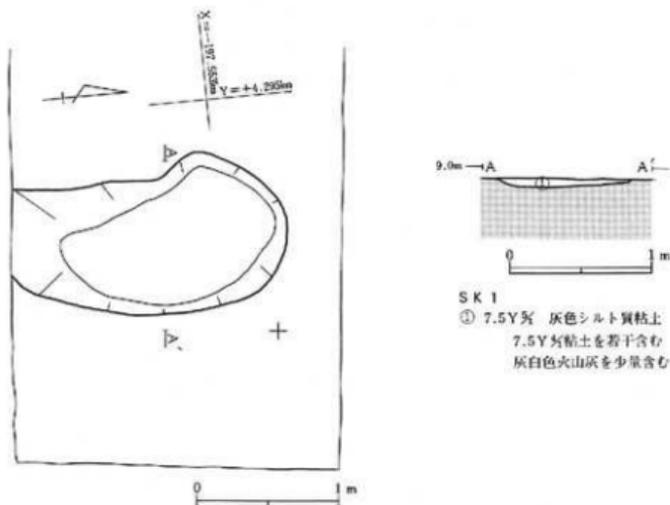
1号土坑—SK1—(第56図)

調査区の東部に位置する。平面形は不正な楕円形を呈し、南北長は1.95m以上、東西長は約1mである。断面形は浅いすり鉢状を呈する。堆積土は単層で、灰白色火山灰を含んでいる。遺物は出土しなかった。



第55図 基本層序

層序	土色	土質	層厚	遺物	備考
1	黄灰色 2.5Y 7/	シルト質粘土	5cm～15cm		水田耕作土(現代)
2	灰白 5Y 7/	粘土質シルト	2cm～8cm	細砂少量	水田耕作土?
3	灰 色 7.5Y 7/	粘土	2cm～8cm		水田耕作土?・下面起伏・上面に鉄分堆積層
4	灰 色 10Y 7/	粘土	2cm～10cm	マンガン粒少量	水田耕作土?・下面起伏
5	オリーブ灰白 2.5G 7/	粘土	5cm～15cm	マンガン粒少量・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土?・下面一部起伏
6	灰 色 10Y 7/	粘土	10cm～20cm	マンガン粒少量・鉄分少量・上面に灰白色火山灰ブロック	水田耕作土?・下面一部起伏
7	黄灰色 2.5Y 7/	粘土	10cm～15cm	マンガン粒多量	水田耕作土?・下面に鉄分堆積層
8a	黄灰色 2.5Y 7/	シルト質粘土	3cm～8cm		水田耕作土?
8b	灰白色 5Y 7/	シルト質粘土	10cm～15cm		自然堆積層
	灰 色 5Y 7/	シルト質粘土			
	黒 色 5Y R 1/2	泥炭質粘土			
9	灰 色 5Y 7/	シルト質粘土	3cm～15cm		自然堆積層
	灰白色 10Y 7/	シルト質粘土			
10	黒 色 10Y R 1/2	泥炭質粘土	15cm～20cm		自然堆積層
	灰 色 5Y 7/	粘土			
	暗赤黄色 2.5Y 7/	粘土			
11	暗赤黄色 2.5Y 7/	泥炭質粘土	8cm～12cm	植物遺体多量	自然堆積層
12	暗赤黄内 2.5Y 7/	泥炭質粘土	20cm前後	植物遺体多量	自然堆積層
	黒 色 10Y R 1/2	泥炭質粘土			
13	暗赤黄色 2.5Y 7/	泥炭質粘土	15cm～20cm	植物遺体多量 植物遺体少量	自然堆積層
	灰白 色 5Y 7/	泥炭質粘土			
14	暗赤黄色 2.5Y 7/	泥炭質粘土	15cm～25cm	植物遺体多量	自然堆積層
15	暗赤黄色 2.5Y 7/	泥炭質粘土	18cm以上	植物遺体多量	自然堆積層



第56図 SK1平面・断面図

(2) その他の出土遺物

基本層2～5層から土師器片、須恵器片、陶器片、磁器片等が計63点出土したが、そのうち半数以上は5層中から出土した。図示できるものはない。土師器は3層以下から出土しており調整技法の分かるものの大部分がロクロ使用・内面ヘラミガキ後黒色処理されたもので、5層中から出土した1点のみが非ロクロのものである。須恵器は3層以下から出土しているが量は少ない。陶器・磁器は2・3層中からのみ出土しており、3層中の唐津・青緑釉皿片1点を除いてすべて近世以降である。

4. 遺構の所属年代とまとめ

検出遺構はSK1のみで、性格は不明である。また基本層2～8a層は土質、層下面の状況から判断して水田跡の可能性がある。これらの時期については2層が近世以降、3層が近世、4・5層が平安時代～近世、6層及びSK1が平安時代（灰白色火山灰降下前後）と推定される。なお、7・8a層の時期については第28次調査区（佐藤：1988）の基本層序との対応関係から平安時代（灰白色火山灰降下以前）に比定できる可能性が考えられる。

第10節 富沢遺跡第45次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約30m²である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。4a層上面までは、調査区全面の精査を実施した。4a層以下は、調査区の南端部、北端部に一箇所ずつの試掘区を設けて掘り下げた（南試掘区は9a層上面まで2.5×2m、12層上面まで2×2m、14層まで1.5×2m、北試掘区は9a層上面まで2×1m、12層上面まで1.2×1m、14層まで0.7×1m）。測量は杭A・Bを基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X=-197.55696km、Y=+3.43648km 杭B：X=-197.56774km、Y=+3.43423km）。



第57図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

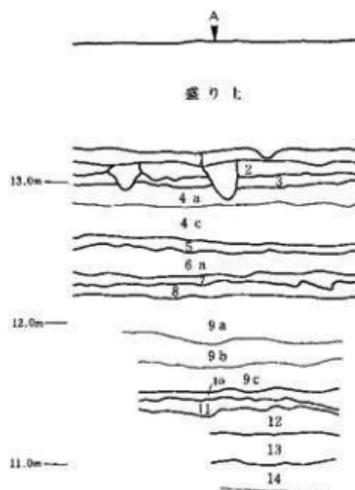
今回の調査では盛土下に大別14層、細別で19層が確認された。各層の土質は1～3層がシルトである。4a～4c層は砂質層であるが、4b層は砂礫、4c層は砂質シルトと粘土の互層である。5層以下は粘土層が主体となるが、7・10・11層は泥炭質粘土である。また9b層は砂礫である。グライ化は12層から漸次進むが、14層では顕著である。現代のもの以外で水田土壌の可能性のある層は、2・3層である。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。

3. 検出遺構と出土遺物

遺構、遺物ともに検出されなかった。

4. まとめ

水田耕作土の可能性のある層が確認された(2・3層)のみで、遺構、遺物は検出されなかった。2・3層の時期は隣接する42次調査区との層位対比から、平安時代以降と考えられる。



第58図 基本層序

層序	土色	土質	層厚	遺物	備考
1	灰色 5Y 5/1	シルト	4cm~14cm	鉄分	水田耕作土(現代)、下面に鉄分集積層
2	オリーブ黒色 3Y 1/1	粘土質シルト	2cm~10cm	鉄分・炭化物粒少量	水田耕作土?、下面一部砂状
3	灰色 10Y 5/1	砂質シルト	5cm~10cm	鉄分・炭灰炭粒	水田耕作土?、下面一部砂状
4 a	暗緑灰色 7.5G Y 1/1	砂	10cm~25cm	鉄分	自然堆積層
4 b	暗緑灰色 7.5G Y 1/1	砂礫	12cm程度		自然堆積層
4 c	灰色 10Y 5/1	砂質シルト	10cm~25cm	鉄分・細砂	自然堆積層
5	黄灰色 2.5Y 1/1	粘土	4cm~10cm	鉄分・炭化物粒	自然堆積層
6 a	暗灰黄色 2.5Y 1/1	粘土	13cm~35cm	アوندパイプ、炭化物粒・炭砂	自然堆積層
6 b	灰オリーブ色 7.5Y 1/1	シルト質粘土	5cm~12cm	アوندパイプ少量	自然堆積層
7	黒色 10Y R 1/1	泥炭質粘土	4cm~12cm	植物遺体	自然堆積層
8	黒褐色 10Y R 1/1	粘土	5cm~10cm	植物遺体少量	自然堆積層
9 a	オリーブ灰色 5G Y 1/1	砂質粘土	20cm~24cm	植物遺体	自然堆積層
9 b	暗オリーブ灰色 5GY 1/1	砂礫	6cm~22cm		自然堆積層
9 c	オリーブ灰色 2.5G Y 1/1	シルト質粘土	15cm~20cm	植物遺体	自然堆積層
10	黒色 2.5Y 1/1	粘土		植物遺体	自然堆積層
11	黒褐色 10Y R 1/1	泥炭質粘土	5cm~14cm	植物遺体少量	自然堆積層
12	黄褐色 2.5Y 1/1	泥炭質粘土	2cm~12cm	植物遺体	自然堆積層
13	黄褐色 2.5Y 1/1	粘土	10cm~18cm	植物遺体	自然堆積層
14	黄褐色 10Y R 1/1	粘土	15cm~22cm	植物遺体	自然堆積層
14	オリーブ灰色 5GY 1/1	シルト質粘土	30cm以上	植物遺体少量	自然堆積層

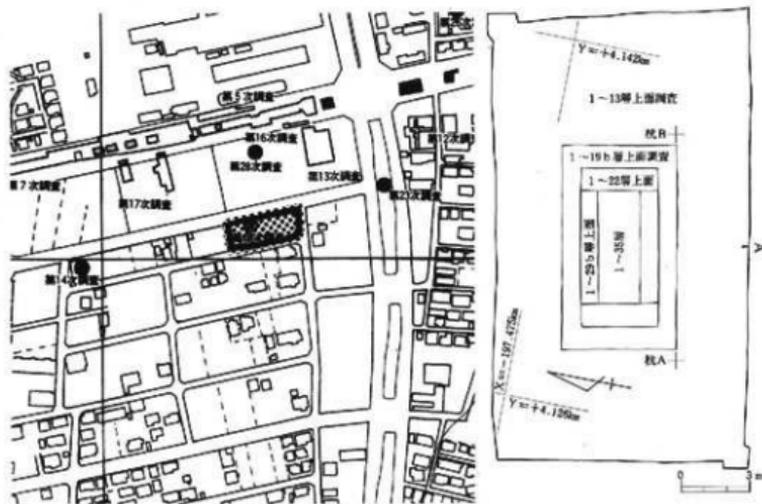
第11節 富沢遺跡第46次調査

1. 調査方法

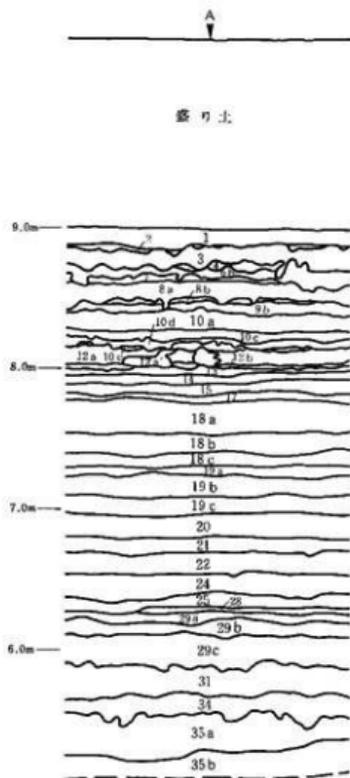
調査区の設定面積は約 $20 \times 11\text{m}$ (222m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)上面までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。13層上面までは、調査区全面の精査を実施し、13層以下は、約 $9 \times 5\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた(19b層以下は約 $7 \times 3.5\text{m}$ 、22層以下は約 $5 \times 3.5\text{m}$ 、29b層以下は約 $5 \times 1.8\text{m}$)。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197.48210\text{km}$, $Y = +4.12891\text{km}$ 杭B: $X = -197.48015\text{km}$, $Y = +4.13878\text{km}$)。

2. 基本層序

当調査に際しては第28次調査区(佐藤:1988)の隣接地であり、層序の対応が可能であったことより、第28次調査時における基本層序と同一層序を使用した。従って、欠落した層もあり、連続した層位番号となっていない。また、新たに認められた層の関係で、6・12・18・19・29・35層の各層は分層し、アルファベット名を付した新層位名となっている(ex. 6層→6a層・6b



第59図 調査区位置図・設定図



第60図 基本層序

(1) 9層上面

9a層水田跡 (第61図)

<遺構状況> 耕作土のみで、畦畔等は検出されなかったが、耕作域(9a層)と非耕作域(9b層)の境界が認められた。ただし、調査区外壁セクション面での確認で、平面的に確認した訳ではない。調査区外壁セクション面から想定される境界ラインは、調査区の南東側に位置し、N-46°-E方向をとる(第61図)。従って、耕作域はこのライン南東側(20m²)で、その反対側が非耕作域であったものと考えられる。耕作土は、粘土層を主とする泥炭質粘土層の9b層を攪拌し、耕作土—9a層—としている。耕作土の分解の度合いは、下面では下層上面—10a層

層)。今回の調査では、盛土下に1~35層までの42層が確認された。これら各層は、1~4層までが粘土層、6~29層までが粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土層、31~35層が粘土層あるいは砂質シルト層に分類される。グライ化は、22層以下から漸次進み、31層以下では、顕著である。現代のものを除く水田土壌は9a・10d・11a層である。また、2・3・4・6b層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は1・3・4・10c層である。3・4・29b層からは、火山灰が検出されている。この内3・4層中のものは灰白色火山灰である。これらの火山灰は、4層中に入っていたものが、後の3層の擾乱により3層中に巻き上げられたものである。また、29b層中のものは、第28次調査29層中検出のものと同じのものと考えられる。各層の傾きとしては、1~12層までが北側へ緩やかに下り、13層以下ではほぼ水平となる。

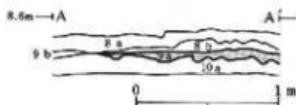
3. 検出遺構と出土遺物

遺構は10d・11層上面で各水田跡が検出された。また、9層上面では畦畔は認められなかったが、第28次調査区の9a層水田跡耕作土のひろがり確認された。

層序	土色	土質	層厚	産人物	備考
1	黒褐色 10Y R 7/5	粘土	1cm~25cm		水田耕作土(成代)、下面に鉄分集積層
2	暗黄褐色 10Y R 7/5	砂質シルト	2cm~6cm		水田耕作土?、不連続な分布
3	黒褐色 2.5Y R 7/5	粘土	7cm~31cm	灰白色火山灰ブロック	水田耕作土?、不連続な分布、下面起伏
4	黒褐色 10Y R 7/5	粘土	1cm~25cm	灰白色火山灰ブロック	水田耕作土?、不連続な分布、下面起伏
6a	にぶい黄褐色 10Y R 7/5	泥炭質粘土	1cm~2cm		自然堆積層、不連続な分布
6b	黄褐色 10Y R 7/5	泥炭質粘土	1cm~18cm	下部のブロック	水田耕作土?、不連続な分布、下面起伏
7	黒色 5Y R 7/5 にぶい黄褐色 10Y R 7/5	泥炭質粘土 泥炭質粘土	1cm~20cm		互層・自然堆積層、不連続な分布
8a	黒褐色 10Y R 7/5	泥炭質粘土	3cm~25cm	下部に8b層ブロック多量	不連続な分布、8b層の自然分解?解
8b	黒色 7.5Y R 7/5 灰オリーブ色 3Y 7/5	泥炭質粘土 泥炭質粘土	1cm~22cm		互層・自然堆積層、不連続な分布
9a	暗灰黄色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土	1cm~12cm	下部に10a層ブロック	水田耕作土、下面起伏
9b	暗灰黄色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土	1cm~14cm		自然堆積層
10a	黒褐色 7.5Y R 7/5	泥炭質粘土	8cm~17cm		互層・自然堆積層
10c	暗灰黄色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土			
10d	黒色 5Y 7/5	泥炭質粘土	3cm~10cm		自然堆積層
10e	黒色 7.5Y 7/5 灰オリーブ色 3Y 7/5 灰白色 5Y 7/5	泥炭質粘土 泥炭質粘土 泥炭質粘土	4cm~12cm	下部に10e層ブロック多量	水田耕作土、下面起伏
10e	黒色 5Y 7/5 灰オリーブ色 3Y 7/5 灰白色 5Y 7/5	泥炭質粘土 泥炭質粘土 泥炭質粘土	2cm~10cm		互層・自然堆積層、不連続な分布
11a	黒褐色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土	2cm~18cm	下部に12・13層ブロック	水田耕作土、下面起伏
12a	黒褐色 10Y R 7/5 黒色 3Y 7/5	泥炭質粘土 泥炭質粘土	1cm~20cm		互層・自然堆積層、不連続な分布
12a'	オリーブ黒色 3Y 7/5	泥炭質粘土	5cm~14cm		部分的な分布、12a層の自然分解?解
12b	灰色 3Y 7/5	泥炭質粘土	1cm~7cm		自然堆積層、不連続な分布
13	黒色 10Y R 7/5 にぶい黄褐色 10Y R 7/5	泥炭質粘土 泥炭質粘土	2cm~14cm		互層・自然堆積層
14	黒色 5Y R 7/5	泥炭質粘土	2cm~40cm		自然堆積層
15	黒色 10Y R 7/5	泥炭質粘土	4cm~6cm		自然堆積層
17	黒色 5Y R 7/5	泥炭質粘土	3cm~7cm		自然堆積層
18a	黒色 7.5Y R 7/5	泥炭質粘土	20cm~28cm		互層・自然堆積層
18b	黄褐色 5Y R 7/5 黒色 5Y R 7/5 黒色 5Y R 7/5	泥炭質粘土 泥炭質粘土 泥炭質粘土	10cm~17cm		互層・自然堆積層
18c	黒色 10Y R 7/5	泥炭質粘土	7cm~12cm		自然堆積層
19a	暗灰黄色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土	3cm~9cm		自然堆積層
19b	黒褐色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土	12cm~19cm		自然堆積層
19c	黒色 7.5Y R 7/5	泥炭質粘土	10cm~15cm		自然堆積層
20	黒色 10Y R 7/5	泥炭質粘土	25cm~28cm		自然堆積層
21	暗灰黄色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土	7cm~14cm		自然堆積層
22	黒色 5Y 7/5	砂質シルト	14cm~18cm		自然堆積層
24	オリーブ黒色 5Y 7/5 暗灰黄色 2.5Y 7/5	泥炭質粘土 粘土	6cm~21cm		互層・自然堆積層
25	黒色 5Y 7/5	泥炭質粘土	4cm~11cm		自然堆積層
28	黒色 N 7/5	泥炭質粘土	3cm~5cm		自然堆積層
29a	黒色 5Y 7/5	泥炭質粘土	3cm~9cm		自然堆積層
29b	オリーブ黒色 5Y 7/5	泥炭質粘土	5cm~15cm	火山灰	自然堆積層
29c	黒色 10Y R 7/5	泥炭質粘土	17cm~27cm		自然堆積層、下面起伏
31	オリーブ灰色 5GY 7/5	粘土	16cm~27cm	砂粒少量・植物遺体	自然堆積層
32	黒色 10Y 7/5	粘土	8cm~23cm	炭化物粒・植物遺体	自然堆積層、下面起伏
35a	オリーブ灰色 3GY 7/5	砂質シルト	11cm~34cm	植物遺体	自然堆積層
35b	オリーブ灰色 3GY 7/5	砂質シルト	24cm以上	植物遺体・炭粒	自然堆積層

一をブロック状に巻き上げているものの、9a層自体は分解が進んでいる。耕作土の下面は凹凸が激しいが、耕作土の厚さは平均で7cm位である。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面(耕作域)の標高は8.35~8.45mで、北東側へ緩やかな下り傾斜を示す。

<出土遺物> 非耕作域上面より樹木片が3点出土したのみである。いずれの樹木片も20cm以下の小片のものであるが、この内2点は一方の端部に炭痕が認められた(第62図1・2)。

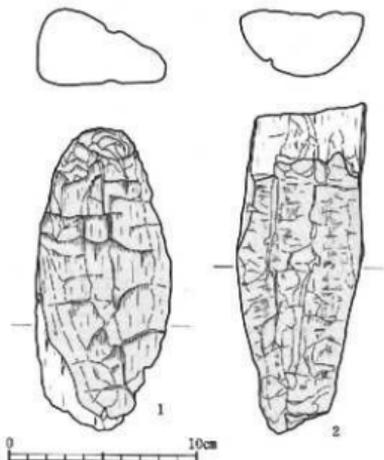


第61図 9a層水田跡平面・断面図

(2) 10d層上面

10d層水田跡 (第63図)

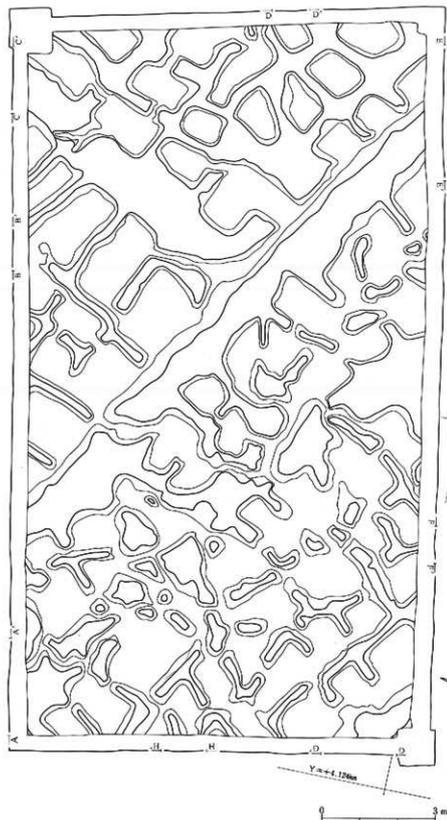
小区画の水田が70区画以上検出された。畦畔には大区画を形成する大畦畔と、それをさらに細かく分割し、小区画を形成する小畦畔がある。大畦畔は4条検出されたが(大畦畔1~4)、この内、大畦畔2・4は畦畔の高まりが小畦畔とほぼ同じであったり、水口で細かく分断されていたりして(大畦畔2)他の大畦畔と様相を異にする。検出面は、大畦畔1・3が10a層下面で、他の畦畔は10c層中である。これらに伴う水路は検出されていない。また、出土遺物は皆無であった。



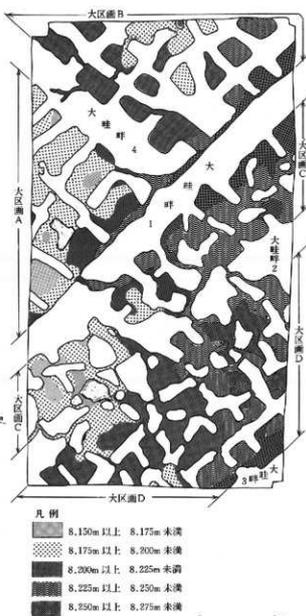
No.	検出番号	図数番号	出土遺跡・層位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	厚さ	先端加工	末端加工	備考
1	第62区1	写真60-6	9b層上	樹木片	広	丸木	16.1cm	6.4cm	—	—	なし	端部に魚鱗
2	第62区2	写真60-5	9b層上	樹木片	広	丸木	17.7cm	6.5cm	—	—	なし	端部に魚鱗
—	—	—	9b層上	樹木片	広	丸木	15.0cm	5.0cm	2.8cm	—	なし	—

第62図 出土遺物(1)

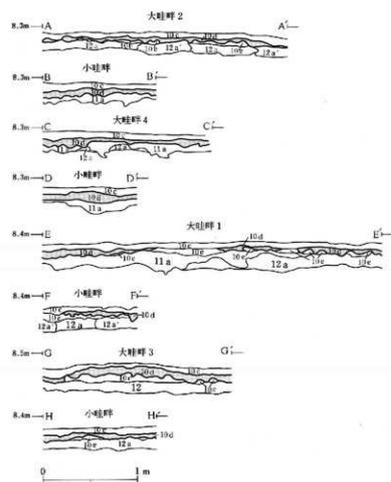
1. 水田跡平面図



2. 区画・群2、区画・群2、区画・群2、地名名及び水田面の標高



3. 畦畔断面図



第63図 10d層水田跡平面・断面図

〈畦畔の配列〉 大畦畔には、下層11a層水出跡大畦畔を踏襲し位置、方向とも同一のもの（大畦畔1）と新たにこの時期に取り付けられたもの（大畦畔2・3・4）がある。いずれもほぼ直線的に延びる。大畦畔2・3は大畦畔1にほぼ平行しほぼ同一方向をとるが、大畦畔4はこれらとほぼ直交方向をとる。大畦畔1～3の方向はN-約57°-Wで、等高線にほぼ直交する。大畦畔の交点は1ヶ所認められ、「T」字状に交わる。小区画ごとの小畦畔は、水口によって断片的であったり、やや弯曲したものが多く、また、大畦畔に対して斜位方向のものもわずかに認められたが、多くはいずれかの畦畔方向をとり、連続性を示す。従って、全体としての小畦畔は、整然と直線的に連続する状態のものではないが、いずれかの畦畔方向への連続性が認められる。この内、北西—南東方向のものがより明確な連続性を示す。小畦畔の交わり方は斜位方向を除けば、「+」状のものが主体である。

〈畦畔の規模〉 畦畔は耕作土と同一土壌—10d—を盛り上げ作られている。下端幅は、大畦畔が1.4m前後、小畦畔はやや一性を欠くが50cm前後を中心とする。耕作土上面からの高さは、大畦畔1・3が約10～16cm、大畦畔2・4及び小畦畔が約2～5cmである。

〈水田1区画の形状と規模〉 大畦畔によって大区画が4区画検出されている（大区画A～D）。大区画は、いずれも区画全体が検出されておらず、明確な形状・規模は不明である。しかし、形状に関しては、大畦畔の方向性よりいずれも方形を呈すると考えられる。大区画C・Dは短辺の全長が検出されており北西—南東方向を長辺とする短冊型が想定される。それぞれの長さ及び面積は大区画Aが(6.8)×(6.6)m・(23)m²、大区画Bが(7.6)×(8.2)m・(36)m²、大区画Cが(15.2)×1.8～3.2m・(32)m²、大区画Dが(13.0)×6.4m・(50)m²である〔()は一部検出のみの数値〕。小区画は76区画検出（内、一部検出23）された（大区画A-12、B-17、C-19、D-28）。区画の形状は整形のものは少ないが、いずれも方形・三角形を基調としている。このうち方形のものが多い。三角形状のものは、わずかに認められる程度である。三角形状のものは、大畦畔際のものに多い。面積が明確に或は推定で判るものは58区画（明確なもの51区画）ある。この内、最小のものは0.4m²、最大のものでも3.0m²と全体的

小区画水田の面積 * () 内は推定面積のものも加えた数値

小区画	大区画名	A	B	C	D	全区画
区画数	1㎡未満	2 (同)	6 (同)	10 (同)	8 (9)	26 (27)
	1～1.9㎡		4 (5)	7 (8)	8 (11)	19 (24)
	2～2.9㎡	4 (5)	1 (同)			5 (6)
	3～3.9㎡				1 (同)	1 (同)
最小～最大面積㎡		0.9～2.8(同)	0.7～2.6(同)	0.4～1.7(同)	0.5～3.0(同)	0.4～3.0(同)
平均面積㎡		1.8(1.9)	1.1(同)	1.0(同)	1.2(同)	1.2(同)

に面積は狭い。主体となる面積は 2.0m^2 未満のもの（全体の88%）であるが、大区画ごとに多少差異が認められる。大区画Cでは 1.0m^2 未満の狭いものがやや多く、反対に大区画Aでは 2.0m^2 以上の全体に比べればやや広いものが多い。

＜耕作土＞ 粘土層を主とする泥炭質粘土層の10e層を攪拌し、耕作土—10d層—としている。耕作深度が深い部分では、さらに下層の11a層、12a層（11a層水田跡非耕作域）をも攪拌している。耕作土の分解の度合いは、大畦畔1を境として大区画A・Bと大区画C・Dでは差が認められ、大区画C・Dの方は余り分解が進んでいない。耕作土の厚さは4～12cmである。ただし、耕作土の分解度と同様に大区画A・Bと大区画C・Dでは耕作深度も異なり、耕作土の平均の厚さは大区画A・Bでは約7cm、大区画C・Dでは約5cmである。耕作土の下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。尚、大畦畔部分では（特に大畦畔1・3）、直下に耕作が及ばなかったためか、直下層上部が疑似畦畔となっている。また、大区画C・D内の小畦畔は、直下の耕作土に10e層が残存する場合が多い。

＜水田面の傾斜＞ 水田面の標高は8.15～8.30mの間である。全体的な傾斜としては、北方向のドリ傾斜を示すが、大区画ごとの傾斜ではやや異なり、大区画A・Bでは北ないし北東方向、大区画C・Dでは北西方向となる。大区画ごとの傾斜の度合いは、Aが約 1.2cm/m 、Bが約 1.0cm/m 、Cが約 0.8cm/m 、Dが約 1.0cm/m で、全体的に緩やかである。小区画の耕作土上面の比高差（1区画が明確な51区画に基づく）は、 $1.0\sim 6.2\text{cm}$ までのものが認められ、多くは $1.5\sim 3.5\text{cm}$ の間である。平均では 2.7cm である。大区画ごとの差は認められない。

＜水口＞ 水口は大畦畔・小畦畔とも認められた。この内、大畦畔1・4上及び両者の交点に設けられたものは、大区画間のもの、その他のものは小区画間のものと考えられる。水口底面のレベルは、耕作土上面よりやや高いものとはほぼ同じものがあり、大区画間のものは前者で、小区画間のものは後者を主体とする。また、水口前面の耕作土上面は、やや窪む場合が多い。小区画には水口が検出されたものと検出されなかったものがある。検出されたものには、小区画の1辺の畦畔のみのものから、取り囲む全ての畦畔に設けられるものまでの各種がある。1辺の畦畔に設けられる水口の数、大部分が1ヶ所であるが希に数ヶ所のものも認められる。また、取り付けられる箇所は、畦畔のほぼ中央か交点部分のいずれかである。尚、大畦畔1とその北側の小畦畔との交点では、大畦畔4の交点と同様に、全てに水口が設けられており、明確に水口が同一方向に連続するという規則性が認められる。

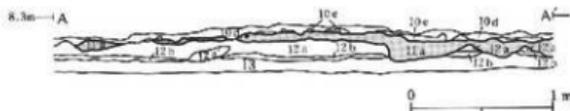
③ 11層上面

11a層水田跡（第64図）

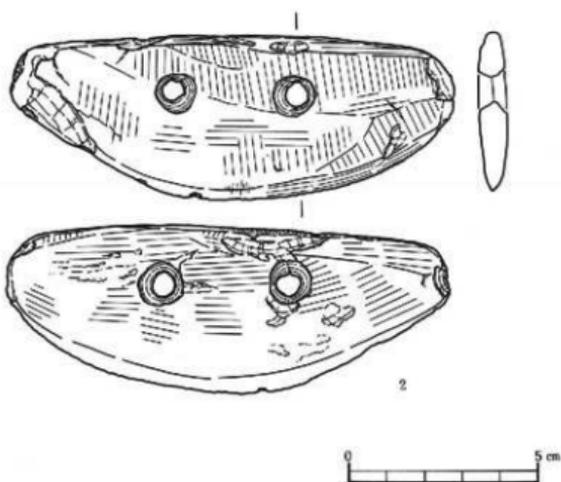
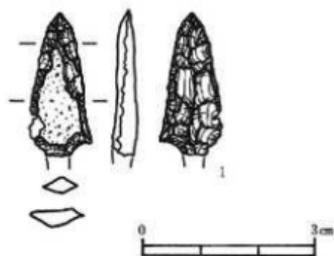
＜遺構状況＞ 大畦畔が1条検出されたのみである。畦畔の検出面は10d層中である。水田の範囲は、調査区全面に広がらず、畦畔の北東側のみ耕作域（11a層 70m^2 ）で、南西側は非耕作

域(12a層)となっている。耕作域部分では、上層の10d層水田跡の耕作深度が深かったために、上面がやや削平されている。畦畔方向はN-56°-Wで、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壌—11a層—を盛り上げ作られている。下端幅は1.8m前後で、耕作土上面からの高さは8cm前後である。耕作土は泥炭質粘土層の12a層から12b層を攪拌し、耕作土—11a層—としている。耕作深度が深い部分では、さらに下層の13層上面をも攪拌している。畦畔部分では耕作が及ばなかったためか、直下の12a層上部が擬似畦畔となって残っている。耕作土は余り分解が進んでおらず(特に、畦畔部分では顕著)、下部では12・13層ブロックを多量に含む。耕作土の下面は凹凸が激しいが、耕作土の厚さは平均で12cm位である。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面(耕作域)の標高は8.10~8.20mの間で、北方向の緩やかな下り傾斜を示す。傾斜の度合いは約1.2cm/mである。非耕作域もほぼ同様な標高を示すが、傾斜は中央部を境として、北西側・南東側の両方向に緩やかに下がる傾向を示す。尚、畦畔上には水口は検出されなかった。

<出土遺物> 完形の磨製石竜丁が1点(第65図2)出土したのみである。出土地点は畦畔から南西に約40cm離れた非耕作域上面である。石竜丁は、長さ117.5mmの小形のものである。刃部の強い外弯に比して背部が弱く外弯する、半月形状を呈す。中央部の背部寄りには、二孔一対の紐孔が穿たれている。紐孔は両面からの回転穿孔である。背部付近には剥離痕・敲打痕、刃部の端部寄りに剥離痕が認められるが、この部分も含め両面とも良く磨かれている。刃部は両面とも、さらに丁寧な横方向の研磨が加えられ、一部光沢面が見られる。尚、細かい刃こぼれが数ヶ所に認められる。



第64図 11a層水田跡平面・断面図

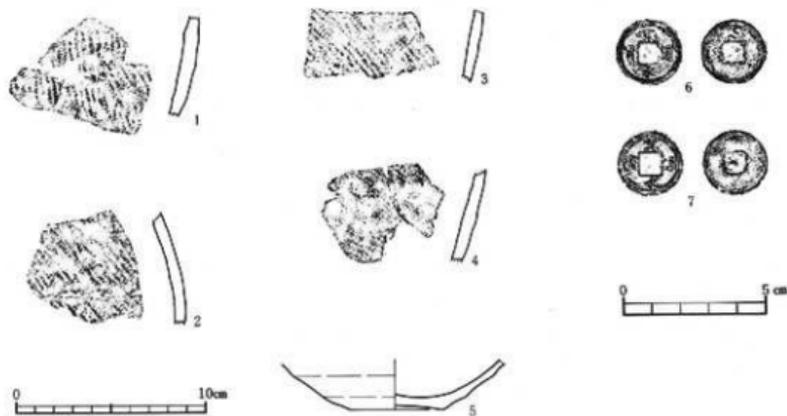


No.	埋蔵番号	遺構・層位	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	備考
1	写真60-7	19c層	石鏃	25.0	11.0	4.0	1.0	石英	
2	写真60-8	11a層水田跡・葬坑作域上層	石鏃了	117.5	44.0	7.5	52.9	粘軟岩	総六孔6mm、総六孔幅27mm

第65図 出土遺物(2)

(4) その他の出土遺物

基本層1・3・4・10c層から弥生土器片・土師器片・赤焼土器片・須恵器片・陶器片・磁器片・石器・金属製品等が出土した。この内、出土量が最も多かったのが1層で、6層以下では極端に出土量が減少する。弥生土器は3・4層から各1点出土した。いずれも地文のみの体部資料で、遺存状態は悪い(第66図1~4)。土師器・赤焼土器・須恵器は4層以上の層位から合計18点出土した。このうち図化できたものは、4層出土の赤焼土器の坏1点(第66図5)のみである。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。土師器には、ロクロ不使用・ロクロ使用の両者が認められる。陶器・磁器は出土量が多く、合計89点出土した。3層出土の陶器片1点を除けば、全て1層出土である。製作年代の判る資料は、全て近世以降で、中でも近代から現代にかけてのものがほとんどである。3層出土の陶器片の製作年代は細片のため不明である。石器では石鏃が1点(第65図1)、10c層より出土している。平面形が二等辺三角形のもので、茎部を有する。金属製品では、1層中より寛永通宝が2枚出土している(第66図6・7)。また、自然遺物としては、10a層中よりクルミの種子が7点出土している。



No.	図録番号	遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	特徴
1~4	写真の1~4	6層	弥生土器	壺	体部小片				同一個体・外面横径R1, 縄文
5	—	4層	赤焼土器	坏	体部片(一部)		5.0cm		ロクロ、回転糸切無調整
6	—	1層	古銭						寛永通宝
7	—	1層	古銭						寛永通宝

第66図 出土遺物(3)

4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構としては、11a層・10d層・9a層の3時期の水田跡が検出された。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層とした6b・4～2層の各層が上げられる。これらの年代であるが、今回の調査では、時期決定資料にかけたが、層位の対応が可能な隣接第28次調査（佐藤：1988）の結果を踏まえれば、以下のような所属年代が与えられる。

- ・11a層水田跡—弥生時代樹形甕式期
- ・10d層水田跡—弥生時代樹形甕式期以降 十三塚式期以前
- ・9a層水田跡—弥生時代十三塚式期
- ・4層—平安時代以降 近世以前 ・3層—近世 ・2層—近代以降 現代以前

2. 11a層水田跡の次の段階の10d層水田跡では、11a層水田跡と同一耕作域をとり、それをさらに拡大している。11a層の大畦畔は踏襲され、拡大時に伴う新たな大畦畔もこれと方向性を同一にする。しかし、9a層水田跡の段階になると水田域は変化し、10d層の大畦畔も踏襲されない。10d層水田跡の水田区画の方法は、まず、11a層水田跡の大畦畔を踏襲した大畦畔1、また新たに非耕作域に取り付けられた大畦畔3によって大きな大区画が形成される。次にやや規模の劣る大畦畔2・4によって大区画は2分割される。さらに、これら小畦畔によって細分し、最終の小区画の水田が作られている。これらの各期における水田域・大畦畔の変遷、10d層水田跡の最終区画（小区画）に至るまでの区画方法は、隣接第28次調査区とほぼ同一である。

3. 10d層水田跡では、大畦畔1を境とする南西側部分（大区画C・D）と南東側部分大区画（A・B）の耕作土を比較すると、南西側部分は耕作深度が浅く、下部に10e層ブロックを多量に含み、耕作土の分解も進んでいない。このように両者の耕作土には著しい違いが認められ、これは耕作期間の差によって生じたものとも考えられる。

4. 隣接の第28次調査区では34層より、第38次調査区（本文 p.20）では19c層より遺物の出土をみたが、当調査区では両層とも確認されたものの遺物は出土しなかった。この内、縄文時代早期後葉の遺物を出土している34層は、当調査区では薄く、不安定な状態となっている。

第12節 富沢遺跡第47次調査

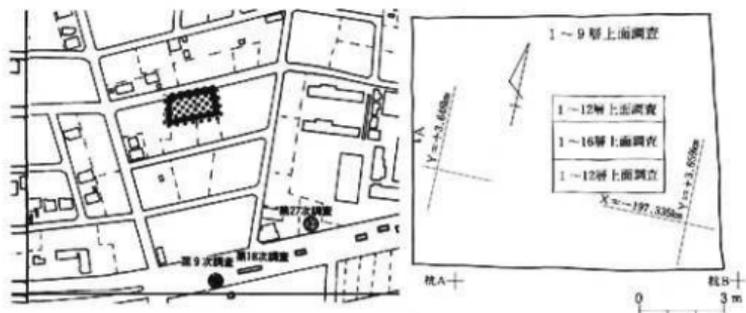
1. 調査方法

調査区の設定面積は約95m²である。当調査区は近年まで水田経営が続けられていた場所で、盛り土はされておらず1層（旧水田耕作土）下面までを重機で除去し、以下は人力により調査を行った。なお調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。9層上面までは調査区全面の精査を実施した。9層以下は調査区中央部に試掘区を設けて掘り下げた。（9層上面から12層までは4×3.5m、12層以下16層までは4×1.5m）

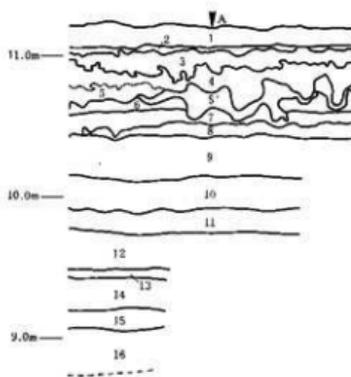
遺構の測量は杭A・Bを基準として行なったが、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X=-197.33883km、Y=+3.64944km 杭B：X=-197.33667km、Y=+3.65920km）。

2. 基本層序

今回の調査では大別16層、細別では17層が確認された。各層の土質は1層がシルトで2～5層は粘土層であるが、3・4・5・5'層は泥炭を含んでいる。なお5・5'層は基本的には同一の層であるが、5'層は5層に比べてより分解が進んでいる。6層以下12層までは泥炭の含有が増加して泥炭質粘土層となるが、8層は粘土層である。13～16層は粘土質が主体であるが、14層は泥炭質粘土層である。グライ化は15層から漸次進み16層では顕著になる。現代のものを除く水田土壌は4層である。その他2・3・5・5'・8層も水田土壌の可能性がある。4・5・5'層からは灰白色火山灰が検出された。いずれの層の時期に降下したのか判然としないが、



第67図 調査区位置図・設定図



第68図 基本層序

量的には5・5'層に多く、またこれらの層の上面に乗る傾向も数ヶ所認められるため、この時期に降下した可能性も考えられる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物の出土層は1・2・4・5・7・8層である。

層序	土色	土質	層厚	遺入物	備考
1	灰色 7.5Y 灰	粘土質シルト	2cm~10cm	鉄分	水田耕作土(現代)
2	褐色色 10Y R 灰	粘土	2cm~8cm	マンガン粒・鉄分	水田耕作土?・下面起伏・部分的な分布
3	黒色 5Y 灰	粘土	3cm~20cm	鉄分少量・灰白色火山灰粒少量・植物遺体少量	水田耕作土?・下面起伏・不連続な分布
4	暗灰褐色 2.5Y 灰	粘土	3cm~30cm	鉄分少量・灰白色火山灰ブロック・植物遺体	水田耕作土・下面起伏
5	オリーブ黒色 5Y 灰	粘土	5cm~23cm	鉄分少量・灰白色火山灰ブロック・植物遺体	水田耕作土?・下面起伏・部分的な分布
5'	黒褐色 2.5Y 灰	粘土	4cm~18cm	灰白色火山灰ブロック少量・植物遺体	水田耕作土?・下面起伏
6	褐色 7.5Y R 灰	泥炭質粘土	2cm~18cm	植物遺体多量	自然堆積層
7	黒色 7.5Y R 1/2 灰	泥炭質粘土	8cm~18cm	植物遺体多量	自然堆積層
8	オリーブ黒色 5Y 灰	粘土	2cm~12cm	植物遺体	水田耕作土?・下面起伏
9	黒色 2.5Y 灰	泥炭質粘土	18cm~25cm	植物遺体多量	自然堆積層
10	黒褐色 2.5Y 灰	泥炭質粘土	13cm~23cm	植物遺体多量	自然堆積層
11	黒褐色 10Y R 灰	泥炭質粘土	12cm~20cm	植物遺体多量	自然堆積層
12	黒色 7.5Y R 1/2 灰	泥炭質粘土	25cm~30cm	植物遺体多量	自然堆積層
13	オリーブ黒色 5Y 灰	粘土	5cm~8cm	植物遺体	自然堆積層
14	黒色 7.5Y R 1/2 灰	泥炭質粘土	23cm~30cm	植物遺体	自然堆積層
15	灰褐色 5Y 灰	粘土	10cm~20cm	粗砂少量・植物遺体	自然堆積層
16	灰オリーブ色 7.5Y 灰	粘土	30cm以上	粗砂・植物遺体	自然堆積層

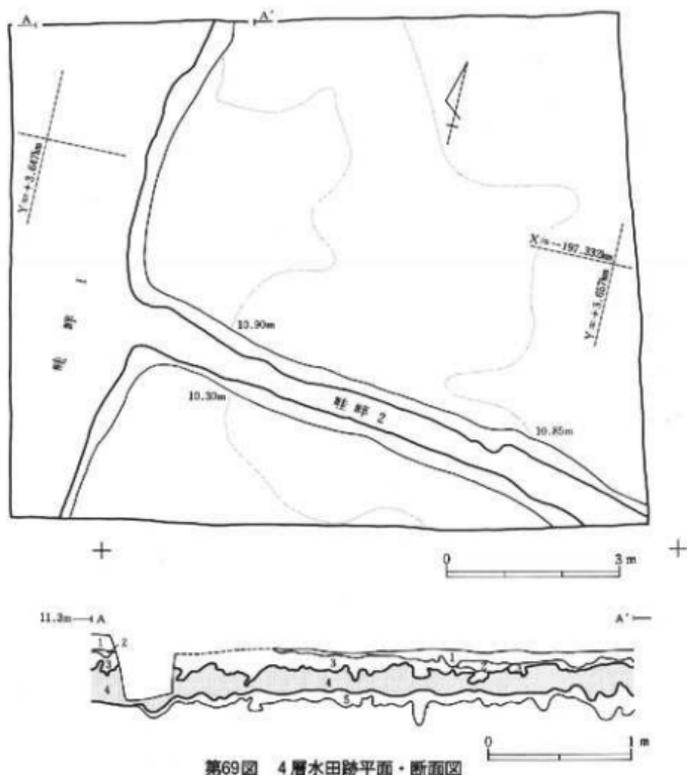
3. 検出遺構と出土遺物

(1) 4層上面

4層水田跡(第69図)

<遺構状況>

ほぼ直交する2本の畦畔を検出したが、畦畔1は大畦畔で畦畔2はそれにとりつく小畦畔である。畦畔1は部分的な検出であるが、方向はN-2'-Eでほぼ真北方向を指す。下端幅は2.5m以上で、耕作土上面からの高さは2~3cmである。畦畔2は方向がN-83'-Wで、下端幅は約0.8m程である。耕作土上面からの高さは約1~2cmを計る。畦畔1・2によって区画される水田区画は2区画である。部分的な検出のため明確な規模、形状は知り得ないが、畦畔の



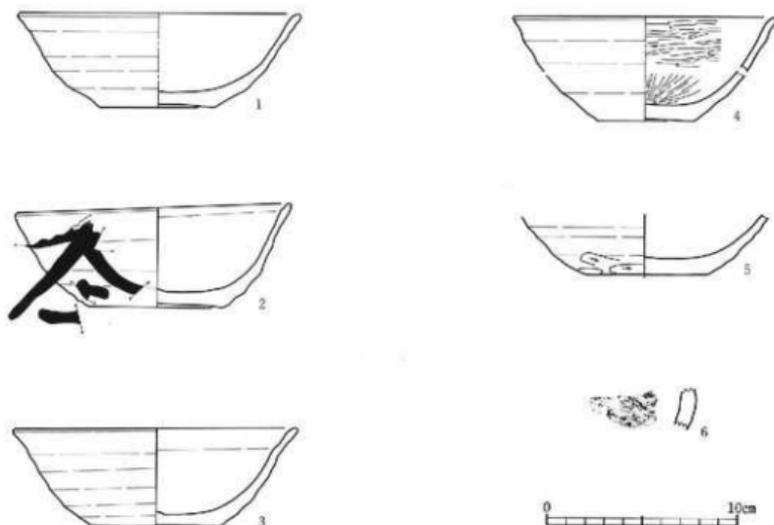
第69図 4層水田跡平面・断面図

交接のありかたから方形を呈するものと考えられる。畦畔はいずれも耕作土と同じ4層を盛り上げて作られている。耕作土の4層は層厚が約3~30cmで分解が進んでいる。また下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は10.85~10.90mの間で全体的に東方向に下っている。また耕作土中からは灰白色火山灰ブロックが検出されたが、これは下層のものが巻き上げられたものとみられる。

<出土遺物>

耕作土中より土師器4点、赤焼土器11点、須恵器6点が出土した。このうち復元、図化ができたのは土師器2点、赤焼土器3点である。

土師器はいずれも坏である。第70図4は製作にロクロが使用され、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。底部切り離しは回転糸切り無調整である。第70図5もロクロが使用さ



No.	図録番号	素材・部位	種類	器種	保存度	口径	底径	器高	高さ 1/10	特	意
1	写真61-3	4 a 層赤土器	赤土器	杯	約 5/6	14.6cm	5.5cm	5.0cm	0.39	ロクロ、回転糸切無調整	
2	写真61-5-6	4 a 層赤土器	赤土器	杯	約 5/6	14.5cm	7.6cm	5.6cm	0.48	ロクロ、回転糸切調整、黒書「大上」	
3	写真61-4	4 a 層赤土器	赤土器	杯	ほぼ完形	14.8cm	6.6cm	5.2cm	0.44	ロクロ、回転糸切無調整	
4	写真61-1	4 a 層赤土器	土師器	杯	約 5/6	13.8cm	5.6cm	5.5cm	0.36	ロクロ、回転糸切調整、ヘラミゾ付・滑り地	
5	写真61-2	4 a 層赤土器	土師器	杯	約 5/6		6.4cm			ロクロ、手締ヘラケズリ	
6	—	7 層	赤土器	破	体部小片						良器否不明

()内は底径

第70図 出土遺物(1)

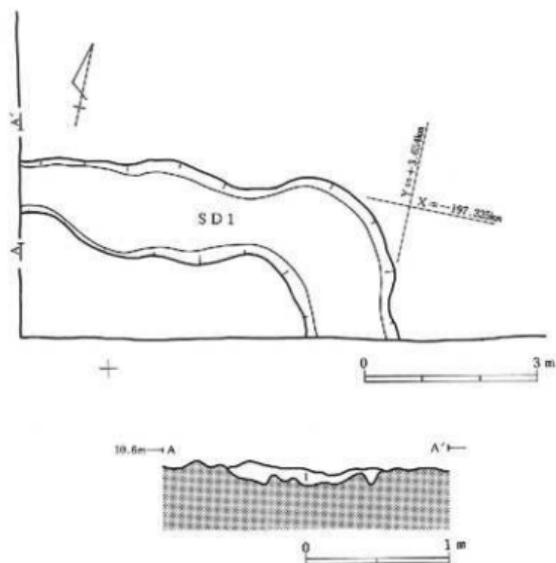
れている。外面の体部下端は手持ちヘラケズリ、内面はロクロ調整のみで黒色処理は施されていない。底部は手持ちヘラケズリである。赤土器の器種はすべて杯である(第70図1、2、3)いずれも体部にゆるいふくらみを持ち、口縁部は軽く外反する。底部は回転糸切り無調整である。第70図2のものには「大上」と思われる黒書がある。須恵器はすべて杯の小破片である。

(2) 8層上面

1号溝跡—SD1—(第71図)

<遺構状況>

調査区南西隅付近で検出された。上端幅は1.2~2m、深さは約15cm程である。断面形はゆるやかな舟底形を呈する。堆積土は黒褐色粘土の単層で遺物の出土はなかった。



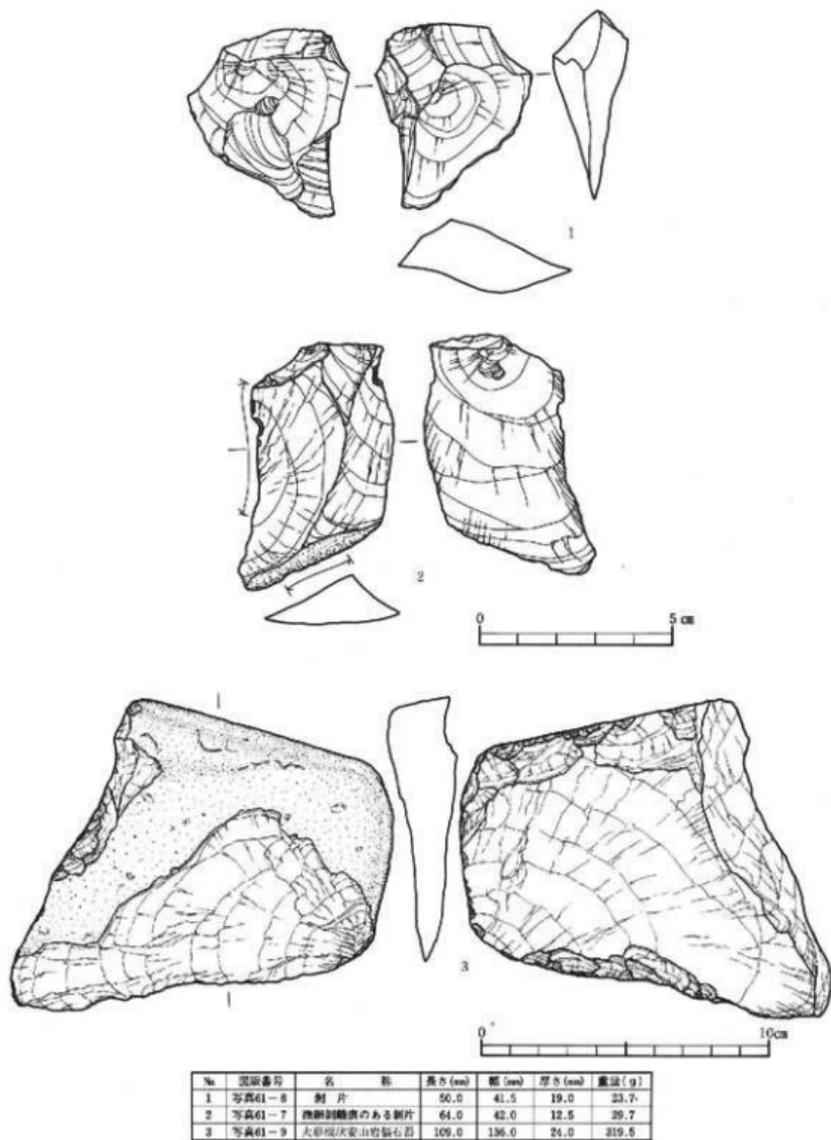
第71図 SD1平面・断面図

<出土遺物>

上面から石器2点が出土した。第72図3は大形板状安山岩製石器である。角ばった自然深を素材とし、主に3縁辺に二次加工が施されているが、下縁辺が刃部と想定される。下縁辺には使用痕とみられる著しい光沢が観察される。第72図2は微細剝離痕のある剝片である。また層中からも剝片が1点出土した。(第72図1)

(3) その他の出土遺物

基本層1・2・5・7層から磁器片、土師器片、赤焼土器片、弥生土器片などが出土した。磁器片は2層から1点出土したが、器種は皿、産地は肥前で近世に属するものと考えられる。土師器片(3点)、赤焼土器片(5点)は5層からの出土であるが、復元・図化し得るものはなかった。土師器はすべてロクロ使用の坏である。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。底部切り離しは回転糸切りである。赤焼土器片もすべて坏である。弥生土器片は7層から1点のみ出土したが、細片のうえ磨滅が著しく詳しい時期は不明である。外面に捺糸文が施されている。(第70図6)



No	図原番号	名 称	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
1	写真41-8	削片	50.0	41.5	19.0	33.7
2	写真41-7	微細刻線のある削片	64.0	42.0	12.5	29.7
3	写真41-9	大形塊状安山岩製石器	109.0	136.0	24.0	319.5

第72図 出土遺物(2)

4. 遺構の所属年代とまとめ

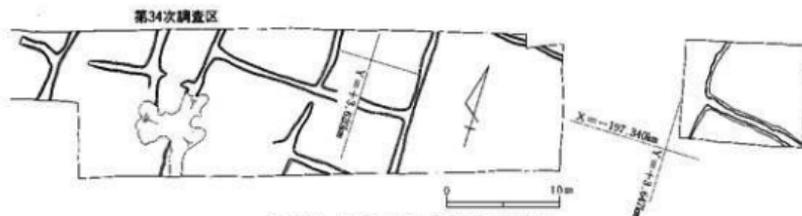
遺構が検出されたのは4層及び8層であるが、その他2、3、5・5層も水田跡である可能性がある。

4層水田跡はほぼ直交する2本の畦畔(畦畔1、2)によって区画される水田区画を2区画検出した。この所属時期は出土遺物や灰白色火山灰のありかたから、平安時代(10c前半以降)と考えられる。また畦畔1は人畦畔であるが、その方向はほぼ真北方向を指しており、近年富沢遺跡でその存在が指摘されている条里型地割畦畔である可能性もある(平間:1988)。なお西側に隣接する第34次調査区4層上面でも同時期と考えられる水田跡が検出されているが、今回発見された水田跡はこれと連続するものと思われる(佐藤:1988)。

8層上面では溝跡を1条検出したのみであるが、第34次調査区でこの層と対応すると考えられる9層上面で弥生時代の水田跡が検出されていること、弥生時代の水田耕作に関与すると推定されている大形板状山岩製石器が層上面から出土したことなどから、詳しい時期は不明であるものの弥生時代の水田跡である可能性が考えられる。

水田の存在が予想されるその他の層の時期は、出土遺物や隣接調査区との層位対比から次のように推定される。

- 2層……………近世
- 3層……………中世
- 5・5層……………平安時代(10c前半以前)



第73図 47次4層・34次4層平面図

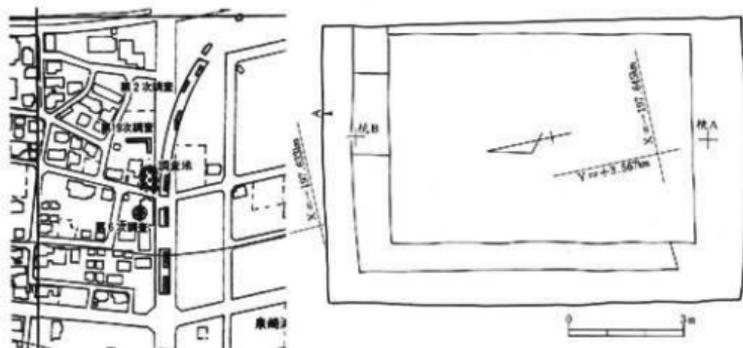
第13節 富沢遺跡第48次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $11 \times 7.5\text{m}$ (約 80m^2)である。調査は、盛土および1層 (旧水田耕作土)面までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査地点は泉崎浦付近の微高地の北東縁辺に近いところで、以前に南側の隣接地 (第6次—佐藤:1983) と北側の隣接地 (第19次—波辺:1986) で調査が行われており、前者では平安時代の、後者では弥生・平安・平安以降の各時期の水田跡がそれぞれ確認されている。したがって、今回の調査でも水田跡の存在が予想された。なお、調査区周辺には土層観察および排水用の側溝を設けた。13層上面までは調査区全面の精査を実施し、13層以下は約 $2 \times 1\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、A・Bを基準として実施した。その杭の座標位置は、A: $X = -197.64340\text{km}$, $Y = +3.59720\text{km}$
B: $X = -197.63436\text{km}$, $Y = +3.59910\text{km}$ である。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に19層が確認された。これらの各層は基本的には、1～4層がシルト層、5層が厚い砂層、6～9層が粘土層、10～18層が粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土から成り、グライ化は19層から始まる。現代のものを除く水田土壌とみられる層は8a層・11層である。また、2・3・4・8b層も水田土壌の可能性がある。12層までの各層の傾きは概して北東方向にわずかに下がる。



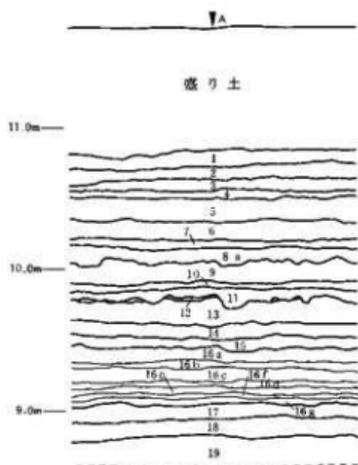
第74図 調査区位置図・設定図

3. 検出遺構と出土遺物

明確な遺構は発見されなかったが、8bかまたは9層上面、12層かまたは13層上面から、それぞれ畦畔状の高まりが発見された。これらの高まりが平面的に直交するプランであること、層が主に自然堆積層であること、上層の8a層および11層が土層の特徴や下面の状況から水田土壌と考えられることなどから、この高まりは8a層および11層を耕作土とした水田耕作に伴い形成された擬似畦畔B（斎野他：1987）と考えられる。したがって本来、擬似畦畔の検出された直上の8aおよび11層上面に畦畔が存在したものと推測される。

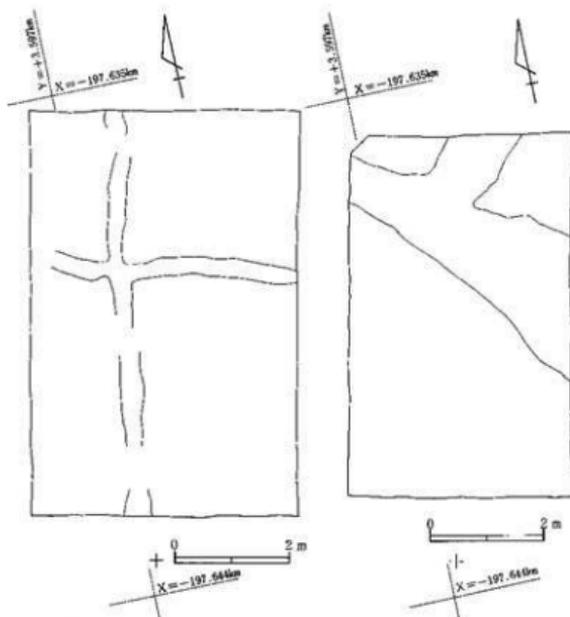
(1) 8a層水田跡（第76図）

＜遺構の検出＞ 8bおよび9層上面で、交叉する二条の擬似畦畔Bが確認された。畦畔の南北方向はN-9°-Eで、東西方向はこれとほぼ直交する。幅は30cm前後である。区画全体の形



第75図 基本層序

層序	上	色	土質	層厚	混入物	備考
1	黒褐色	10Y R 5/7	シルト	6cm-15cm	炭化物・腐葉粒	水田耕作土？（現代）
2	にぶい黄褐色	10Y R 5/4	砂質シルト	10cm前後	鉄分多量・炭化物小量・小礫	水田耕作土？
3	黒褐色	10Y R 5/7	砂質シルト	5cm-10cm	鉄分多量・炭化物少量	水田耕作土？・下面若干起伏・下面に鉄分見 種層
4	黒色	10Y R 4/7	砂質シルト	6cm-8cm	炭化物少量	水田耕作土？・下面起伏・部分的分布
5	オリーブ灰色	2.5GY 4/7	砂	10cm-20cm	炭化物・灰白炭火山灰ブロック	自然堆積層
6	黄灰色	2.5Y 4/7	粘土	10cm-15cm		自然堆積層
7	黒色	2.5Y 4/7	泥炭質粘土	5cm前後	植物遗体	自然堆積層
8a	黒色	5Y 4/7	泥炭質粘土	5cm-15cm		水田耕作土・下層起伏
8b	黒色	5Y 4/7	粘土	2cm-6cm		水田耕作土？・部分的で不連続な分布
9	灰色	5Y 4/7	粘土	10cm-15cm		自然堆積層
10	オリーブ黒色	5Y 4/7	泥炭質粘土	5cm前後		自然堆積層
11	オリーブ灰色	5Y 4/7	泥炭質粘土	5cm-15cm	燧石粒多量	水田耕作土・下層起伏
12	黄灰色	2.5Y 4/7	粘土	2cm-4cm		自然堆積層・部分的で不連続な分布
13	黒色	2.5Y 4/7	泥炭質粘土	12cm-20cm		自然堆積層
14	黒色	5Y 4/7	泥炭質粘土	10cm前後		自然堆積層
15	黒色	5Y 4/7	粘土	3cm-10cm		自然堆積層
16a	黄灰色	2.5Y 4/7	粘土	6cm-12cm		自然堆積層
16b	黒色	10Y R 4/7	粘土	3cm-6cm		自然堆積層
16c	黄灰色	2.5Y 4/7	粘土	10cm前後		自然堆積層
16d	黒色	10Y R 4/7	粘土	3cm-6cm		自然堆積層
16e	黄灰色	2.5Y 4/7	粘土	5cm前後		自然堆積層
16f	黒色	10Y R 4/7	粘土	2cm-4cm		自然堆積層
16g	黄灰色	2.5Y 4/7	粘土	5cm前後		自然堆積層
17	黒色	2.5Y 4/7	粘土	10cm前後		自然堆積層
18	黒褐色	10Y R 4/7	粘土	10cm-15cm		自然堆積層
19	褐色	10Y R 4/7	砂質シルト	25cm以上		自然堆積層



第76図 8 a 層・11層水田跡平面図

確認された。畦畔の南北方向はN—43°—Eで、東西方向はこれとほぼ直交する。幅は平均約1mを計る。区画全体の形状を把握できたものはないが、南半部の最も大きい残存部の面積は約20m²である。耕作土は12・13層の粘土および泥炭層を基盤とする泥炭質粘土であり、残存土壌中には12・13層ブロックが多く混じっている。

<出土遺物> 上面および層中からは同一個体とみられる弥生土器片が2点と石器が7点出土した。

弥生土器(第77図1・2)は地文のみのもので、条間の広い縞糸文(R)である。詳しい時期は不明である。

石器は素材となる剥片の大きさから2つに分けられる。

A類一大形の剥片を素材とするもので、いずれも片面に自然面をもっている。これらにはいわゆる^{5A}椀形をなす石器(第79図3)と、剥片の一部に二次加工が加えられただけの石器がある(第78図1、第80図3)。前者は二次加工として側縁の上部両側に抉りを入れ、下縁辺に二次加工が加えられないのを特徴としている。使用痕としては、下縁辺のみに微細斜離痕と顕著な光沢面があり、その部分が刃部と想定される。後者のうち第78図1の使用痕としては、左側辺か

状を把握できたものはないが、南東部の最も大きい残存部での面積は約2.8×4.2m(約11.8m²)である。耕作土は8b・9層の粘土を基盤としており、残存土壌中には特に9層の灰色土ブロックが多く混じっている。

<出土遺物> 層中からの遺物は発見されなかった。

(2) 11層水田跡(第76図)

<遺構の状況> 12・13上面でT字形に交わる二条の疑似畦畔Bが

ら下縁辺にかけて微細刺離痕が認められ、また、自然面側の左側辺部には光沢面、中央から末端部にかけては擦痕が認められる。したがって刃部としては、左側辺から下縁辺を中心とした部分が想定される。

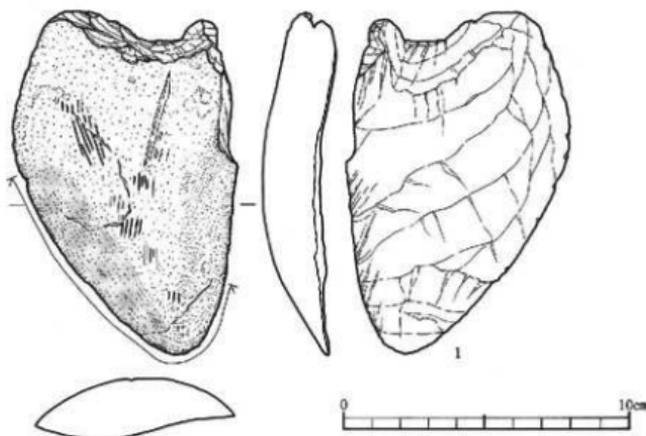


第77図 出土遺物 (1)

B類(第79図1・2、第80図1・2) — 小形の剝片である。これらには一部に二次加工が加えられ

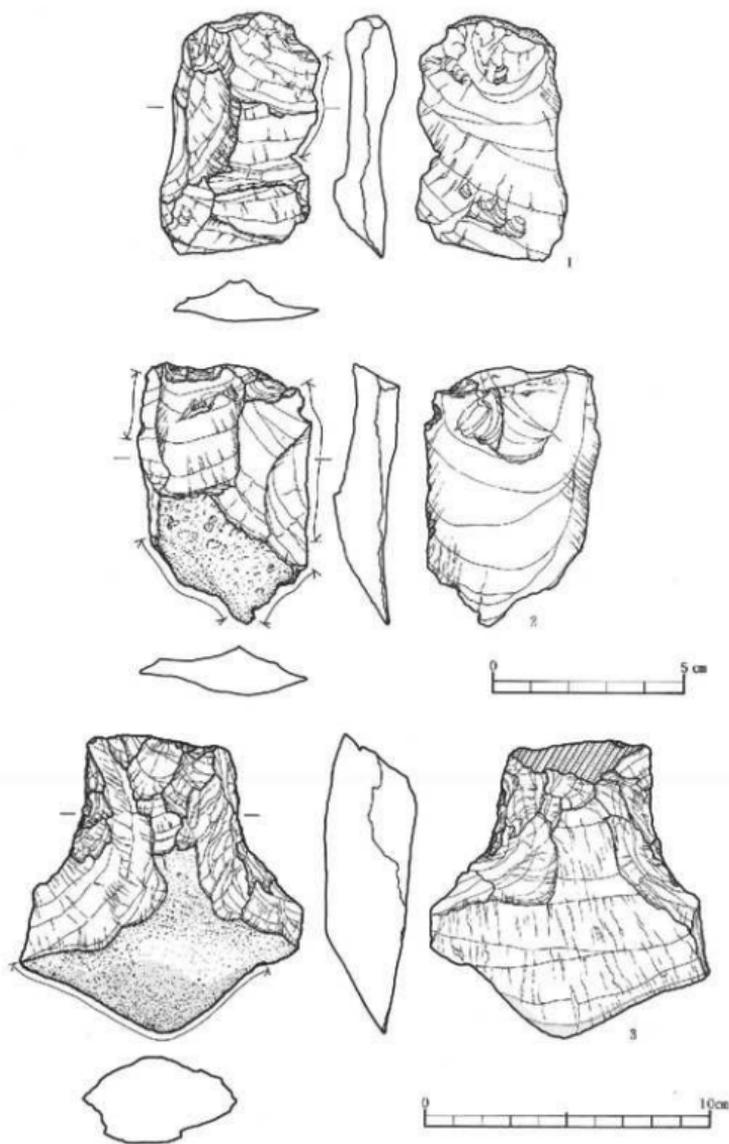
ているもの(第80図1・2)と加えられていないもの(第79図1・2)がある。いずれも石材は流紋岩である。前者では二次加工が加えられている部分を中心に微細刺離痕や光沢面などが、後者では素材縁辺の一部か周縁に微細刺離痕などの使用痕が認められた。

No	遺物・層位	材質	器種	適合度	特徴	備
1	11層水田跡	珪石土器		体部小片	片断赤文	
2	11層水田跡	珪石土器		体部小片	片断赤文	

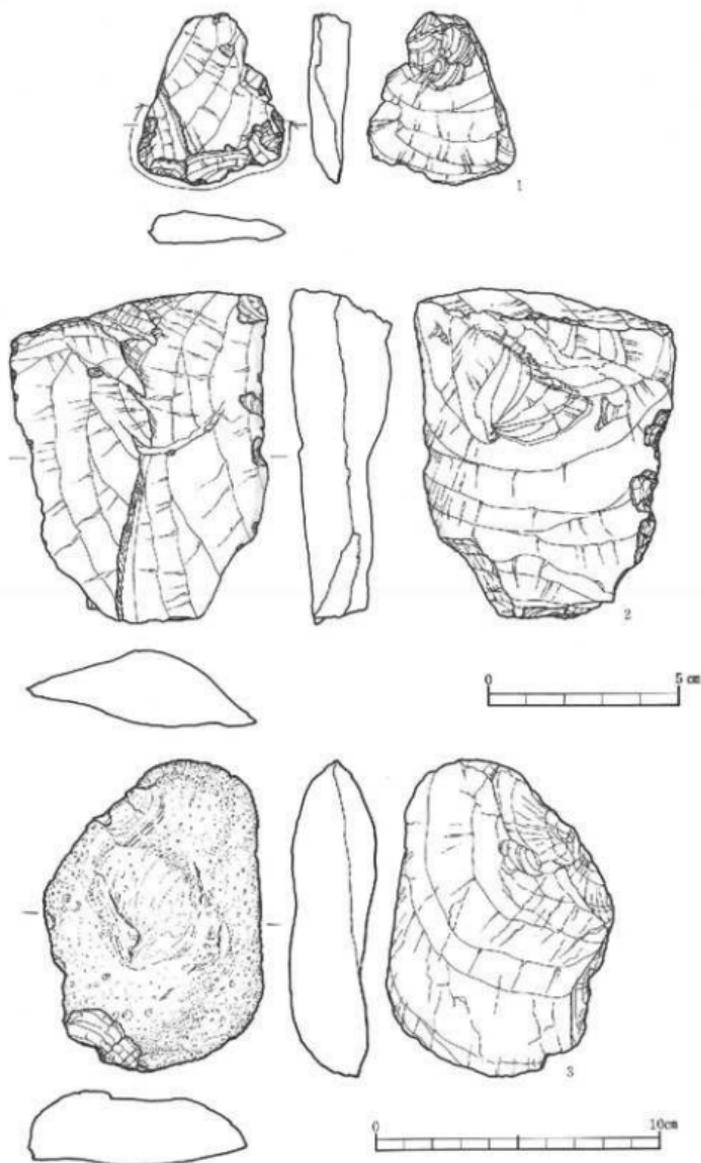


検出層位	図面番号	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
第79図1	写真63-3	二次加工のある剝片	122.0	78.0	20.5	210.8	流紋岩	グリーンテフに近い
第79図2	写真62-1	剝片	64.0	41.0	13.0	28.1		
第79図3	写真63-1	*	68.5	45.0	14.0	37.3	輝石頁岩	
第79図3	写真62-3	剝片石器	105.0	99.0	31.0	265.5	流紋岩	
第80図1	写真62-2	二次加工のある剝片	45.0	38.0	10.0	16.4		
第80図2	写真63-2	*	87.0	67.5	26.5	137.0		
第80図3	写真62-4	*	116.0	77.0	29.0	271.9		磁気地統計資料研計

第78図 出土遺物 (2)



第79図 出土遺物 (3)



第80圖 出土遺物(4)

(3) その他の出土遺物

基本層の2・3・4層からロクロ使用の土師器片などが数点出土しているが、細片のため図示はできなかった。また、自然遺物としては4層から種子が2点出土しているが、東北大学の星川清親氏によるとモモの種子とのことであった。

4. 遺構の所屬年代とまとめ

1. 明確な遺構は検出されなかったが、8a および11層の水田跡の擬似畦畔Bが確認された。この内、8a層については時期決定資料がなく、年代を特定することはできないが、5層中から10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰が含まれていることから、弥生時代以降平安時代以前と考えられる。11層については遺物から弥生時代の水田土壌と考えられる。なお、6次および19次調査の層序と、今回の層序について詳しい対応関係を把握することはできなかった。ただし、今回の11層は、層の特徴や層の上下関係から19次の7b層と対応する可能性が高い。

2. 今回、11層の弥生時代水田土壌より石器が比較的まとまって発見された。今回の調査では縄文時代の遺物は全く発見されておらず、石器の特徴からもこれらは弥生時代の水田跡に伴った可能性が高い。

石器は大きく2つの特徴をもったものから成っているが、それらの内、A類の一部とB類に類似する石器については、これまでも富沢遺跡第15次調査（斎野他：1987）や泉崎浦遺跡（主浜：1988）などで数点の出土例があり、最近では弥生時代に伴うものとして認識されつつある石器群である。15次調査ではこれらに、いわゆる「大形板状安山岩製石器」と名付けられた大形の石器が伴っており、それをも含めていずれも水田耕作に係わる機能が想定されている。さらに使用法としてこれらの中の大形のもの⁵⁰は収穫時のワラの刈り取り用として、小形ものは穂摘具としての可能性を示唆している。今回の出土例でも大半が微細剥離痕をもち、一部にコーン・グロスを思わせる強い光沢面が認められることなどから、水田耕作に係わる機能をもった石器であろうと考えられる。

A類の中の大形⁵⁰の石器であるが、富沢遺跡では初めての出土例である。形状は縄文時代の打製石器の1タイプに近似するものの、片面に自然面を残し、刃部と想定される部位に何ら二次加工が加えられない点で、大きく異なる特徴をもっている。使用痕としてはその他の石器と同様に微細剥離痕と光沢面をもっていることなどから、同様の機能を有したものと推定される。今後の類似資料を待ちたい。

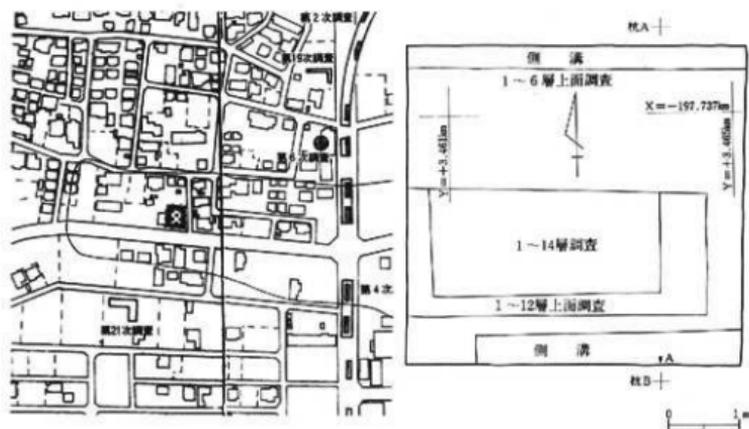
第14節 泉崎浦遺跡第4次調査

1. 調査方法

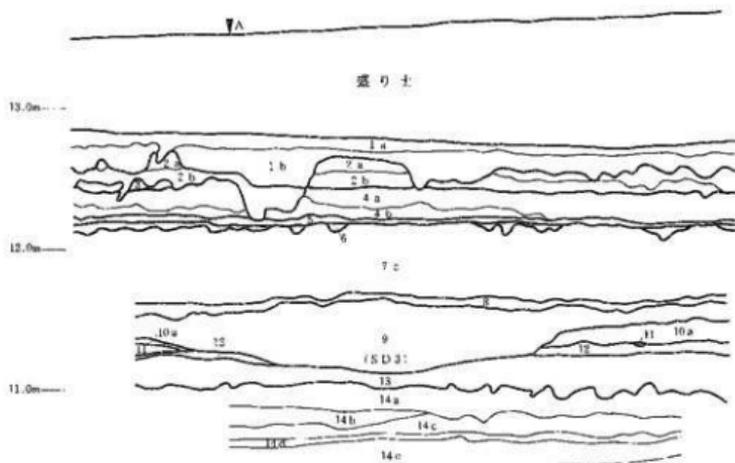
調査区の設定面積は約 $4.8 \times 4.5\text{m}$ (21m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧耕作土)上部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査区は安全確保のため、6層以下では約 $4.2 \times 1.8\text{m}$ に縮小した。さらに、12層以下では約 $3.2 \times 1.5\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197.73579\text{km}$, $Y = +3.46402\text{km}$ 杭B: $X = -197.74079\text{km}$, $Y = +3.46393\text{km}$)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別14層、細別では24層が確認された。全体的に砂質成分が多く、他の調査地点とは異なる。この内1・2・7・9・11・14各層は砂層で、小河川・水路に伴う堆積土・氾濫土の可能性もある。グライ化は、7層以下から漸次進み、14層では顕著である。5・6・8・10a・12層の各層は水田土壌の可能性もある。遺物出土層は1層のみである。尚、3層中からは、灰白色火山灰が検出されているが、下層からの巻き上げの可能性もある。



第81図 調査区位置図・設定図



第82図 基本層序

層序	土色	土質	層厚	品人物	備考
1 a	にぶい黄褐色 10Y R 7/2	砂質シルト	5 cm~12cm		埋積土
1 b	にぶい黄褐色 10Y R 7/2	砂質シルト	10cm~25cm		自然堆積層
2 a	にぶい黄褐色 10Y R 7/2	砂	5 cm~20cm		自然堆積層・不連続で部分的な分布
2 b	黄褐色 10Y 8/2	砂質シルト	2 cm~15cm		自然堆積層
3	残黄褐色 2.5Y 7/2	シルト	1 cm~8 cm	灰白色火山灰粒	不連続で部分的な分布
4 a	灰黄褐色 10Y R 7/2	砂質シルト	10cm~25cm		
4 b	にぶい黄褐色 10Y R 7/2	砂質シルト	2 cm~15cm		
5	灰褐色 7.5Y R 7/2	シルト	2 cm~8 cm		水田耕作土?
6	黒褐色 7.5Y R 7/2	シルト	2 cm~10cm		水田耕作土?・不連続で部分的な分布
7 a	緑灰色 7.5Y R 7/2	砂質シルト	5 cm~18cm		自然堆積層・部分的分布
7 b	緑灰色 10Y R 7/2	砂	7 cm~20cm		自然堆積層・部分的分布
7 c	灰白色 10Y R 7/2	砂	6 cm~20cm		自然堆積層
8	褐色 10Y R 7/2	シルト	3 cm~12cm	炭化物粒	水田耕作土?・下部粗快
9	にぶい黄褐色 10Y R 7/2	砂	2 cm~50cm		自然堆積層
10 a	褐色 10Y R 7/2	粘土	2 cm~16cm		水田耕作土?・下部若干粗快
10 b	褐灰色 10Y R 7/2	粘土			自然堆積層・部分的分布
11	黄褐色 2.5Y 7/2	砂	5 cm~16cm		部分的分布
12	オリーブ褐色 5 Y 7/2	粘土	2 cm~5 cm		水田耕作土?・部分的分布
13	黒色 10Y R 7/2	シルト	8 cm~33cm	植物遺体少量	
14 a	オリーブ褐色 2.5C Y 7/2	砂	10cm~25cm		自然堆積層
14 b	オリーブ褐色 5 Y 7/2	砂	10cm~15cm		自然堆積層・部分的分布
14c	オリーブ褐色 5 G Y 7/2	砂	5 cm~18cm		自然堆積層
14 d	緑灰色 10Y R 7/2	粘土	3 cm~8 cm		自然堆積層
	灰白色 10Y R 7/2	粘土			
14 e	オリーブ褐色 5 G Y 7/2	砂	20cm以上		自然堆積層

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 2層上面

1号溝跡—SD1—(第84図)

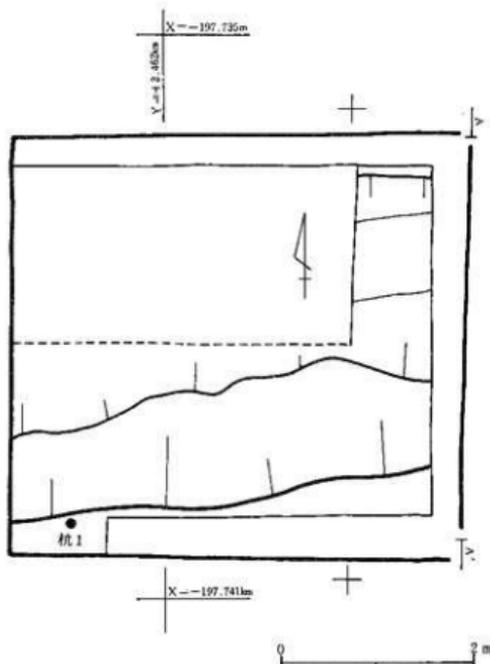
SD2の上に重複する溝跡で、方向・溝幅ともSD2とほぼ同様である。深さは約60cmで、堆積土は基本層1b層が入り込んだものである。堆積土中よりビニール袋・陶器・磁器が出土している。

(2) 3層上面

2号溝跡—SD2—(第83・84図)

<遺構状況> 東西方向に延びる大溝で、北側の肩は調査区外となり、検出できなかった。調査の都合上、東側の一部を完掘したのみである。推定上端幅4m前後、深さ約1mで、壁面中央に段を有す。中段幅は約2mで、これを境とし壁面は上半が緩やかな傾斜面となる。中段以下の断面形は逆台形状を呈す。堆積土は3層から成るが、最上層は基本層の2b層である。各層とも自然堆積状況を示す。尚、溝の南側の肩付近に丸木の杭が1本打ち込まれていた。

<出土遺物> 堆積土①層から土師器片・陶器片・磁器片・瓦片が計7点、堆積土層②より杭材が1点出土した。陶器・磁器は全て近代以降のものである。



第83図 SD2平面図



土層註記

SD 1

① にぶい黄褐色 10YR 4/3 砂質土 旧耕作土でビニール含む。

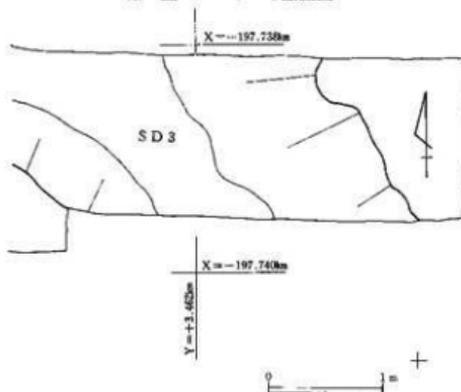
SD 2

① 灰黄褐色 10YR 5/2 砂質シルト 5a層を小ブロック状に含む。

② 黒褐色 10YR 3/2 粘質土 植物遺体を多量に含む。

③ 灰色 5Y 4/1 粘質土 砂との自然堆積互層。

第84図 SD 1・2断面図



第85図 SD 3平面図

(3) 10層上面

3号溝跡—SD3—(第85図)

北西⇨南東方向に延びる溝で、10a層上面で検出された。上端幅約2.5m、深さ約40cmで、断面形は開いた「U」字形を呈す。堆積土は基本層9層が入り込んだものである。出土遺物はない。

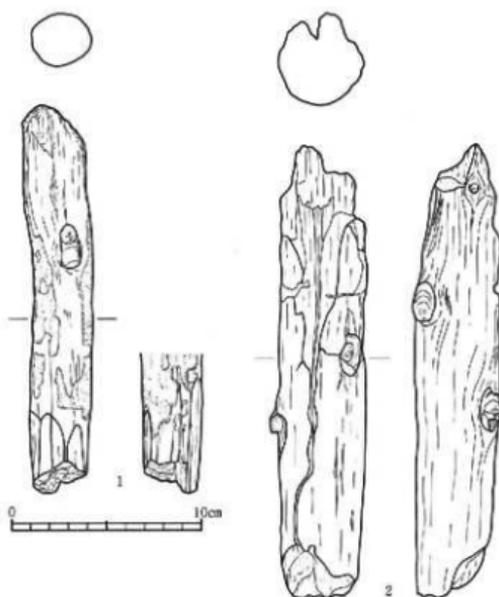
4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構としては、10層上面でSD3、3層上面でSD2、2層上面でSD1が、また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の12・10a・8・6・5層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料に乏しく、隣接調査区との層位の対応も不可能で、明確な年代は不明である。ただし、3層より灰白色火山灰を検出したことより3層を年代のキー層として考えた

い。ただし、下層からの巻き上げの可能性もあることより、4層以上を平安時代以降、5層以下を平安時代以前の堆積層として考えたい。従って、各遺構の推定所属年代は以下のとおりである。

- ・SD3—平安時代以前
- ・SD2—平安時代以降 現代以前
- ・SD1 溝跡—現代

2. SD2 は検出層の10a層が、水田土壌の可能性があることより、水田に伴う水路としての機能も想定される。



No.	図号(併用)	図説番号	出土遺構・層位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	厚さ	先端加工	表面加工	備考
1	第86図1	写真04-2	SD1	杭	広?	丸木	20.6cm	3.2cm	—	—	縦断面	枝肌い面 一部磨光遺存
2	—	—	11 層	木片	広	4分割材	15.0cm	5.5cm	—	不明	なし	状態悪い
3	第86図2	写真04-1	5 a層上面	杭	広?	丸木	24.1cm	4.4cm	—	—	2方向以上	枝肌い面

第86図 出土遺物

第15節 山口遺跡第5次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $13 \times 3.7\text{m}$ (48m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。9層上面までは、調査区全面の精査を実施し、9層以下は、約 $8 \times 2.2\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた(11層以下は約 $4.8 \times 2.2\text{m}$ 、12層以下は約 $4.4 \times 1\text{m}$)。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197.98450\text{km}$ 、 $Y = +3.29478\text{km}$ 杭B: $X = -197.99648\text{km}$ 、 $Y = +3.29439\text{km}$)。



第87図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別12層、細別では14層が確認された。各層の土質は1・2層がシルト、3～7層までが粘土あるいは砂で、以下8～11層までが粘土を主とし泥炭が混じる泥炭質粘土となり、12層で再び粘土となる。グライ化は、11層以下から漸次進み、12層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は4a層である。4a層は、4b層の分解の度合いの差によって、a₁とa₂に細分される。また、2・5層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は11層のみである。各層の傾きとしては、2～6層までが南東傾へ緩やかに下り、7層以下ではほぼ水平となる。

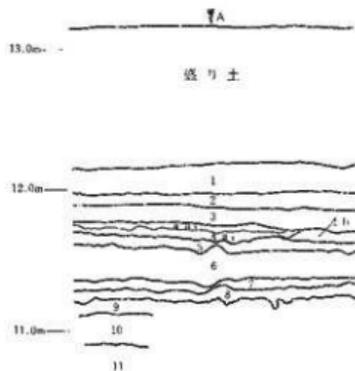
3. 検出遺構と出土遺物

1号溝跡(SD1)、4a層水田跡が検出された外、遺構としては認定し得なかったが、5層上面で帯状に走る土層の変化が認められた。

(1) 3層上面

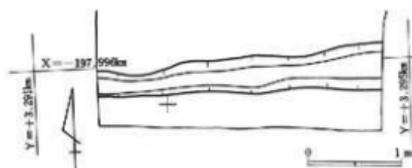
1号溝跡—SD1—(第89図)

調査区の南隅に位置し、東西方向に直線的に走行する小規模な溝である。上端幅約25～50cm、深さ約5～10cmで、断面形は「J」字形を呈する。堆積土は基本層の2層が入り込んだものである。出土遺物はない。溝跡としたが、その性格は不明である。

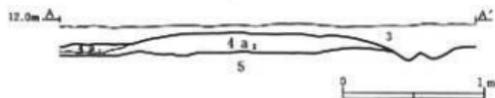
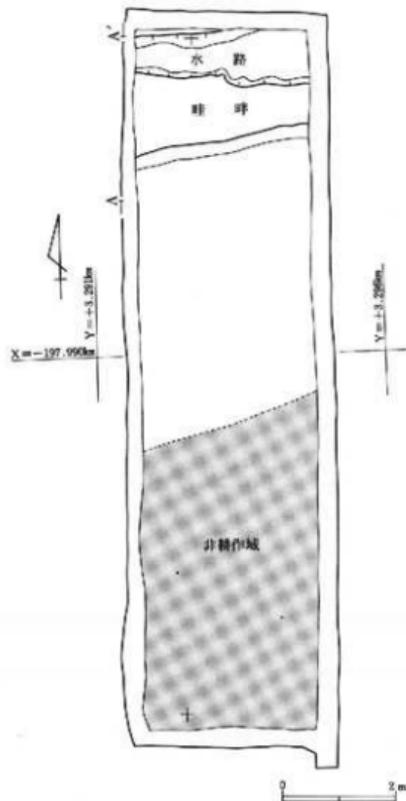


第88図 基本層序

層序	土 質	土 質	厚 厚	備 考	備 考
1	赤い、ブ褐色 6Y 5/6	シルト質粘土	10cm～30cm	砂粒多量	水田耕作土(現代)
2	暗褐色 10Y R 5/6	シルト	7cm～14cm	砂粒多量	水田耕作土上・下層に泥炭混入
3	にがい黄褐色 10Y R 5/6	砂	10cm～20cm		自然堆積層
4a ₁	灰黄褐色 10Y R 5/6	粘土	2cm～6cm		水田耕作土・下面粘土
4a ₂	黒褐色 10Y R 5/6	粘土	2cm～8cm		水田耕作土・下面粘土、不連続で部分的な分層。4層の分解が進んでない層
4b	灰黄褐色 10Y 5/6 濃褐色 10Y R 5/6 黒褐色 10Y R 5/6	粘土	5cm～10cm		自然堆積層・互層
5	黒色 10Y R 5/6	粘土	5cm～15cm	砂粒多量	水田耕作土?・下面粘土
6	にがい黄褐色 10Y R 5/6	砂	15cm～25cm	泥炭質多量	自然堆積層
7	黒褐色 10Y 5/6	粘土	2cm～8cm	植物体多量	下面粘土
8	灰黄褐色 10Y R 5/6	泥炭質粘土	5cm～10cm	植物体多量	粘土を主層とする・下面粘土
9	黒褐色 10Y R 5/6	泥炭質粘土	5cm～15cm	植物体多量	粘土を主層とする・下面粘土
10	黒色 10Y R 5/6 黄褐色 10Y R 5/6	泥炭質粘土	15cm～25cm	植物体多量	自然堆積層・粘土と泥炭の互層で粘土を主層とする
11	黄褐色 2.5Y 5/6	泥炭質粘土	30cm～50cm	植物体多量	自然堆積層・粘土を主層とする・下面粘土
12	緑褐色 5Y 5/6	粘土	50cm以上	植物体多量	自然堆積層



第89図 SD 1平面図



第90図 4 a層水田跡平面・断面図

(2) 4層上面

4a層水田跡(第90図)

<遺構状況> 畦畔と非耕作域によって区画された水田面が検出されたが、一部の検出のため、1区画の形状・規模は不明である。畦畔は北に水路を伴っている。畦畔は調査区の北側に位置し、N-81°Eの方向をとる。畦畔の南側には、約4.5mの間隔をもってほぼ平行に耕作域(4a層)が広がり、その南側は非耕作域(4b層)となっている。非耕作域との境界には畦畔は検出されなかった。また、水路の北側の畦畔の有無は調査区外のため不明である。畦畔は耕作土と同一土壌—4a層—を盛り上げ作られている。下端幅は約1~1.5mで、耕作土上面からの高さは約10cmである。水口は認められなかった。水路は上端幅約0.6~1m以上、深さ10cm前後で、断面は開いた「U」字状を呈する。底面は凹凸が著しい。堆積土は、基本層の3層が入り込んだものである。耕作土は、粘土層の4b層を攪拌し、耕作土—4a層—としている。耕作土は分解の度合いで $a_1 \cdot a_2$ に分けられるが、下面には分解の進んでいない a_2 が必ず認められる。耕作土の厚さは10cm前後である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。尚、畦畔部分では、耕作がさほど及ばなかったためか、分解の余り進んでいない a_2 層となっており、さらに、下層上面が擬似畦畔となっている。

水田面の標高は11.60～11.80mの間で、南東方向の下り傾斜を示す。

<出土遺物> 非耕作域上面より土器片が2点出土した。いずれも細片で遺存状態も悪いが、1点にはわずかに縄文が認められた。所属年代については不明である。

(3) 5層上面 (第91図)

5層は下層6層(砂層)を巻き上げ、砂粒を多量に含む層である。調査区の北側で砂粒をほとんど含まない部分が、帯状に検出された。幅約3.5mで北東⇄南西方向をとる。直下の6層上面には、疑似畦畔状の高まりは認められなかった。



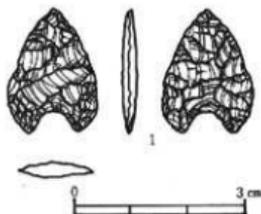
第91図 5層上面平面図

(4) その他の出土遺物

11層中より石鏃が1点出土したのみである。石鏃(第92図1)は完形で、基部に挟りをもつハート形のものである。尚、11層中からは10cm前後の自然礫が3点程出土している。

4. ま と め

検出遺構としては、SD1、4a層水田跡がある。この内、4a層水田跡は、小規模な水路を伴う畦畔と非耕作域によって区画されたものであるが、1区画の形状・規模は不明である。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の2・5層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料がなく、周辺調査区との層位の対応も不可能で、年代は不明である。



No.	埋蔵層外	名 称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 質	備 考
1	写真45	石 鏃	22.0	15.0	3.0	0.9	チャート	

第92図 出土遺物

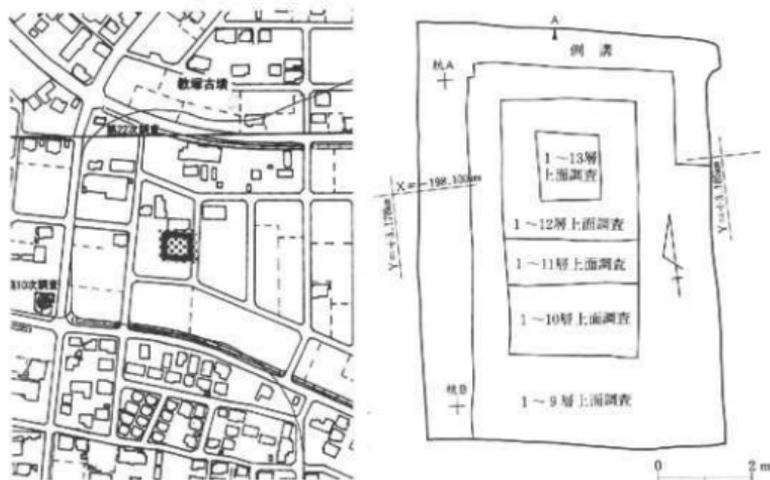
第16節 山口遺跡第6次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $8 \times 5 \text{ m}$ (41.6m^2) である。調査は、盛土および直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区周辺には土層観察および排水用の側溝を設けた。9層上面までは調査区全面の調査を実施し、9層以下は $5.5 \times 2.8 \text{ m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。(10層以下は $4.0 \times 2.8 \text{ m}$ 、11層以下は $3.0 \times 2.8 \text{ m}$ 、12層以下は $1.4 \times 1.3 \text{ m}$) 遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準準の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している。(杭A: $X = -198.09771 \text{ km}$ 、 $Y = +3.17936 \text{ km}$ 杭B: $X = -198.10467 \text{ km}$ 、 $Y = +3.17882 \text{ km}$)

2. 基本層序

今回の調査では盛土下に13層が確認された。各層の土質は1~4層がシルト質を主とし、5層が砂質で6層がシルト質粘土層、以下8~13層までは粘土や粘土質シルトである。9層以下はやや泥炭を含んでいる。グライ化は11層以下から漸次進み、12層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は基本層6層で、その他2~4・8層も水田土壌の可能性もある。各層の傾きは1~5層まではほぼ水平であるが、6層以下は北~北東側へ緩やかに下っている。



第93図 調査区位置図・設定図

3. 検出遺構と出土遺物

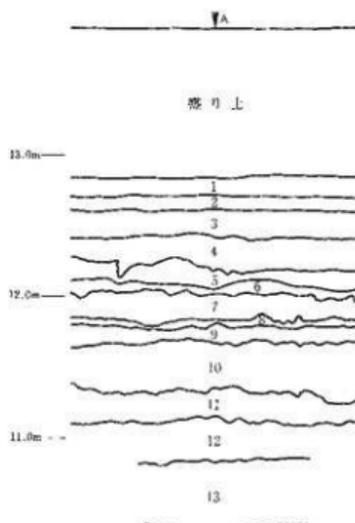
(1) 6層上面

6層水田跡(第95図)

<遺構状況> ほぼ直交する2本の畦畔(畦畔1・2)と、それによって区画された水田面を4区画検出した。一区画は一辺5m以上の方角と推定される。畦畔1の方向はN-21°-Eで、畦畔2は交点付近でやや屈曲している。これら2本の畦畔は耕作土と同じ6層を盛り上げて作られており下端幅は0.4~0.7m、耕作土上面からの高さは約5cmである。なお畦畔1は交点北側で幅約20cmの部分が途切れており、上層を覆っていた5層の砂がこの部分を西から東へ向かって流れた痕跡が認められた。この部分は水口であった可能性がある。耕作土は厚さ約5~15cmで全体的に分解が進んでいる。下面は凹凸が顕著で鉄分の集積は認められない。水田面の標高は12.04~12.18mの間で、全体的には北東方向へ下っているが水田の区画ごとに見ると南西の区画が最も高く、次に南東の区画、北西の区画の順に低くなり、北東の区画が最も低い。

<出土遺物> 畦畔の交点の北西側において、水田面を覆っていた砂層の最下部、6層水田面よりもやや浮いた状態で土師器・甕が出土している。

厳密にはこの水田に伴う物ではないが、水田の廃絶時期に極めて近い時期のものと考えられる。栗甕式の甕で捉えられるが細かい時期は確定できない。



第94図 基本層序

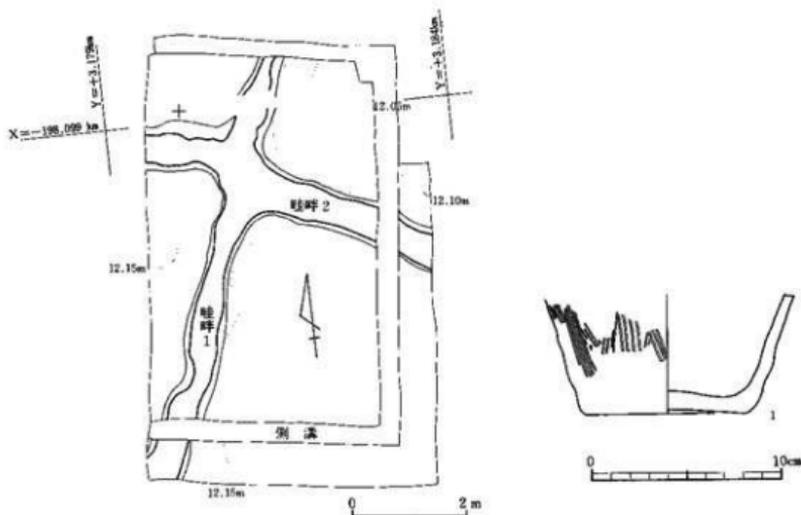
層序	土色	土質	厚さ	層名	遺物	備考
1	新黄褐色	10Y R 6/3	粘土質シルト	15cm前後		水田耕作土(現代)
2	新黄褐色	10Y R 6/3	シルト	10cm前後		水田耕作土?、下に鉄分集積層
3	新黄褐色	10Y R 6/3	シルト	80cm前後	マンガン粒多量・下部に鉄分少量 炭化物粒少量	水田耕作土?
4	しおい黄褐色	10Y R 6/3	粘土質シルト	10cm~25cm	マンガン粒・炭化物粒多量	水田耕作土?、下部起伏・下部の一部に鉄分集積層 自然腐蝕層
5	しおい黄褐色	10Y R 6/3	砂	5cm~20cm	#1~2cmの硬塊粒少量	自然腐蝕層
6	黄褐色	10Y R 6/3	シルト・砂混合	5cm~10cm		水田耕作土?、下部起伏
7	暗黄褐色	2.5Y 5/3	シルト質砂	10cm~25cm		自然腐蝕層
8	砂褐色	10Y R 6/3	粘土	2cm~10cm		水田耕作土?、下部起伏
9	赤色	2.5Y 5/3	粘土	10cm~15cm	植物遺体少量	下面若干起伏
10	黄褐色	2.5Y 5/3	粘土	30cm~40cm	植物遺体少量	自然腐蝕層
11	より黄褐色	7.5Y 5/3	粘土質シルト	10cm~30cm	植物遺体少量	自然腐蝕層
12	より黄褐色	2.5Y 5/3	粘土質シルト	20cm~30cm	植物遺体少量	自然腐蝕層
13	より黄褐色	2.5Y 5/3	粘土	50cm以上	植物遺体少量	自然腐蝕層

(2) その他の出土遺物

基本層1・2・3層から土師器片、陶器片、磁器片、瓦片、フイゴ羽口片、種子などが出土した。磁器は1層中から出土し、近世以降に属するが、3層中出土の陶器は時期が確定できなかった。土師器のうち調整技法が分かるものの大部分は内面へラミガキ後黒色処理されたものである。

4. 遺構の所属年代とまとめ

検出遺構は6層水田跡のみで、その他水田跡の可能性のある層としては2～4・8層があげられる。6層水田跡は一区画の形状・規模は不明であるが、全面が砂に覆われて遺存状況は比較的良好であった。時期は出土遺物から古墳時代後期と推定される。同時期の水田跡が西方約250m離れた第24次調査区で検出されているが、これらの関係を明らかにすることが今後の課題である。なお、その他の基本層の時期は確定できない。



第95図 6層水田跡平面図

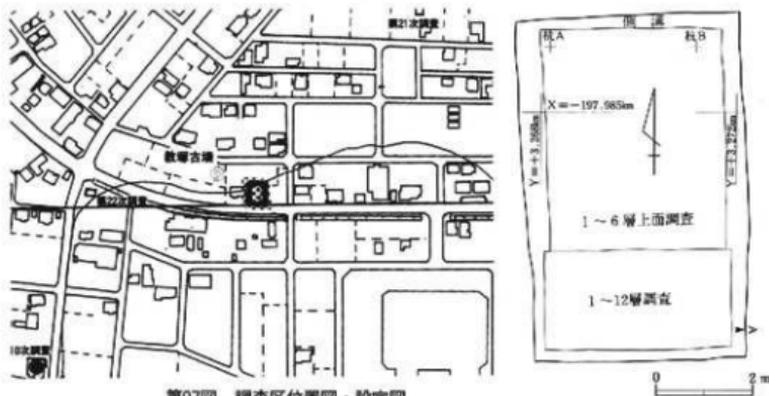
No.	図番	遺構・層位	種別	原種	遺存度	底径	特	注
1	写真06	5層下部	土師器	壺	底部付近のみ	8.4cm	ハケ目・ナデ、網代模	

第96図 出土遺物

第17節 山口遺跡第7次調査

1. 調査方法

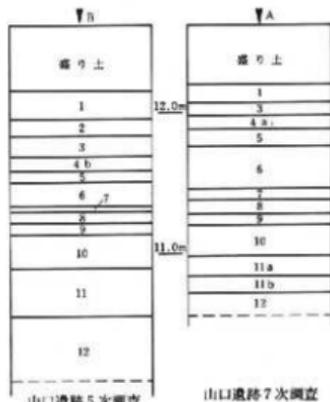
調査区の設定面積は約 $7.3 \times 4.6\text{m}$ (33m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。6層上面までは、調査区全面の精査を実施し、6層以下は、約 $2.6 \times 3.3\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197.98361\text{km}$, $Y = +3.26817\text{km}$ 杭B: $X = -197.98361\text{km}$, $Y = +3.27117\text{km}$)。



第97図 調査区位置図・設定図

2. 基本層序

今回の調査では盛土下に大別12層、細別では15層が確認された。これら各層は、隣接第5次調査と同様であるので各層の状況はこれを参照されたい(本文 p.103)。尚、調査区内は4層上面まで新しい時期の攪乱が入っており、4層以上の状況は調査区東壁の観察による。第98図は第5次調査区東壁中央部(第87図▼B)と当調査区東壁南端の土層柱状図である。両地点は直線距離で23mである。両地点の各

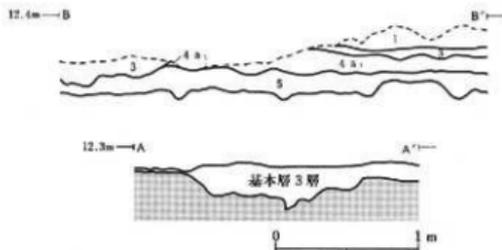
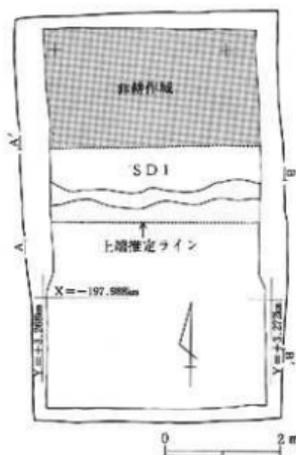


第98図 基本層序

層の標高を比較すると、至近距離にも拘わらず、当調査区の方が高く、6層（砂層）が厚く堆積しているせいか、6層以上はその差が顕著で、20～40cmの標高差となっている。遺物出土層は6層のみである。

3. 検出遺構と出土遺物

4層上面で畦畔は確認できなかったが、第5次調査区の4a層水田跡耕作土のひろがりと水路の延長が認められた。また、遺構としては認定し得なかったが、5層上面で土層の変化が認められた。



第99図 4a層水田跡平面・SD 1断面図

(1) 4層上面

4a層水田跡・SD 1 (第99図)

上面が攪乱により削平されていたため、水路の下半が検出されたのみである。水路の北側は非耕作域となっている。尚、遺構の計測値は全て調査区壁面観察による。水路はほぼ東西方向をとる。推定上幅約1.3m、深さ約15cmで、断面は開いた「U」字状を呈する。底面は凹凸が著しい。堆積土は、上層3層の単層である。耕作土は、粘土層の4b層を攪拌し、耕作土—4a層—としている。耕作土はa₁層で、下面には分解の進んでいないa₂は認められない。耕作

土の厚さは10cm前後である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。

水田面の標高は12m前後で、傾斜は不明である。出土遺物はない。

(2) 5層上面

5層は下層6層（砂層）を巻き上げ、砂粒を多量に含む

層である。しかし、調査区北側の4a層水田跡非耕作域と同一範囲は、砂粒をほとんど含まず、層の状況が異なった。

(3) その他の出土遺物

6層中より土器片が2点出土した。1点は外面が斜位LR縄文の地文のみのもので(第100図1)、他の1点は細片で遺存状態が悪く文様の有無は不明である。所属年代については不明である。

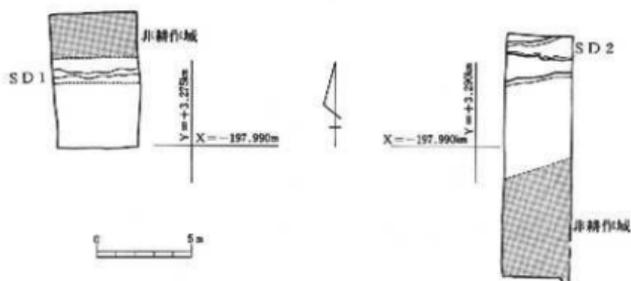


No.	図版番号	遺構・層位	種別	特徴
1	写真07	6層	縄文土器の片(土器)	斜位LR縄文

第100図 出土遺物

4. ま と め

検出遺構は4層で水田跡が検出されたのみである。当水田跡の水路(SD1)は、規模・方向性の点より第5次調査検出水路(SD2)と同一のものである。第5次調査ではこの水路の北側の状況は調査区外のため不明であったが、当調査区では非耕作域となっている。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の2・5層が上げられる。この内、5層は第5次調査区と同様に、面的な層の変化が確認された。これらの所属年代であるが、第5次調査同様時期決定資料がなく、周辺調査区との層位の対応も不可能で、年代は不明である。



第101図 山口遺跡5・7次4a層水田跡平面図

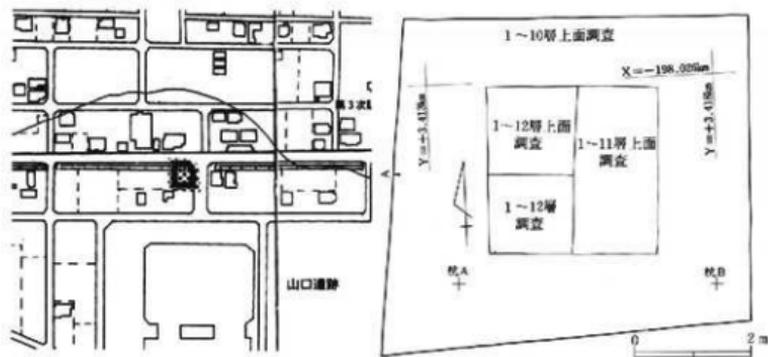
第18節 山口遺跡第8次調査

1. 調査方法

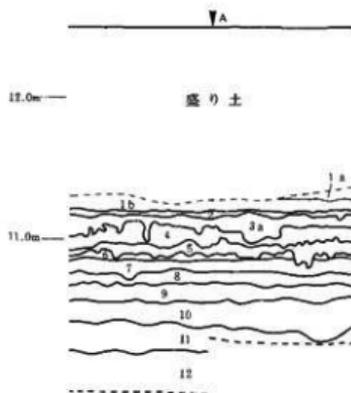
調査区の設定面積は約 $6 \times 6 \text{ m}$ (35m^2) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。10層上面までは、調査区全面の精査を実施し、10層以下は、約 $3 \times 3 \text{ m}$ の試掘区を設けて掘り下げた（11層以下は約 $3 \times 1.5\text{m}$ 、12層以下は約 $1.5 \times 1.5\text{m}$ ）。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -198.02952km、Y = +3.41342km 杭B：X = -198.02971km、Y = +3.41792km）。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別12層、細別では14層が確認された。各層の土質は1～4層がシルト質、5～9層の間が粘土質、以下はシルト質のものを主とする。3b層は砂質の度合いが強い。グライ化は、10層以下から漸次進む。現代のものを除く水田土壌は4・5層である。また、2・3a層も水田土壌の可能性がある。4・5層からは、灰白色火土灰が検出されている。4層中のもは、本来5層中に入っていたものが、後の4層の攪乱により層中に巻き上げられたものである。遺物出土層はない。全体的な層の傾きは、南東側へ緩やかに下がる。



第102図 調査区位置図・設定図



第103図 基本層序

層序	土色	上質	層厚	混入物	備考
1 a	暗緑灰色 7.5G Y 灰	シルト質粘土	15cm以上		水田耕作土 (現代)
1 b	灰オリーブ色 5 Y 灰	シルト	8cm前後	鉄分	水田耕作土 (現代)・1層の跡は等?
2	暗オリーブ灰色 5G Y 灰	粘土	2cm~3cm	鉄分多量	水田耕作土?・上面鉄分多量層・下面起状
3 a	黄褐色 2.5Y 灰	砂質シルト	3cm~20cm	マンガン粒多量・腐灰粒	水田耕作土?・下面起状
3 b	灰オリーブ色 5 Y 灰	砂質シルト	3cm~30cm	植物遺体・粗砂と粘土も含まれる	自然堆積層・部分的分布
4	暗灰黄色 2.5Y 灰	シルト質粘土	3cm~20cm	マンガン粒・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土・下面起状
5	黒褐色 3.5Y 灰	粘土	2cm~20cm	マンガン粒・鉄分・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土・部分的分布
6	黒色 10Y R 灰 黒色 10Y R 灰	粘土 粘土	2cm~8cm	腐灰粒少量	互層・自然堆積層・不連続で部分的分布
7	灰色 5 Y 灰	粘土	5cm~10cm		自然堆積層
8	黒色 5 Y 灰 灰色 5 Y 灰 黒色 2.5Y 灰	粘土 粘土 粘土	5cm~10cm		互層・自然堆積層
9	黒褐色 7.5Y R 灰	泥炭質粘土	10cm前後	植物遺体多量	自然堆積層
10	オリーブ灰色 2.5G Y 灰	砂質シルト	12cm~25cm	植物遺体多量	自然堆積層
11	緑灰色 7.5G Y 灰	砂質シルト	18cm~22cm	小礫・植物遺体	自然堆積層
12	暗緑灰色 5 G 灰	シルト質粘土	30cm以上	小礫・植物遺体	自然堆積層

3. 検出遺構と出土遺物

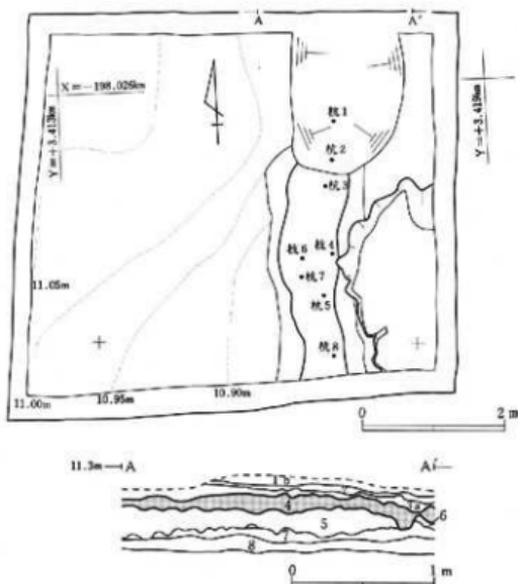
(1) 4層上面

4層水田跡 (第104図)

<遺構状況> 真北方向をとる畦畔が1条検出されたのみである。畦畔は調査区の東側に位置し、北側は攪乱によって不明である。畦畔は耕作土と同一土壌を盛り上げ作られている。下端幅は約1.3m前後で、耕作土上面からの高さは7cm前後である。上面をやや下げた段階で杭列が検出されている。この連続のものは北側攪乱部分でも検出されており、杭数は合計8本である (杭1~8)。杭3~5・8は上端の東側に打たれており、杭1・2も同位置に打たれたものと考えられる。これらは0.5~1mでほぼ等間隔で並んでいる。ただし、杭6・7は杭4・5の

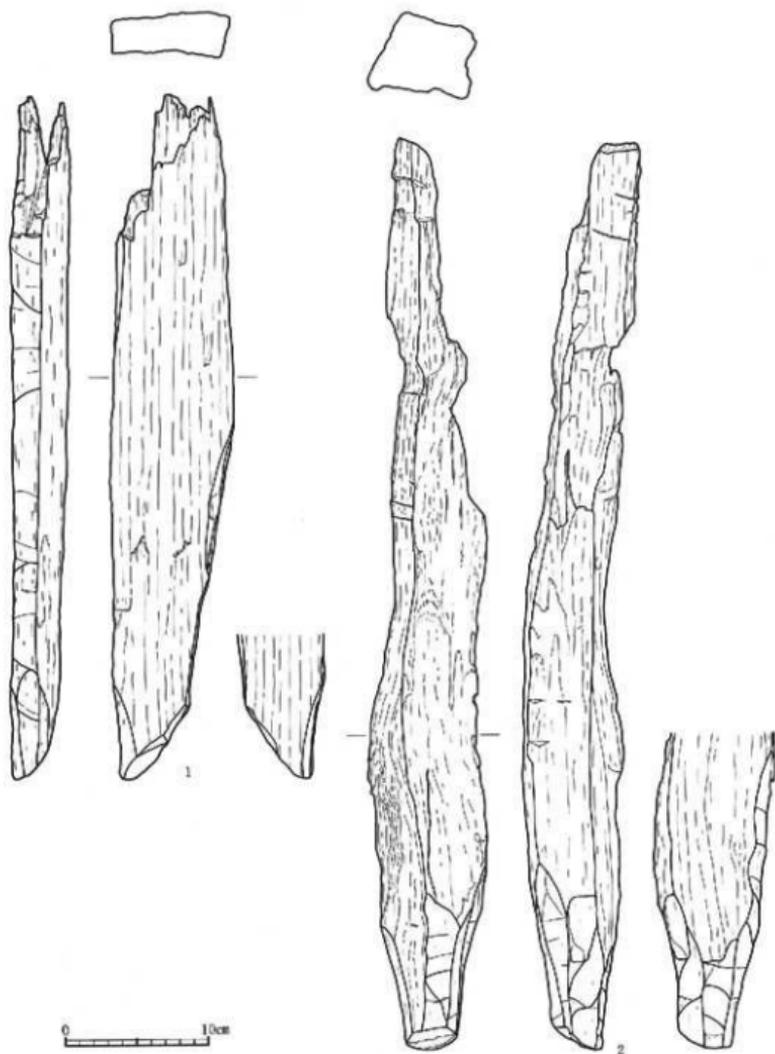
反対側に位置し間隔も狭い。杭材は分割材が使用されている。耕作土の厚さは10~15cmである。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。畦畔の東側に接した耕作土上面は大きく窪んでおり、畦畔もこれによって一部削られている。窪の底面は凹凸が激しく、深い部分では耕作土上面から約30cm下がる。堆積土には、上層3b層の粗砂が多量に堆積していた。水田面の標高は10.85~11.10mの間で、南東方向の下り傾斜を示す。

<出土遺物> 赤焼土器・須恵器等の土器片が7点出土したが、図化が可能なものはない。

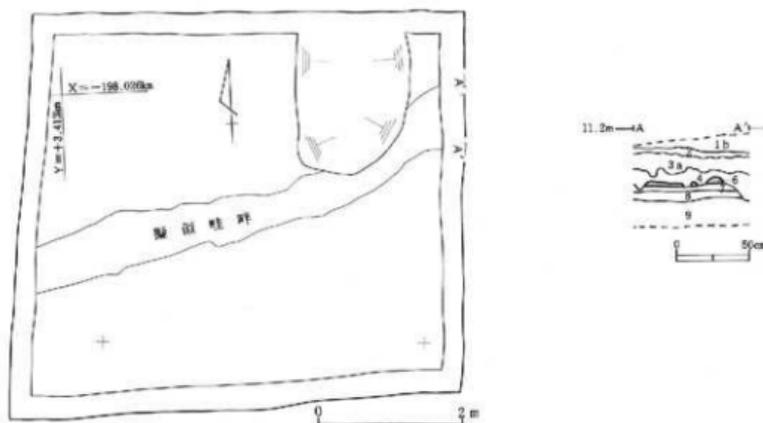


第104図 4層水田跡平面・断面図

No.	採収番号	図録番号	出土遺物・層位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	先端加工	表面加工
1			4層水田跡	杭	針	分割材	55.0cm	6.0cm	複数方向	なし
2	第105図1	写真68-1	4層水田跡	杭	針・柱目	板状の分割材	48.0cm	8.0cm	複数方向	なし
3	第105図2	写真68-2	4層水田跡	杭	針	分割材	63.5cm	7.8cm	複数方向	なし
4			4層水田跡	杭	針・柱目	板状の分割材	73.5cm	5.7cm	複数方向	なし
5			4層水田跡	杭	針	分割材	22.5cm	3.6cm	複数方向	なし
6			4層水田跡	杭	?	分割材	9.3cm	3.2cm	不明	なし
7			4層水田跡	杭	?	2分銅材	21.5cm	2.9cm	2?方向	なし
8			4層水田跡	杭	針・柱目	板状の分割材	16.5cm	4.0cm	複数方向	なし



第105図 出土遺物



第106図 5層水田跡平面・断面図

(2) 5層上面

5層水田跡 (第106図)

5層上面で畦畔は検出されなかった。しかし、6層上面で擬似畦畔B (斎野：1987) が検出された。6層が明確な自然堆積層であることより、5層が水田跡であったことが予測できる。擬似畦畔はN-72°-E方向で、幅は60cm前後である。耕作土は、上部が4層水田跡によって削平されているが、残存厚平均は10cm前後である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は10.90m前後で、4層水田跡同様、南東方向の下り傾斜を示すものと思われる。出土遺物はない。

4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構としては、4・5層水田跡がある。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層2・3a層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料を欠くが、隣接2次調査区 (田中：1984) との層位の対応より (4層=2次3層、5層=2次4 A層)、年代は以下のとおりである。5層水田跡—平安時代 4層水田跡—中世 3a・2層—中世以降
2. 4層水田跡耕作土上面の窪は、堆積土の状況より水の影響によるものとも考えられる。これの西側に接する畦畔上には、杭の集中箇所 (杭4~7) が見られる。これらよりこの畦畔上に水口等の水利施設が取り付いた可能性もある。
3. 2次調査7b層は、弥生時代天王山式期の水田跡の可能性が指摘された。しかし、当調査区では、6層下に水田耕作土の可能性のある層は、認められなかった。

第3章 プラント・オパール分析

古環境研究所

1. 試料

富沢・山口・泉崎浦遺跡における埋蔵水出跡の探査を目的として、プラント・オパール分析を行った。試料は、遺跡の調査担当者によって容量50cm³の採土管を用いて採取され、当研究所に送られてきたものである。

2. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（150W・26KHz・15分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重と換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの種実重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの稲稈生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は1.03である。

3. 結果および考察

イネのプラント・オパールの検出状況を第107・108図に示す。この結果をもとに検討を行い、稲作の可能性を4段階に区分して第4表に示した。このうち、◎印はイネのプラント・オパー

ル密度が10,000個/g以上と極めて高い値であることから、稲作の可能性が特に高いと判断される。○印および5,000～10,000個/gと高い値であることから、稲作の可能性が高いと判断される。△印および1,000～5,000個/gと比較的低い値であることから、稲作の可能性はあるものの、上層などからの混入の危険性も考えられる。▲印は1,000個/g未満と微量であることから、稲作の可能性は考えにくいところである。以下に、各遺跡ごとに検討結果を述べる。

- (1) 富沢遺跡第36次調査では、畦畔が検出された7層をはじめ、5a層、6層、8層、および11層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、5b層および9層でも稲作の可能性があると判断された。
 - (2) 富沢遺跡第37次調査では、畦畔が検出された4a層をはじめ、1層、2a層、3層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。
 - (3) 富沢遺跡第40次調査では、水田耕作土が検出された21層で稲作が行われた可能性があると判断された。
 - (4) 富沢遺跡第41次調査では、稲作の可能性のある土層は認められなかった。
 - (5) 富沢遺跡第42次調査では、7層および8a層で稲作が行われた可能性があると判断された。
 - (6) 富沢遺跡第44次調査では、6層、7層および13層で稲作の可能性があると判断された。
 - (7) 富沢遺跡第46次調査では、畦畔が検出された11a層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、畦畔が検出された10d層でも稲作の可能性があると判断された。
 - (8) 富沢遺跡第48次調査では、疑似畦畔が検出された11層、および10層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。
 - (9) 泉崎浦遺跡第4次調査では、5層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、6層および10a層でも稲作の可能性があると判断された。
 - (10) 山口遺跡第5次調査では、畦畔が検出された4a層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。
 - (11) 山口遺跡第6次調査では、1層、2層、3層、4層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、畦畔が検出された6層では稲作の可能性があると判断された。
 - (12) 山口遺跡第8次調査では、疑似畦畔が検出された5層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、畦畔が検出された4層、および6層では稲作の可能性があると判断された。
- つぎに、稲作の可能性が認められた各層について、そこで生産された稲穂の総量(単位:t/10a)を算出した。また、当時の稲穂の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稲むらがすべて水田内に還元されたと仮定して、各層で稲作が営まれた期間を推定した。これらの結果をまとめて第5表に示す。

第4表 富沢・山口・泉崎浦遺跡の各層位における稲作の可能性

※イネのプラント・オバールが検出された層位のみ表示

<記号説明>

- ◎…稲作の可能性特に高い ○…稲作の可能性高い
 △…稲作の可能性有り ▲…稲作の可能性考えにくい
 A…畦畔検出 B…疑似畦畔検出
 C…水田耕作土のみ検出（隣接調査区で畦畔検出）

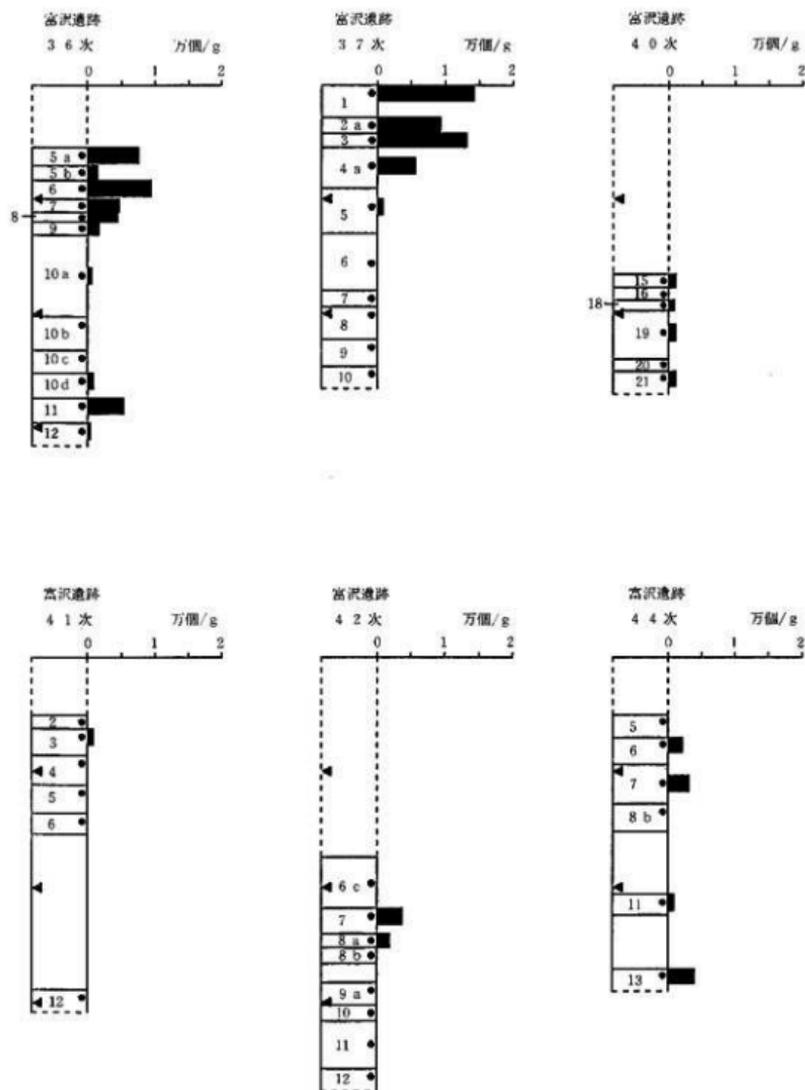
遺跡名	層位	判定	備考（発掘結果）	遺跡名	層位	判定	備考（発掘結果）
富沢36次	5 a	○	中世？以降	富沢44次	6	△	平安
	5 b	△	中世？以降		7	△	平安以前
	6	○	中世？以降		11	▲	平安以前
	7	○	A、中世？		13	△	平安以前
	8	○	平安～中世？	富沢46次	10 d	△	A、弥生
	9	△	平安～中世？		11 a	○	A、弥生
	10 a	▲	平安以前	富沢48次	10	◎	弥生～平安
	10 d	▲	平安以前		11	○	B、弥生
	11	○	平安以前	泉崎浦4次	5	○	平安以前
	12	▲	平安以前		6	△	平安以前
	富沢37次	1	◎	現代	10 a	△	平安以前
		2 a	○	近世	山口5次	4a ₁	○
3		◎	中世～近世	5		▲	不明
4 a		○	A、中世	山口6次	1	◎	現代
5		▲	平安以前		2	◎	古墳後期以降
富沢40次	15	▲	弥生		3	◎	古墳後期以降
	18	▲	弥生	4	◎	古墳後期以降	
	19	▲	弥生	5	▲	古墳後期以降	
	21	△	C、弥生	6	△	A、古墳後期	
	8	▲	不明	8	▲	古墳後期以前	
富沢41次	3	▲	不明	山口8次	4	△	A、中世
富沢42次	7	△	平安以前		5	○	B、平安
	8 a	△	平安以前		6	△	平安以前

第5表 稲作の可能性が認められた各層における稲稈生産総量および稲作期間の推定値

遺跡名	層位	生産量 (t/10a)	期間 (年間)	遺跡名	層位	生産量 (t/10a)	期間 (年間)
富沢36次	5 a	7.8	78	富沢46次	10 d	0.6	6
	5 b	1.1	11		11 a	2.4	24
	6	8.5	85	富沢48次	10	2.8	28
	7	2.7	27		11	1.5	15
	8	1.8	18	泉崎浦4次	5	2.3	23
	9	1.1	11		6	2.0	20
	11	3.4	34	10 a	1.7	17	
富沢37次	1	25.5	255	山口5次	4a ₁	3.6	36
	2 a	8.5	85	山口6次	1	48.6	486
	3	7.8	78	2	25.6	256	
	4 a	7.4	74	3	26.8	268	
富沢40次	21	0.3	3	4	44.0	440	
富沢42次	7	2.5	25	6	1.8	18	
	8 a	0.9	9	山口8次	4	3.8	38
富沢44次	6	2.4	24	5	3.5	35	
	7	5.1	51	6	1.5	15	
	13	6.6	66				

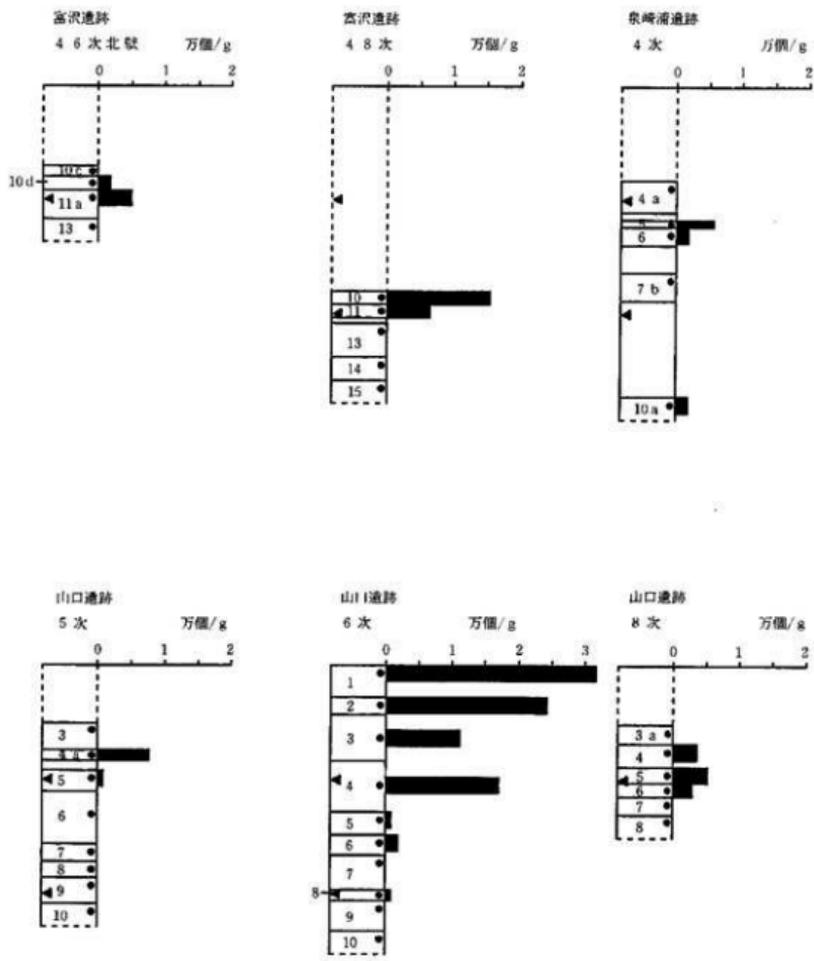
参考文献

- 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―, 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志 1979 プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)―福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O. sativa* L.)生産総量の推定―, 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―, 考古学と自然科学, 17: 73-85.



第107図 イネのプラント・オーバーの検出状況 (1)

(注) ◀印は50cmのスケール, ●印は試料採取箇所



第108図 イネのプラント・オバールの検出状況 (2)

第4章 まとめ

本書に掲載したのは富沢遺跡13地点（第36～48次調査）、泉崎浦遺跡1地点（第4次調査）、山口遺跡4地点（第5～8次調査）の計18地点で、この結果全地点において水田跡を中心とする遺構が検出された。検出された水田跡は水田跡の可能性のある層を含めるとのべ83面を数えるが、明確な形で検出されたのは18面である。そのうち時期がある程度限定できたのが、弥生時代7面（3期）、古墳時代1面、平安時代3面（1～3期）、平安時代～中世1面、中世3面（1～3期）である。

調査次数の増加に伴って近接する地点の調査例も多くなり、それによって各時期の水田の様相もある程度明らかになってきた。ここでは遺跡内における遺構の広がりや把握でき、第2章であり触れることが出来なかった遺構を中心に、時期別に述べることにする。

1. 縄文時代

(1) 富沢遺跡の中央からやや東側に位置する第28次調査区では、縄文時代早期後葉の生活面（第34層）が検出されているが（佐藤：1988）、第38・46次調査区では、この層は認められたものの層厚が薄く不安定な層で遺物も出土しなかった。このことから、第28次調査で認められた生活面はごく狭い範囲に限られることが推定される。

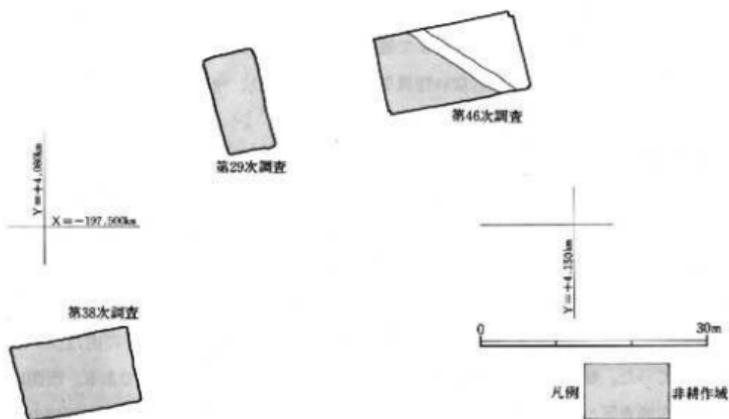
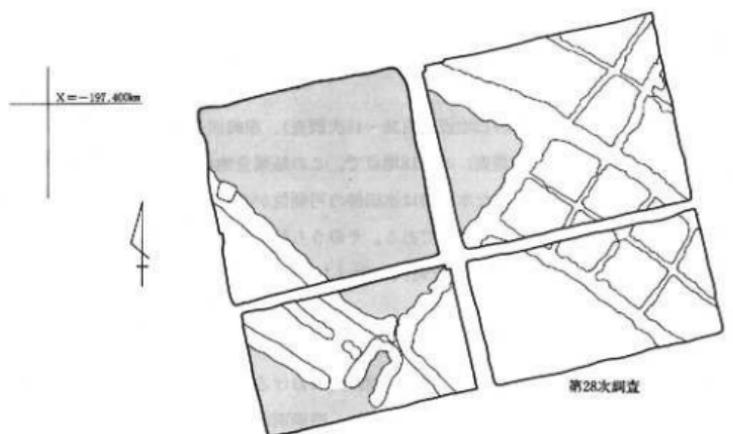
(2) 富沢遺跡第38次調査では、これまで遺物の出土例が皆無であった泥炭質粘土層から縄文土器が出土した。遺構も検出されない特異な出土状況であり、今後の調査の課題となる。

2. 弥生時代

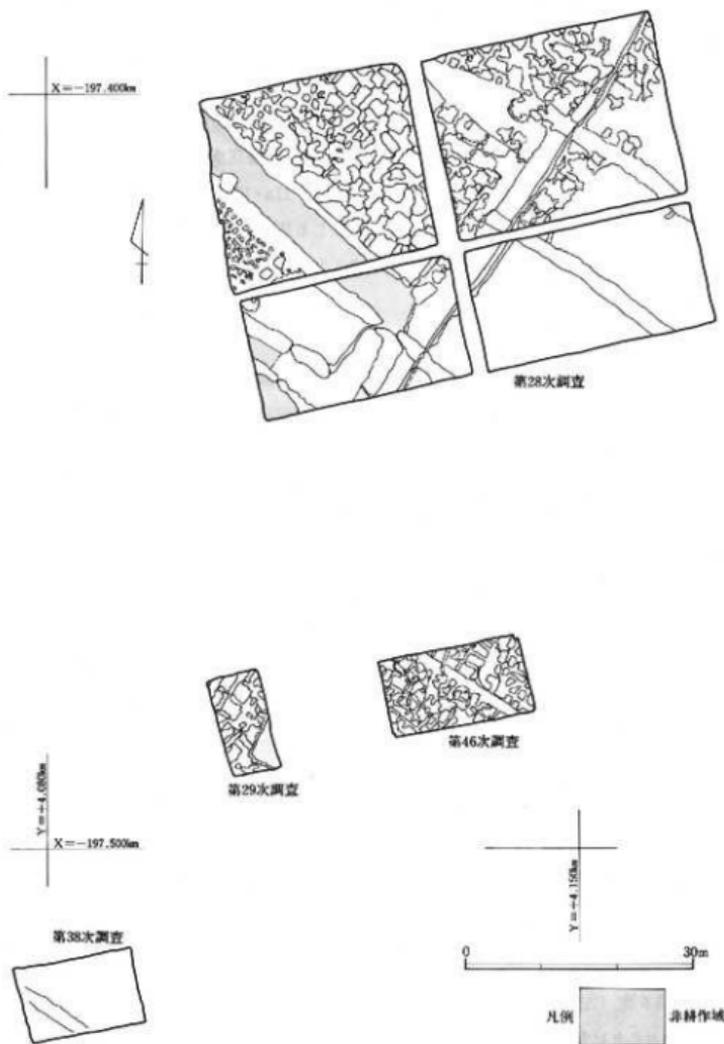
富沢遺跡の中央からやや東側の地域（第5・7・13・16・17・28・29次調査区）では、これまで弥生時代榊形甕式期から十三塚式期にかけて5期（第28次調査9a・10b・10d・11a・11c層）にわたる水田の変遷が確認されていた（佐藤：1988）。今回の第38・46次調査区はこの南から南西側に位置し、9a・10d・11a層の各水田跡の広がりや確認された。

(1) 11a層水田跡（榊形甕式期）は第46次調査区で大畦畔が検出され、その南西側が非耕作域となっていた。畦畔の方向は第28次調査区で検出されたものとほぼ同じである。西側に位置する第29次調査区が非耕作域であることは以前に確認されていたが、今回さらに西側の第38次調査区も同様に非耕作域であることが明らかになったことから、この時期の水田域は第46次調査区の北東側のみ広がるということが再確認されたことになる。（第109図）

(2) 10d水田跡（榊形甕式期以降、十三塚式期以前）は第38次調査区では、以前は非耕作域で



第109図 富沢遺跡第28・29・38・46次調査区11 a層水田跡



第110図 富沢遺跡第28・29・38・46次調査区10d 厩水田跡

あったところに大畦畔が造られ、第46次調査区では11a層の大畦畔を踏襲、または新たに大畦畔と小畦畔が設けられている。水田域や大畦畔の11a層からの変遷、区画方法は第28次調査結果とほぼ同じである。また、水田域が11a層の段階よりも大幅に拡大することも第28・29次調査結果をうらづけることとなった。

(3) 9a層水田跡(十三塚式期)の耕作域は、第46次調査区南東コーナーで認められたのみで、第38次調査区では全域が非耕作域となっていた。11a・10d層の大畦畔が踏襲されないことは以前の調査結果と同様であるが、耕作域は必ずしも周辺全域に及ばず、第28次調査区で認められたような非耕作域が他の地点にも存在することが確認された。

3. 古墳時代

山口遺跡第6次調査では栗田式の土器を伴う水田跡が検出された。この時期の水田跡は第24次調査(上藤:1988)・第30次調査(太田他:1988)で確認されているが、遺跡内の検出数が少ないため水田域の広がりなどはまだ不明な点が多い。

泉崎浦遺跡では、以前の調査(吉岡:1983、主浜:1988)によって住居跡や遺物包含層が検出されているが、今回の第5次調査では確認できなかった。

4. 平安時代

(1) 富沢遺跡北西部の第47次調査区では、ほぼ真北方向の大畦畔が検出された。時期は灰白色火山灰(白鳥:1980)降下以降と推定される。灰白色火山灰降下前後の時期(10世紀前半頃)の水田跡については条里型土地割との関連が考えられているが(平間:1988)、その坪境の大畦畔は灰白色火山灰降下以降も踏襲される場合が多い。したがって、第47次調査で検出された大畦畔も灰白色火山灰降下前後の時期には既に存在していた可能性が高く、条里型土地割における坪境の畦畔に相当するものであることが考えられる。

(2) 富沢遺跡北西部ではこれまで調査例が少なく、北西の丘陵からこの付近に張り出す微高地上の状況は不明であった。今回の富沢遺跡第36・42・45・48次調査、及び泉崎浦遺跡第4次調査は微高地上やその周辺の調査であったが、富沢遺跡第42次調査を除いて水田耕作土は認められず、平安時代の面は砂層となっていた。これまでの周辺部の調査(富沢遺跡第2次(吉岡:1983)、第6次(佐藤:1983)、第19・20・21次(渡辺:1986))によって、微高地の縁辺まで水田域が及ぶことは判明していたが、今回の調査結果によれば、微高地上は水田としては利用されず、比較的広範囲に非耕作域が広がっていた可能性が高い。一方、集落については、古墳時代の住居跡が確認されるので(吉岡:1983)平安時代の住居の存在も予想されるが、まだ未検出である。山口遺跡の自然堤防上ではこの時期の集落が確認されているが(田中他:1976)、こ

の付近のように土砂の供給が激しい場所における土地利用の状況についてはまだ不明な点も多く、今後の調査の課題となろう。

5. 中世

富沢遺跡東端の第40次調査では、建物跡は検出されなかったものの、居館跡に係わる溝跡が検出された。第15次調査では2時期の変遷としてとらえていたが、今回の調査によって3時期にわたることが層位的に確認された。

6. 近世以降

近世以降の水田跡については、時期が確定できる遺構がなかった。

富沢遺跡第36次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤鉄土器	その他 原始土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 器製品	金属 製品	鉄	木製品	樹木	種子	その他
2 層							1									
3 層					2											
7 層 水田跡				1			1									
9 層			1													
計			1	1	2		2									

富沢遺跡第37次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤鉄土器	その他 原始土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 器製品	金属 製品	鉄	木製品	樹木	種子	その他
2 a 層			2	1		1	2									
2 b 層			1			1				1					1	
2 c 層							2									
4 a 層 水田跡				1		2	1	1			1	8			2	
4 b 層			1													
5 a 層					1				1	1						
6 層														1	31	
計			4	2	1	6	3	1	1	2	1	8		1	34	

富沢遺跡第38次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤鉄土器	その他 原始土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 器製品	金属 製品	鉄	木製品	樹木	種子	その他
2 層			3		3	2	25									
3 層	1								1							
10 d 層 水田跡														48	15	
19 c 層	1														1	
SD1			1								1	16				
SD2																
計	2		4		3	2	25		1		1	16		48	16	

第6表 富沢遺跡第36～38次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第39次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	鉄	木製品	漆木	種子	その他
1 層						1	10	1								
2 層			1		1	2	2			1	2	9				
3 a層水田跡		1	1	3		3				1		14			1	
3 b層			4													
4 a層水田跡			3							4		1		2	1	
4 b層															1	
SK1、2層							1									
変 形		2	1							1						
計		10	3	3	1	6	13	1		7	2	24		3	2	

富沢遺跡第40次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	鉄	木製品	漆木	種子	その他
4 層			4		21	2	11	3	1							
5 層						1										
6 層			5	1		1										
7 層			4		7											
8 層		1											2	2	1	
SD1覆土			1	1	2		2			2						1
SD1底面					2		1			1						
SD3・4			1		2	1										
SD5			2													
計		1	17	2	17	4	14	3	1	3			2	2	2	

富沢遺跡第41次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	鉄	木製品	漆木	種子	その他
2 層			1													
SD1底面					1							4				
計			1		1							4				

富沢遺跡第42次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	鉄	木製品	漆木	種子	その他
1 層							3									
3 b層			1			1							1			
4層水田跡						1										
8 b層										2						
計			1			2	3			2			1			

第7表 富沢遺跡第39～42次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第43次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 石製品	金属 製品	杖	木製品	樹木	種子	その他
20 a 層															100	
20 b 層															16	
21 層															407	
22 層													9	13		
25 層													1	3		
SD2	9															
計	9												10	29		

富沢遺跡第44次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 石製品	金属 製品	杖	木製品	樹木	種子	その他
2 層					1		2									
3 層			1		2	1	2									
4 層			2			6										
5 層			40			3										
礎 丸			3													
計			46		3	10	4									

富沢遺跡第46次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 石製品	金属 製品	杖	木製品	樹木	種子	その他
1 層			8		5	2	88	11		1	8					3
3 層		1	4	2	2		1		1							
4 層		1	1	1	1											
9 a 層水田跡														3		
10 a 層															7	
10 c 層										1						
11 a 層水田跡										3						
計		2	13	3	7	2	89	11	1	3	8			3	7	3

富沢遺跡第47次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤絵土器	その他 素焼土器	須恵器	陶器 磁器	瓦	土製品	石 石製品	金属 製品	杖	木製品	樹木	種子	その他
2 層							1									
3 層							2									
4 層水田跡			4	11		6									1	
5 層			3	5											1	
7 層		1														
8 層										3						
計		1	7	16		6	3			3					2	

第8表 富沢遺跡第43～47次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第48次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他 赤焼土器	須恵器	高岳 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	杖	木製品	漆木	種子	その他
2 層				1	1											
3 層			1													
4 層			1													
11層の下部		2														
計		2	2	1	1											

泉崎浦遺跡第4次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他 赤焼土器	須恵器	高岳 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	杖	木製品	漆木	種子	その他
1 層								1								
5 層											1					
11 層														1		
S D 2			1					5	3			1				
計			1					5	4			2		1		

山口遺跡第5次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他 赤焼土器	須恵器	高岳 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	杖	木製品	漆木	種子	その他
4+5層の下部		2														
11 層										3						
計		2								3						

山口遺跡第6次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他 赤焼土器	須恵器	高岳 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	杖	木製品	漆木	種子	その他
1 層			2					2	1							
2 層			6		19											
3 層			6		13		1								2	
5層の下部			1													
計			15		32		3	2	1						2	

山口遺跡第7次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他 赤焼土器	須恵器	高岳 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	杖	木製品	漆木	種子	その他
6 層		2														
計		2														

第9表 富沢遺跡第48次・泉崎浦遺跡第5次・山口遺跡第5～7次調査出土遺物集計表

山口遺跡第8次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他 赤焼土器	須恵器	高岳 磁器	瓦	土製品	石 器 石製品	金属 製品	杖	木製品	漆木	種子	その他
4層の下部				3	1	3									1	
計				3	1	3									1	

第10表 山口遺跡第8次調査出土遺物集計表

引用・参考文献

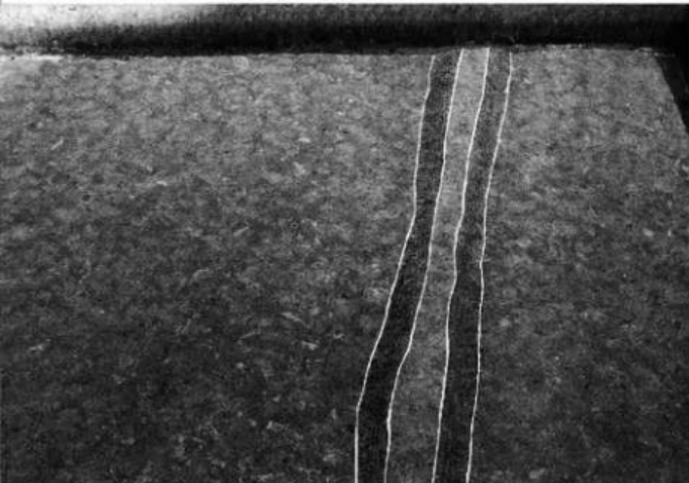
- 荒井 格 1984 「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集 仙台市教育委員会
- 太田昭夫他 1988 「富沢遺跡第30次調査現地説明会資料」仙台市教育委員会
- 金森安孝 1984 「富沢水田遺跡」『年報5』仙台市文化財調査報告書第66集 仙台市教育委員会
- 金森安孝 1984 「富沢水田遺跡・下ノ内流地区」『仙台平野の遺跡群Ⅲ』仙台市文化財報告書第65集 仙台市教育委員会
- 金森安孝他 1987 「富沢遺跡—東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第104集 仙台市教育委員会
- 工藤哲司他 1984 「富沢水田遺跡—病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書」仙台市文化財報告書第67集 仙台市教育委員会
- 工藤哲司・太田昭夫 1988 「富沢遺跡—24次調査 富沢中ノ学校地区発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第113集 仙台市教育委員会
- 経済企企画 1967 「地形・表層地質・土じょう 仙台」
- 斎野裕彦・荒井 格 1983 「鳥居原遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財報告書第56集 仙台市教育委員会
- 斎野裕彦 1984 「富沢水田遺跡・鳥居原地区」『仙台平野の遺跡群Ⅲ』仙台市文化財報告書第65集 仙台市教育委員会
- 斎野裕彦 1985 「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ』仙台市文化財報告書第82集 仙台市教育委員会
- 斎野裕彦他 1987 「富沢—富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第98集 仙台市教育委員会
- 佐藤 隆 1983 「泉崎浦遺跡」『年報4』仙台市文化財報告書第57集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1987 「富沢遺跡第28次発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第114集 仙台市教育委員会
- 佐藤 洋他 1981 「山口遺跡—発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第33集 仙台市教育委員会
- 佐藤 洋 1988 「富沢遺跡—第34次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第118集 仙台市教育委員会
- 渋谷孝雄 1980 「泉崎浦遺跡試掘調査報告」『年報1』仙台市文化財調査報告書第23集 仙台市教育委員会
- 主浜光明 1988 「富沢遺跡—第33次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第117集 仙台市教育委員会
- 主浜光朗 1988 「泉崎浦遺跡—発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第119集 仙台市教育委員会
- 白鳥貞一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城調査研究所
- 高橋勝也 1983 「中谷地遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集 仙台市教育委員会
- 田中則和他 1984 「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集 仙台市教育委員会
- 田中則和 1985 「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第75集 仙台市教育委員会
- 田中則和 1985 「山口遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第75集 仙台市教育委員会
- 豊島正幸 1987 「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢—富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 平間亮輔 1988 「平安時代の乗形型土地割について」『日本における稲作農耕の起源と展開—日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム—資料集』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会
- 松本清一 1987 「富沢遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅶ』仙台市文化財調査報告書第97集 仙台市教育委員会
- 真山 悟他 1988 「富沢遺跡—泉崎前地区」宮城県文化財報告書第129集 宮城県教育委員会
- 宮崎 明 1988 「富沢遺跡(Ⅰ)第31次調査・(Ⅱ)第32次調査」『年報9』仙台市文化財調査報告書第122集 仙台市教育委員会
- 吉岡恭平 1982 「山口遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第40集 仙台市教育委員会

- 古岡恭平 1983 「泉崎浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集 仙台市教育委員会
- 古岡恭平 1983 「泉崎浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集 仙台市教育委員会
- 古岡恭平 1986 「富沢水田遺跡鳥居原地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第89集 仙台市教育委員会
- 渡辺 誠 1986 「富沢水田遺跡」『年報7』仙台市文化財調査報告書第94集 仙台市教育委員会
- 渡辺 誠 1986 「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第87集 仙台市教育委員会
- 渡部弘美 1987 「富沢遺跡発掘調査」『年報8』仙台市文化財調査報告書第107集 仙台市教育委員会

調査参加者

相沢 史子	青山 諒子	赤井沢 サダ子	赤川 千広	浅野 ヤシ子
浅見 シゲ	浅理 健一	厚海 宗裕	安達 八千代	阿部 淳
阿部 いしよ	阿部 すえ子	阿部 清太郎	阿部 美代寿	阿部 洋子
阿部 よね子	坂坂 正弘	志岐 豊子	石垣 綱子	石垣 英子
板橋 幸子	板橋 静江	板橋 スエノ	板橋 孝子	板橋 のり子
板橋 みい子	板橋 洋子	入間川 きみ	岩井 レイ子	植野 美澄子
山内 昌広	遠藤 いな子	遠藤 金蔵	遠藤 タイ子	遠藤 照子
太田 兼也	太田 とくよ	大友 勇	大友 フミ子	大沼 みさほ
小川 良子	小田島 智恵子	鬼沢 悦子	小沼 ちえ子	加賀美 要子
加島 みえ子	柏倉 セツ子	工藤 光昭	熊谷 久美子	郡山 和彦
小林 斎美	小林 三佳	野瀬 淑子	斎藤 とき子	斎藤 八代枝
佐久間 長子	佐々木 光江	佐藤 新一	佐藤 さつえ	佐藤 祥みよ
佐藤 ちよし	佐藤 たみえ	庄司 けき子	庄司 武夫	白鳥 修
須賀 栄子	菅井 キノエ	菅井 君子	菅井 きみ子	菅井 清子
菅井 ちよの	菅井 美枝子	菅田 みき子	菅田 わくり	菅埜 和美
菅ノ又 三千代	菅谷 裕子	鈴木 いし	鈴木 かつ子	鈴木 幸子
鈴木 つや子	鈴木 景	鈴木 よしえ	関谷 栄子	高橋 たづよ
高橋 とみ子	高橋 広子	高橋 裕美	高橋 良子	武田 芳子
竹森 光子	戸田 泰史	永野 泰治	西原 聡美	蓮沼 英子
蓮沼 秀子	早川 裕子	早坂 みつえ	原田 由美子	生田 昭三
日野 かつの	早間 由広	藤原 ミサ	布田 敦	住代子
星 愛子	洞口 秋子	木郷 孝治	真 豊	松浦 喜加子
松川 有美	松木 慎一	松田 稔	三浦 孝行	三浦 えみ子
三浦 きよの	三浦 フミエ	宮 輪	村上 篤	村上 令子
村田 佳子	森 節子	森 剛男	守谷 恵子	諸 沢樹
山出 貞子	山田 千代子	山田 やす子	吉田 八重子	我妻 美代子
渡辺 イチ子	渡辺 幸子	渡辺 久子	渡部 麗子	

写 真 图 版



富沢遺跡第36次調査
写真1
7層水田跡(西より)

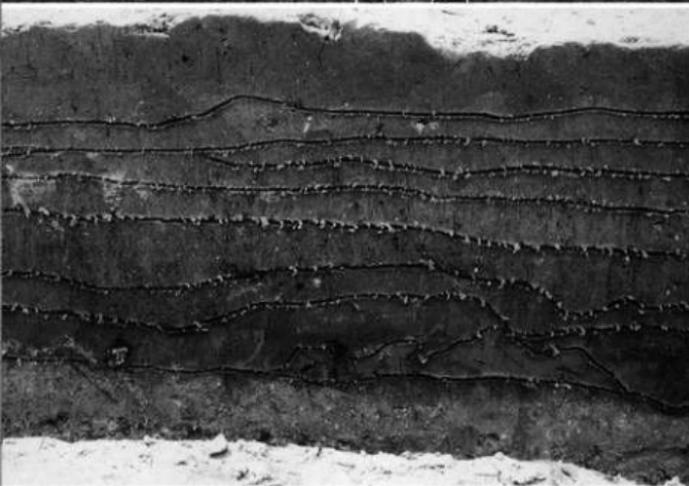


写真2
7層水田跡
畦畔断面(東壁)



富沢遺跡第37次調査
写真3
4a層水田跡(畦畔1・2)
(南より)

写真 4
4 a 層水田跡
(畦畔 3・S D 1)
(北より)

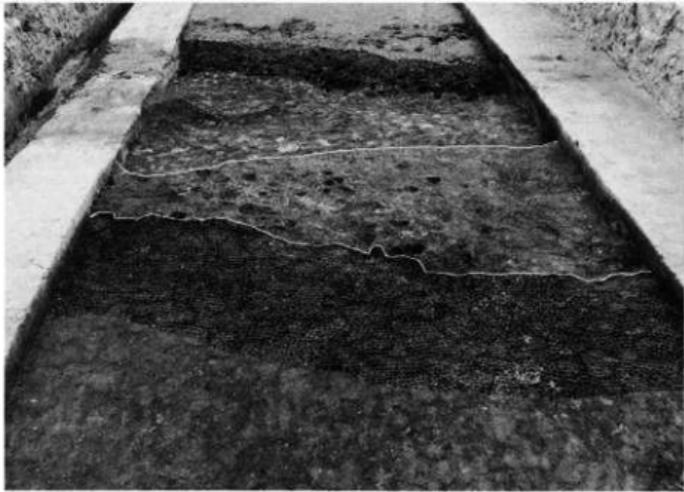
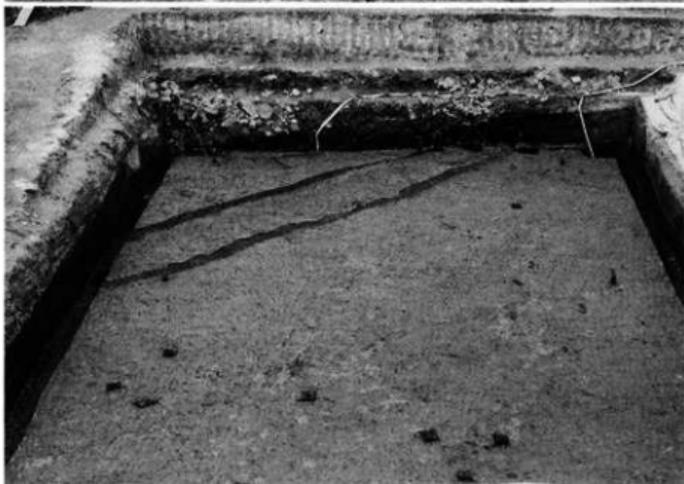


写真 5
4 a 層水田跡(畦畔 4)
(南より)



富沢遺跡第38次調査
写真 6
10 d 層水田跡
(東より)



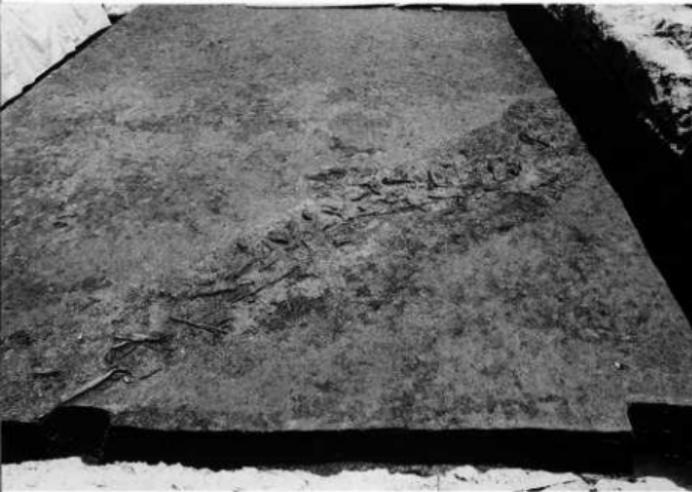


写真7
大睦群中の木片出土状況
(西より)

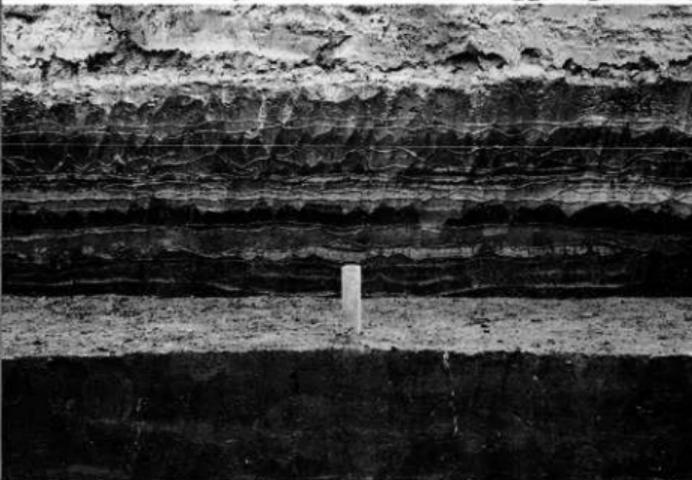


写真8
10d層水田跡大睦群断面
(南壁)



写真9
19c層土器出土状況

富沢遺跡第39次調査
写真10
3 a層水田跡
(北より)



写真11
3 a層出土杭 (No.20)



写真12
3 a層出土杭 (No.13~15)

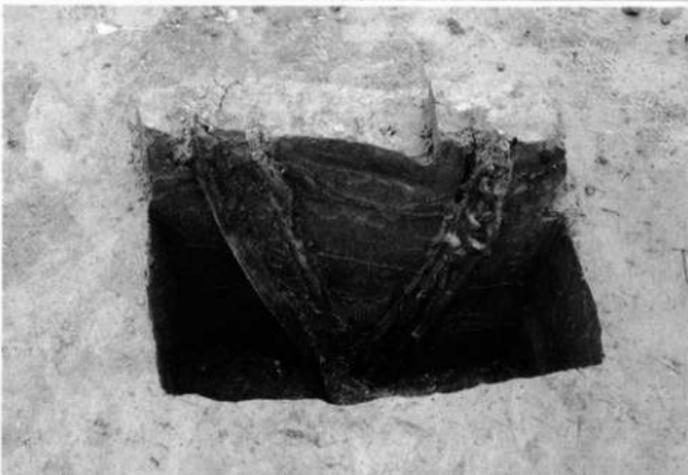




写真13
4 a層水田跡
(北より)

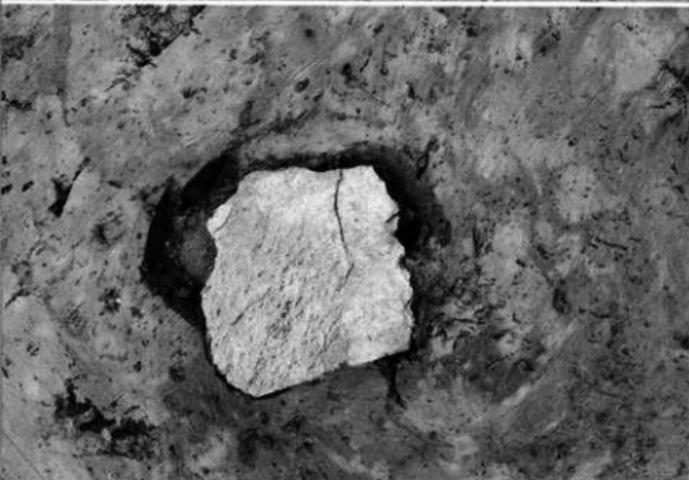


写真14
4 a層水田跡
石器出土状況



富沢遺跡第40次調査
写真15
4層上面遺構(SD1・2)
(東より)

写真16

5層上面遺構(SD3~5)
(東より)



写真17

6層上面遺構(SD6~9)
(東より)



富沢遺跡第41次調査
写真18

4層上面遺構(SD1)
(南より)





富沢遺跡第42次調査
写真19
4層水田跡
(北より)

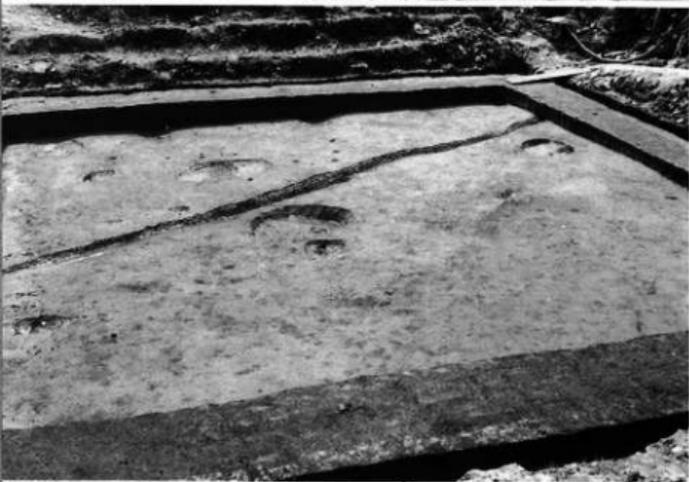


写真20
6a層上面遺構
(SD1・SK1~7)
(北より)

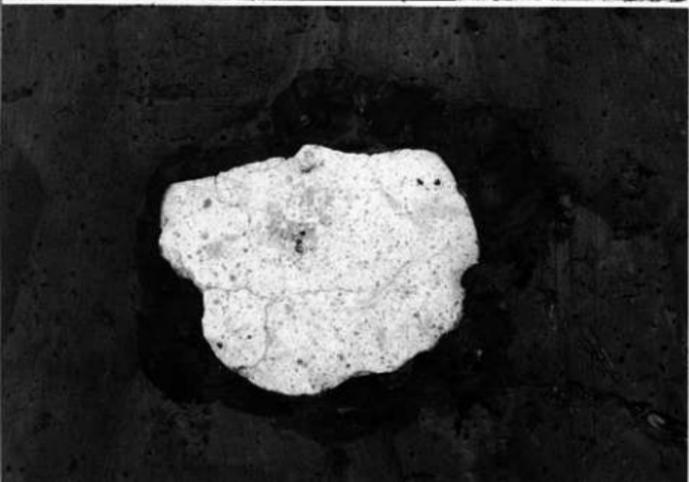


写真21
11層上面石製品出土状況

写真22
12層上面遺構(S D 3)
(西より)



富沢遺跡第43次調査
写真23
19層～22層断面

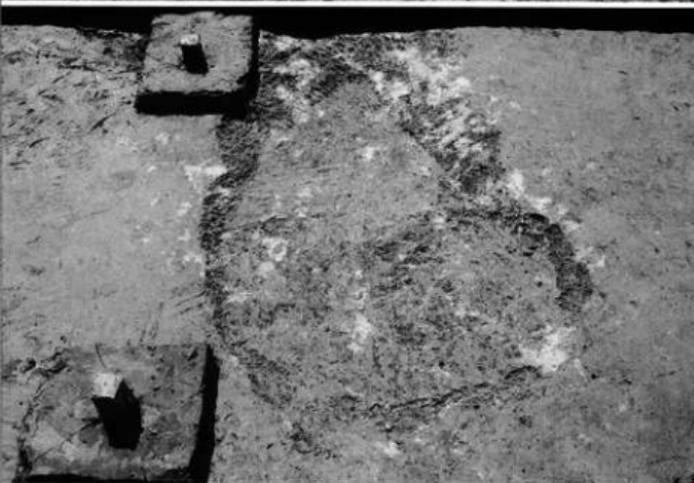


写真24
22層上面樹木出土状況 (1)





写真25
22層上面樹木出土状況(2)
(南より)



富沢遺跡第44次調査
写真26
6層上面遺構(SK1)
(北より)



富沢遺跡第46次調査
写真27
10a層水田跡(1)
(東より)

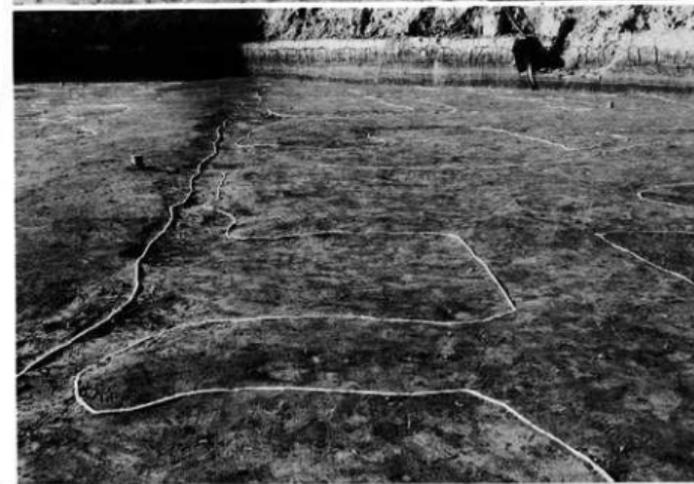
写真28
10d層水田跡(2)
(西より)



写真29
10d層水田跡(3)
(北西より)



写真30
10d層水田跡(4)
(南東より)



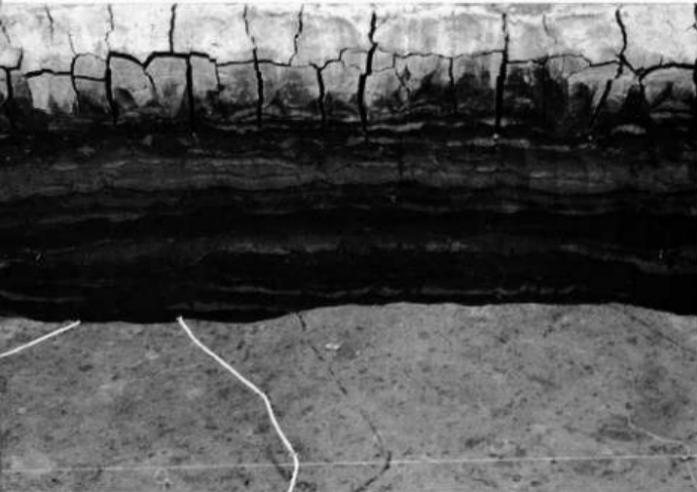


写真31
10d層水田跡
大畦畔断面(北壁)



写真32
10d層水田跡
大畦畔断面(西壁)

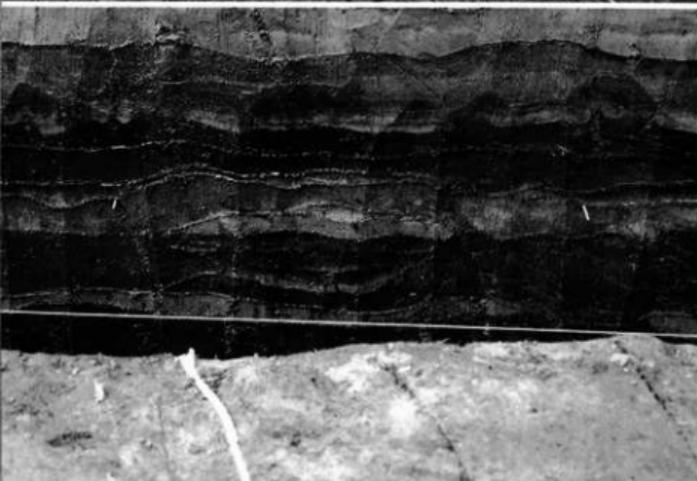


写真33
10d層水田跡
畦畔断面(西壁)

写真34
11 a層水田跡
(東より)

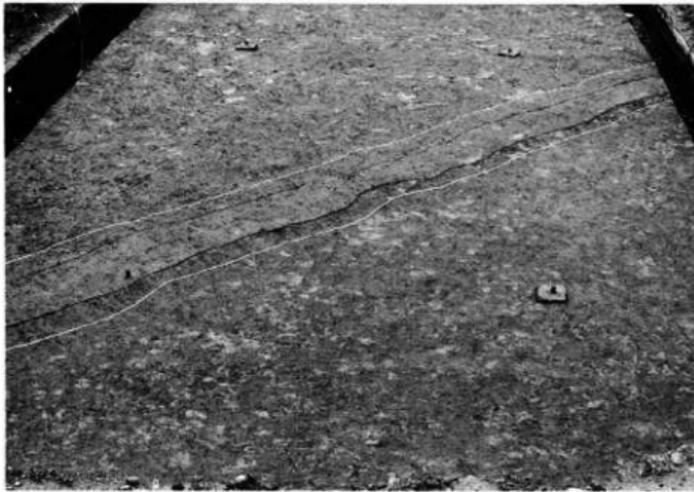


写真35
11 a層水田跡
石器出土状況



富沢遺跡第47次調査
写真36
4層水田跡
(西より)



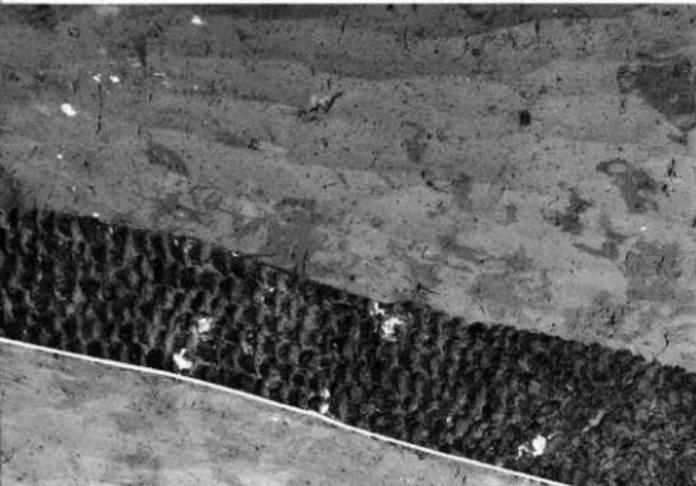


写真37
4層水田跡大畦畔上の
灰白色火山灰検出状況



写真38
4層水田跡土器出土状況



写真39
8層上面遺構(SD1)
(東より)

写真40
8層石器出土状況



富沢遺跡第48次調査
写真41
8 a層水田跡疑似畦畔
確認状況 (西より)



写真42
11層石器出土状況



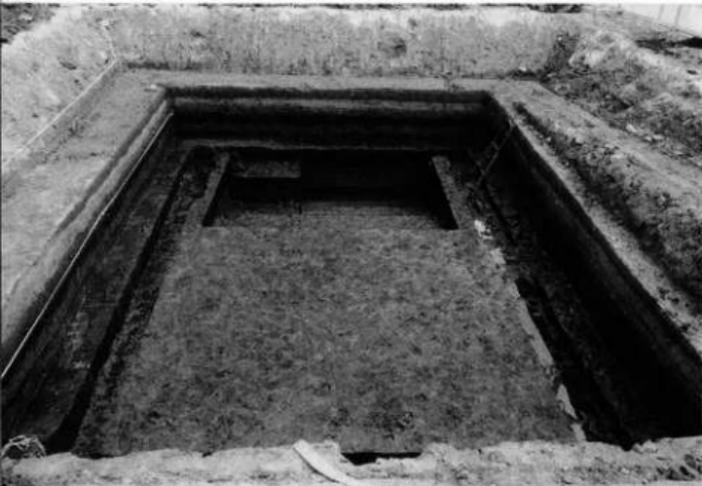


写真43
調査区全景
(南より)



泉崎浦遺跡第4次調査
写真44
SD1・2断面(東壁)

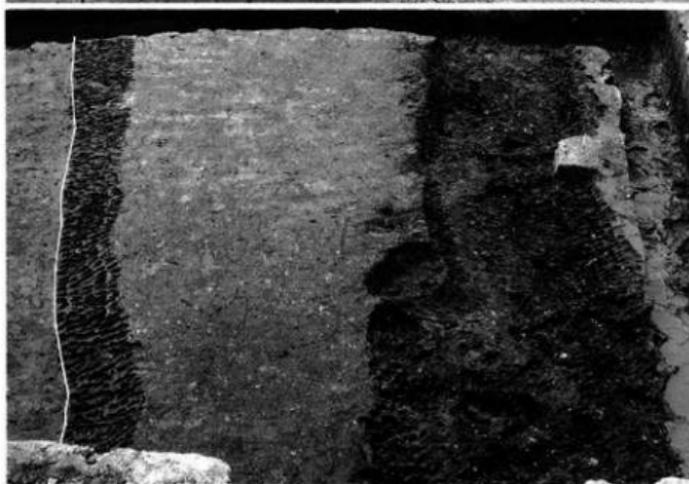


写真45
10層上面遺構(SD3)
(南東より)

山口遺跡第5次調査
写真46
4 a層水田跡
畦畔・SD2確認状況
(東より)



写真47
4 a層水田跡
畦畔・SD2検出状況
(東より)



山口遺跡第6次調査
写真48
6層水田跡
(南より)





山口遺跡第7次調査
写真49
SD 2断面(東壁)



山口遺跡第8次調査
写真50
4層水田跡
(南より)

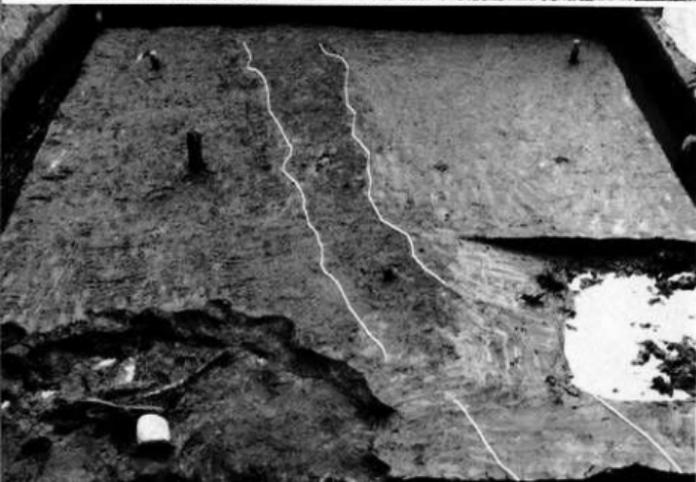


写真51
5層水田跡疑似畦畔
確認状況(東より)

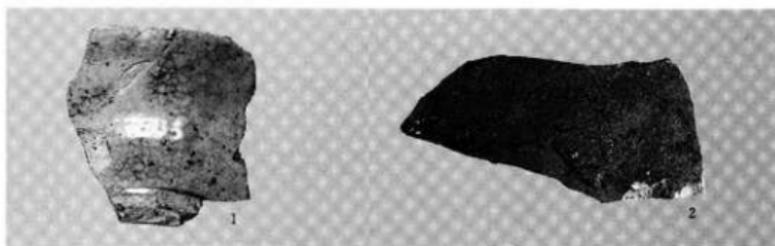


写真52 富沢遺跡第36次調査出土遺物

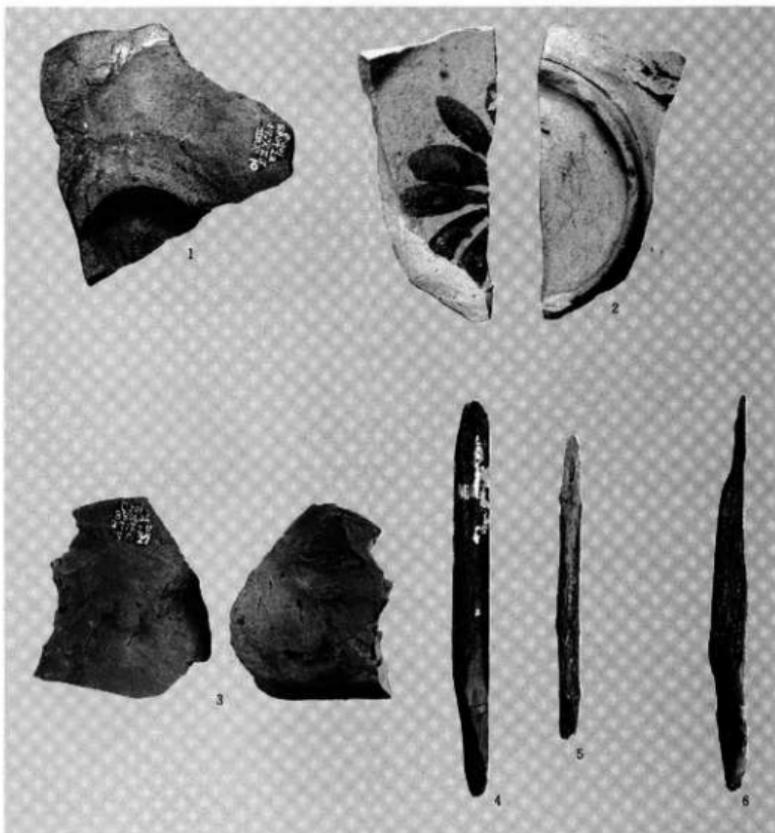


写真53 富沢遺跡第37次調査出土遺物



写真54 富沢遺跡第38次調査出土遺物



写真55 富沢遺跡第39次調査出土遺物 (1)

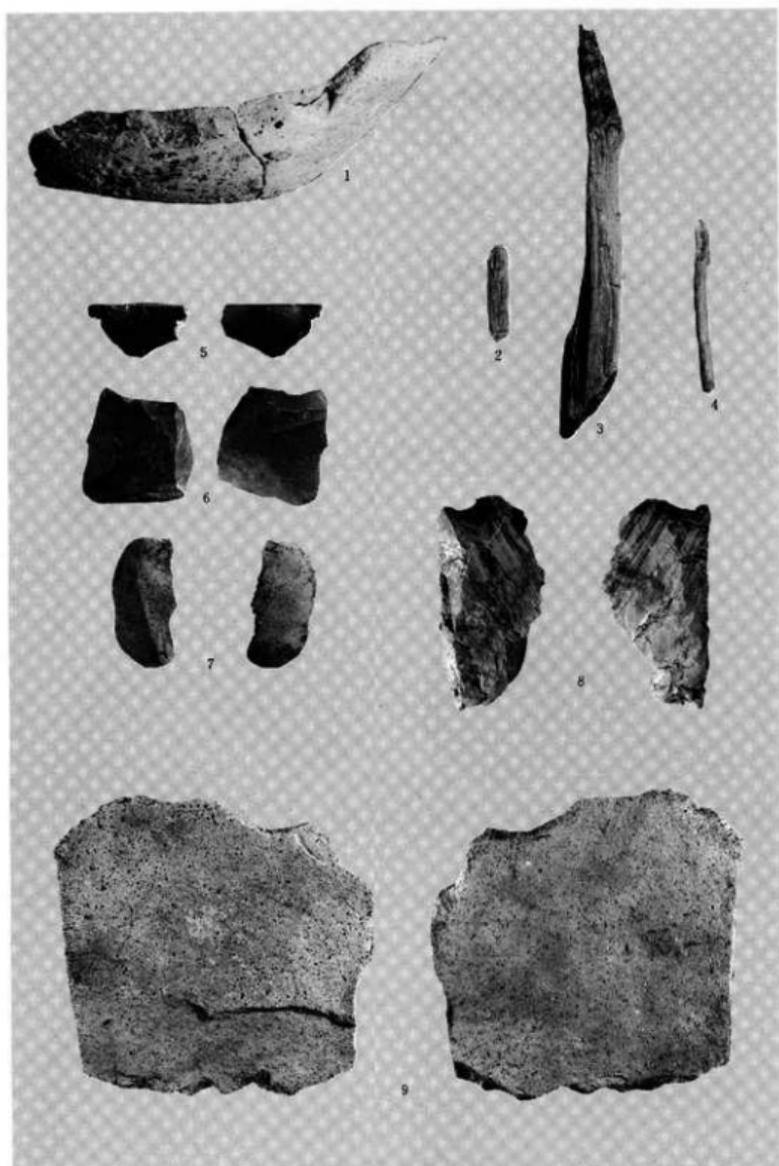


写真56 富沢遺跡第39次調査出土遺物 (2)

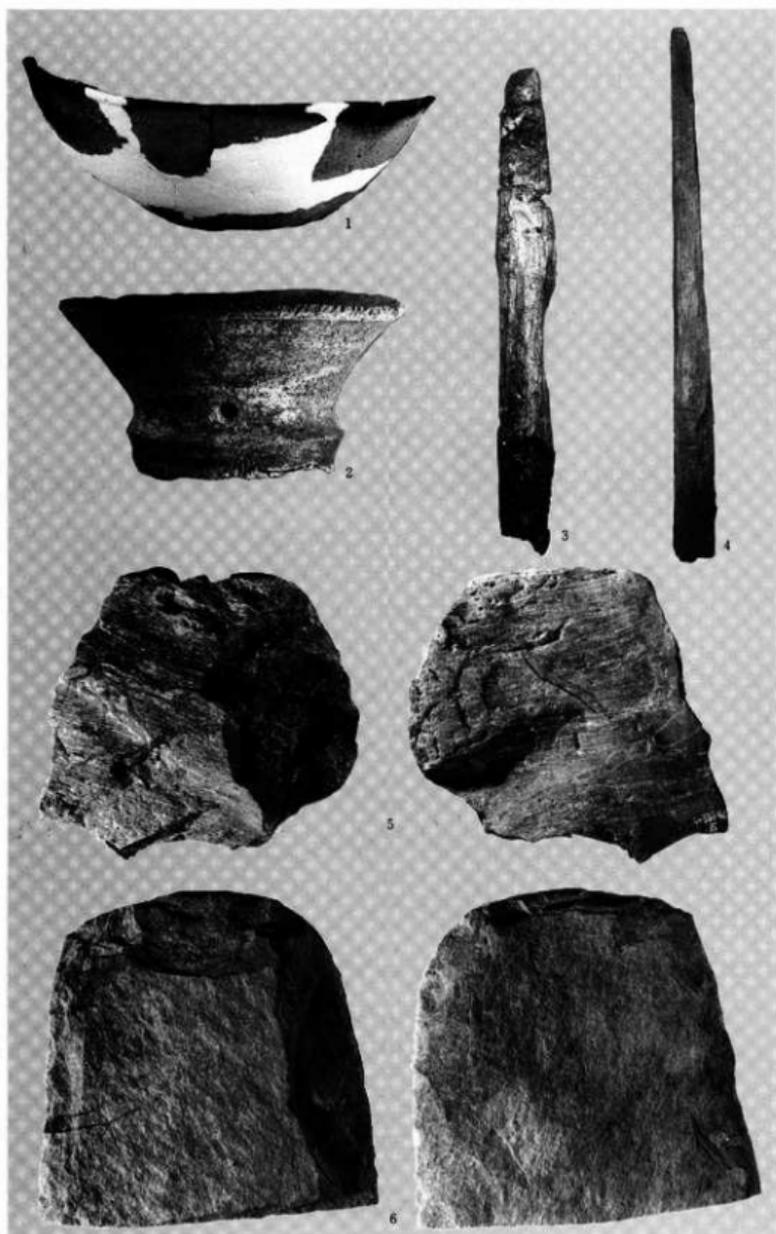


写真57 富沢遺跡第40次調査出土遺物

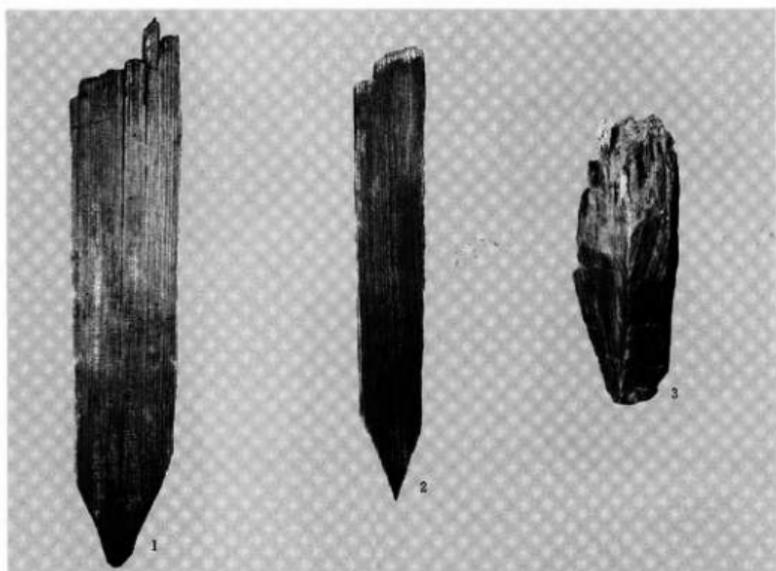


写真58 富沢遺跡第41次調査出土遺物



写真59 富沢遺跡第42次調査出土遺物

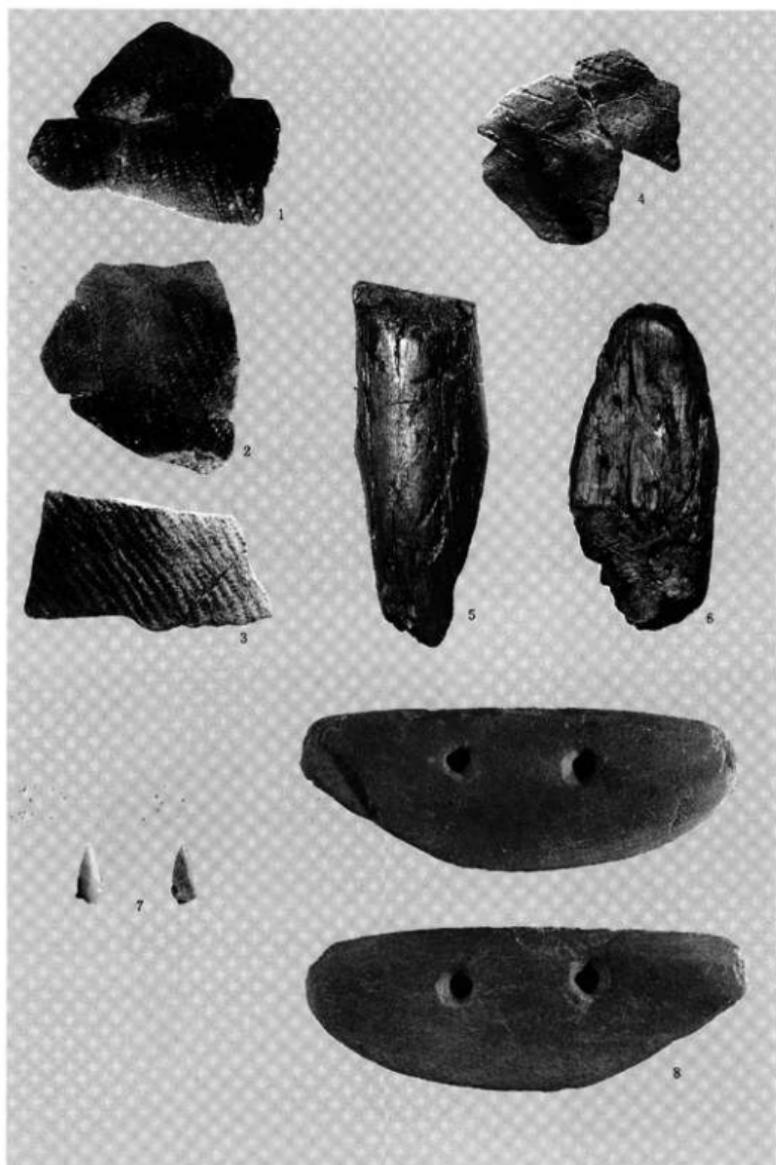


写真60 富沢遺跡第46次調査出土遺物

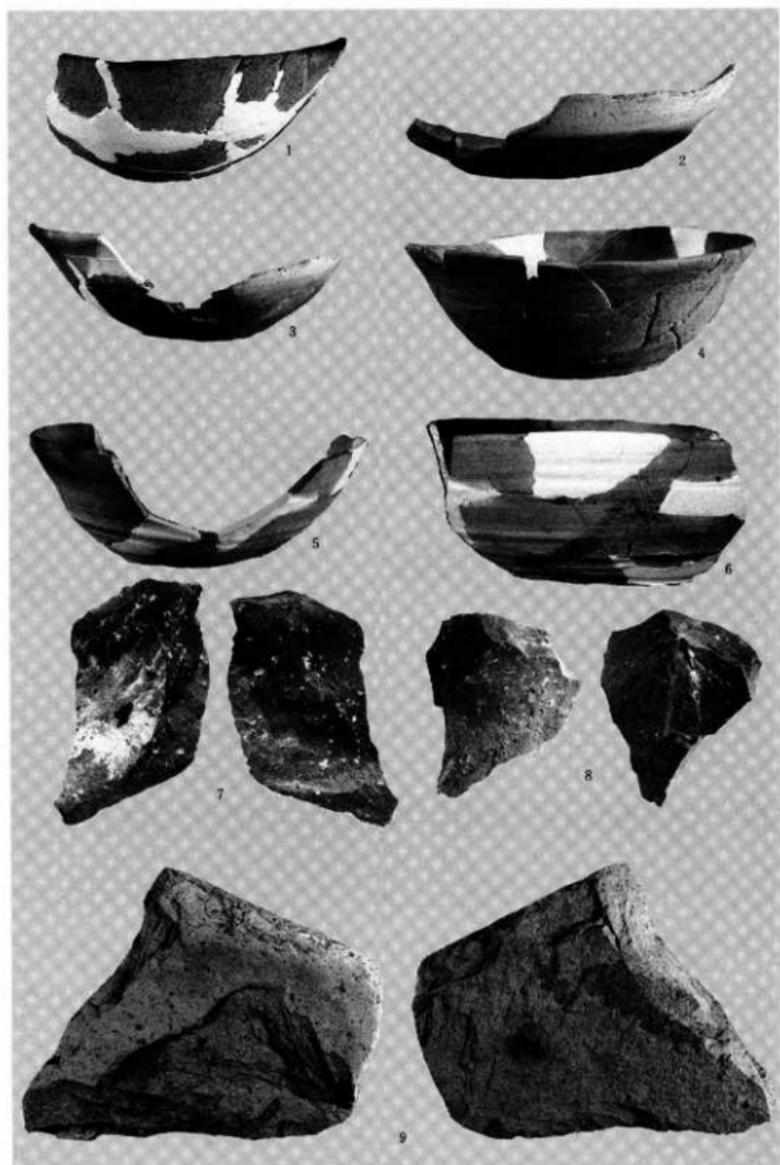


写真61 富沢遺跡第47次調査出土遺物

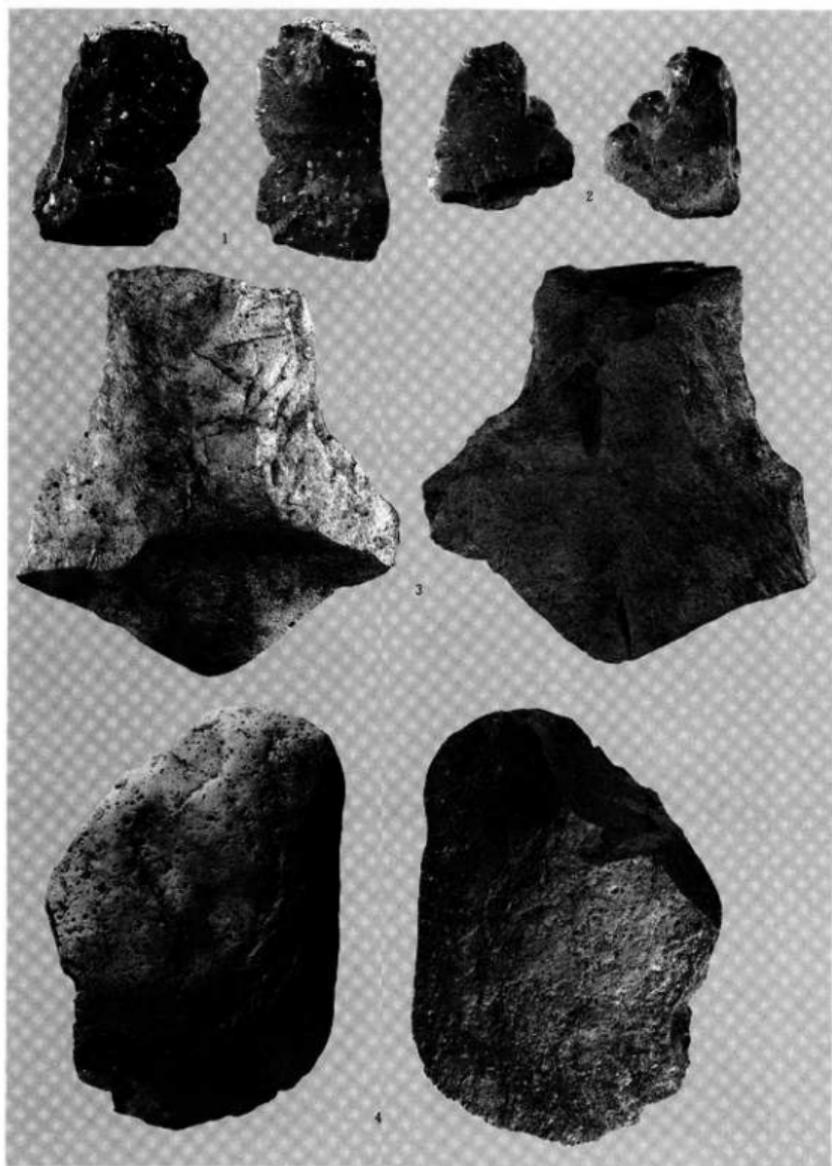


写真62 富沢遺跡第48次調査出土遺物(1)

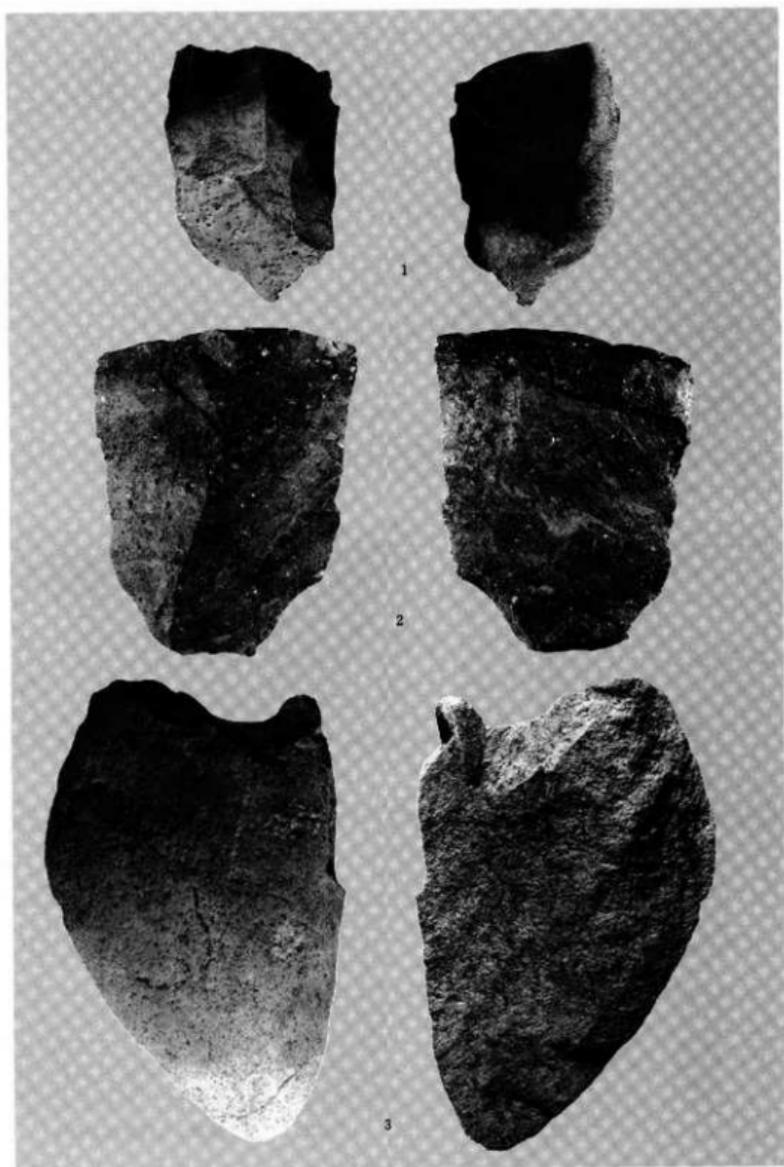


写真63 富沢遺跡第48次調査出土遺物(2)



写真64 泉崎浦遺跡第4次調査出土遺物

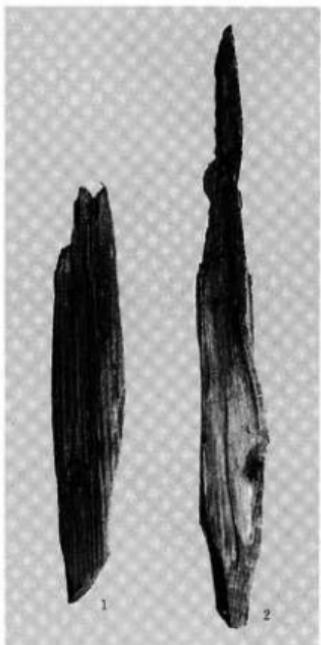


写真68 山口遺跡第8次調査出土遺物

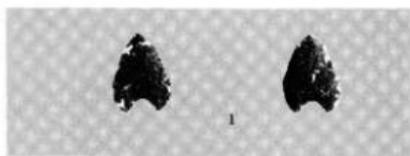


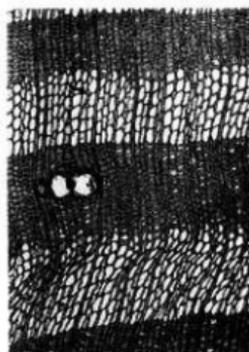
写真65 山口遺跡第5次調査出土遺物



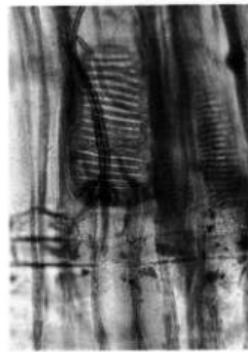
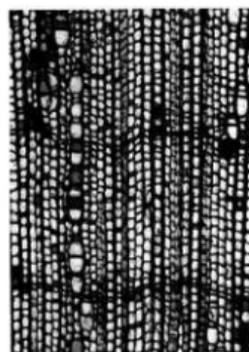
写真66 山口遺跡第6次調査出土遺物



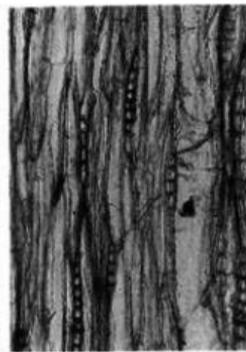
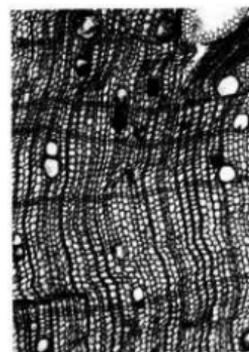
写真67 山口遺跡第7次調査出土遺物



1 a. カラマツ属 (MYG-94) 横断面×40. 1 b. 同 接線断面×100. 1 c. 同 放射断面×400.



2 a. ハンノキ属 根材(MYG-85) 横断面×40. 2 b. 同 接線断面×100. 2 c. 同 放射断面×200.



3 a. トネリコ属 根材(MYG-93) 横断面×40. 3 b. 同 接線断面×100. 3 c. 同 放射断面×200.

写真69 富沢遺跡第43次調査出土樹木顕微鏡写真

仙台市文化財調査報告書第128集

富沢・泉崎浦・山口遺跡

—富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第4次・
山口遺跡第5～8次発掘調査報告書—
1989年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市立町24-24 電話(263)1166

